岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第195集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

（平成４年度分）

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

（平成４年度分）

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

序

岩手県は、埋蔵文化財の宝庫だといわれています。この先人が遺した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。一方、幹線道路網の整備など、社会資本を充実させていくことも行政上の重要な施策であります。そのため埋蔵文化財の保護と地域開発の調和ということもまた今日的な課題となっております。

こうした見地から、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターでは、岩手県教育委員会文化課の調整と指導のもとに、道路建設などに関連して止むを得ず消滅していく遺跡については発掘調査を行い、発掘調査報告書として記録保存する措置をとってまいりました。今年度は県内の５市７町１村の32遺跡、161,195㎡の調査を実施しましたが、このうち東北自動車道秋田線など道路建設関連の遺跡は26遺跡に及びました。

調査しました遺跡の年代は、旧石器時代から近世まで、殆ど全ての時代にわたっております。注目された遺跡では、山田町上村遺跡で検出された製鉄遺構があり、岩手県の製鉄の歴史を解明する資料として注目されています。

この発掘調査略報は、調査報告書の刊行に先だって、今年度に調査された32遺跡の調査結果の概要を収録したものであります。本書が研究者のみならず、多くの方がたに活用され、埋蔵文化財へのご理解を一層深めていただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査を進めるにあたり、ご援助とご協力を賜りました委託者をはじめ，地元教育委員会やご教示を賜りました関係各位に対し、衷心より感謝申し上げます。

平成４年12月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　工　藤　　巌

目　次

I. 日本道路公団関係

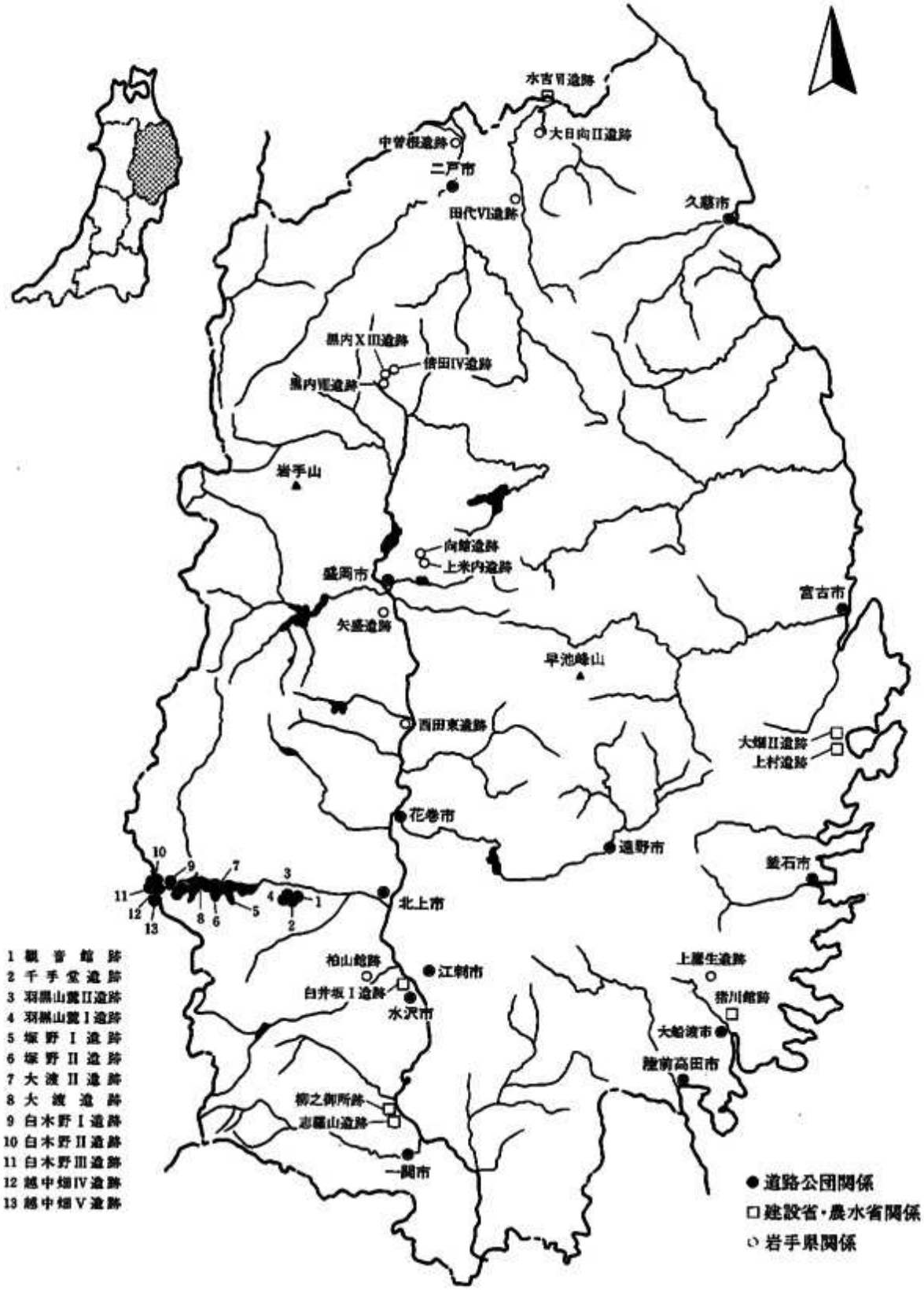
(1) 観音館跡（北上市）……3
(2) 千手堂遺跡（北上市）……9
(3) 羽黒山麓II遺跡（北上市）……13
(4) 羽黒山麓I遺跡（北上市）……17
(5) 塚野I遺跡（湯田町）……21
(6) 塚野II遺跡（湯田町）……25
(7) 大渡II遺跡（湯田町）……31
(8) 大渡遺跡（湯田町）……37
(9) 白木野I遺跡（湯田町）……43
(10) 白木野II遺跡（湯田町）……47
(11) 白木野III遺跡（湯田町）……53
(12) 越中畑IV遺跡（湯田町）……57
(13) 越中畑V遺跡（湯田町）……61

II. 建設省・農水省関係

(1) 柳之御所跡（平泉町）……67
(2) 志羅山遺跡（平泉町）……75
(3) 白井坂I遺跡（水沢市）……81
(4) 上村遺跡（山田町）……87
(5) 大畑II遺跡（山田町）……93
(6) 猪川館跡（大船渡市）……99
(7) 水吉VI遺跡（軽米町）……105

III. 岩手県関係

(1) 中曽根遺跡（二戸町）……113
(2) 矢盛遺跡（盛岡市）……119
(3) 向館遺跡（盛岡市）……123
(4) 上米内遺跡（盛岡市）……129
(5) 西田東遺跡（紫波町）……135
(6) 大日向II遺跡（軽米町）……141
(7) 上鷹生遺跡（大船渡市）……147
(8) 倍田IV遺跡（岩手町）……153
(9) 黒内VIII遺跡（岩手町）……159
(10) 黒内XIII遺跡（岩手町）……165
(11) 田代VI遺跡（九戸村）……171
(12) 柏山館跡（金ケ崎町）……175



平成４年度調査遺跡位置図

Ⅰ．日本道路公団関係

(1) 観音館跡

所　在　地　北上市和賀町煤孫５地割140－１ほか

委　託　者　日本道路公団仙台建設局　北上工事事務所

発掘調査期間　平成４年４月15日～９月30日

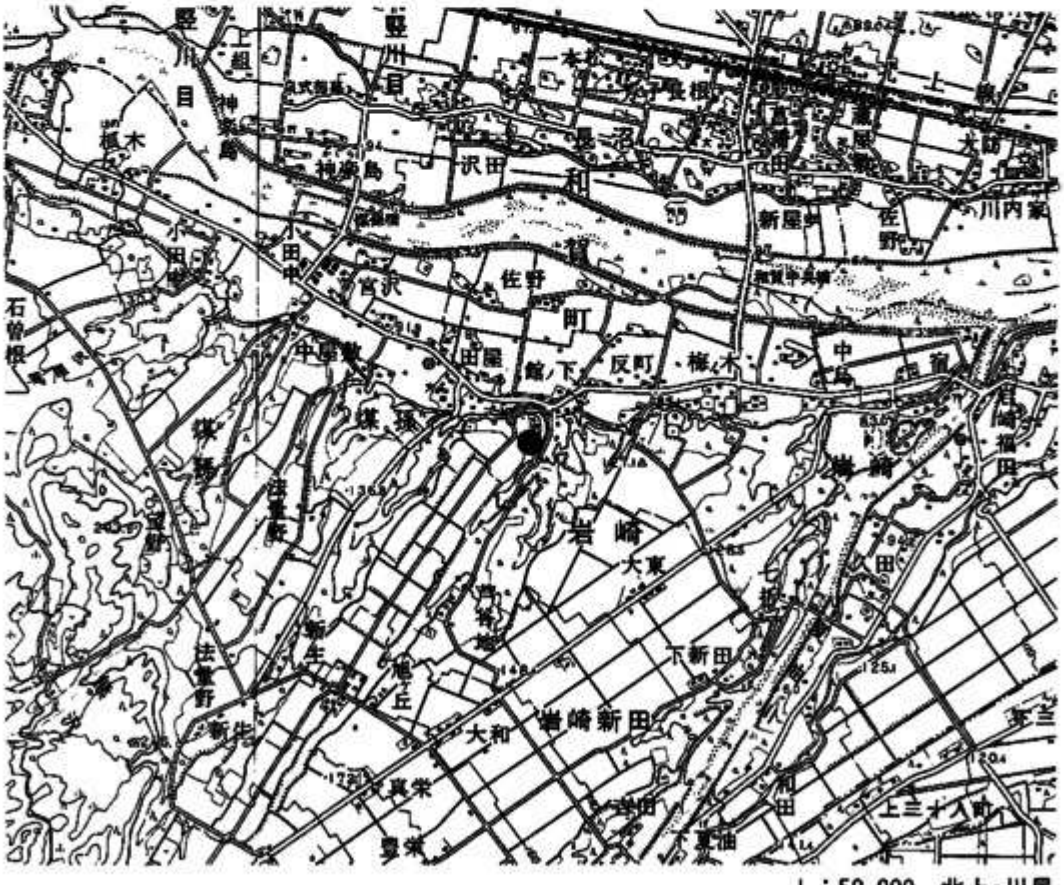
調査対象面積　4,240㎡

発掘調査面積　4,240㎡

遺跡番号・略号　ME64－2001・KN－92

調査担当者　高橋義介・菅原敬悦・佐藤修一

協力機関　北上市教育委員会



遺跡位置図

1．遺跡の立地

観音館跡は、東日本旅客鉄道北上線藤根駅の南西約３kmに位置し、和賀川右岸の河岸段丘上に立地している。遺跡の標高は123～128ｍで、和賀川の沖積面との比高は40ｍほどである。調査区の現況は水田・畑地・草地・山林である。道路を挟んだ西側には縄文時代前期の住居・土坑群、平安時代の住居を検出した煤孫遺跡が隣接する。

2．調査の概要

観音館は主郭と複数の郭からなる連郭式丘城である。検出された遺構は、館跡に関連する三郭（平場）・堀跡３条・土塁３基、平安時代の竪穴住居跡１棟・土師器の窯跡１基、中世の竪穴住居跡１棟、時期が不明な竪穴状遺構３棟、焼土７基、柱穴状土坑類158基、近世の炭窯２基等である。

〈竪穴住居跡〉

三郭の土塁下から平安時代の住居跡と平場から中世の住居跡が各１棟検出している。平安時代の住居の大部分は攪乱や削平を受けており全体の形状が不明である。規模は一辺が４ｍの隅丸方形状を呈すると思われ、東壁側中央寄りにカマドを設置している。中世の住居は北西側に入口状の施設を持ち、規模は5.8×3.9ｍの長方形である。柱穴は壁側と中央寄りに計８ケ検出している。

〈館跡に関連する遺構〉

(1)観音館主郭の規模は北西-南東160×北東-南西105ｍ、面積が約12,140㎡である。北側と東側には複数の曲輪を配置し、空堀が北側を除く三方を巡っている。

(2)二郭は主郭の南西側に位置しており、規模は北西-南東168×北東-南西52ｍ、面積が6,430㎡である。平面形は舌状を呈しており、堀側に一部土塁が遺存している。

(3)三郭の規模は北西-南東38×北東-南西24ｍ、面積は390㎡である。北東側には平面形が二等辺三角形状の曲輪があり、西側に土塁が北西-南東方向に巡っている。約半分ほどが調査対象区域にあたる。

〈堀　　跡〉

堀跡は二郭の南側に重複する新旧２条と三郭の南西側に１条が巡っている。規模は二郭側の新規の堀が長さ90ｍ、上幅６～12ｍ、下幅0.3～1.7ｍの薬研堀を呈し、旧い堀が長さ80ｍ、上幅は不明、下幅1.2～3.5ｍの箱堀である。三郭側の堀は長さ27ｍ、上幅11.7～13.3ｍ、下幅1.7～2.7ｍで、底部は一部基盤の礫層まで掘り込んでいる。土塁上部との比高は4.8ｍである。

〈土　　塁〉

二郭の南東側と三郭の南西側に３基検出している。三郭側の土塁規模は底辺（敷）が８ｍ、

上辺（裾）が2ｍ、高さ1.9ｍ前後である。

〈竪穴状遺構〉

三郭の平場から３棟検出されているが、内２棟は削平や調査区域外に続くために詳細は不明である。規模は2.7×1.7ｍで、平面形は隅丸長方形を呈している。

〈柱穴状土坑〉

三郭の平場から143基検出されている。規模は径18～44cm、深さが５～最大73cm、平面形は円形を主体とするものの楕円形や隅丸長方形もある。規則的な配列は見られない。

〈焼　　土〉

７基検出されているが、いずれも現地性のものである。規模は径が21～最大83cm、層厚が２～５cm、平面形は円形・楕円形・不整形等がある。遺物は出土していない。

〈出土遺物〉

出土した遺物はコンテナ５箱で、縄文時代の土器・石器類、平安時代の土師器・須恵器・土製品・刀子・鉄鏃・砥石、中世～近世にかけての硯・坩堝・古銭（元豊通寶、寛永通寶）・陶磁器等である。平安時代の遺物はロクロ成形の土師器の坏と甕が大部分を占めており、須恵器の量は少ない。また、縄文時代と中世に関連する遺物は僅かである。

３．まとめ

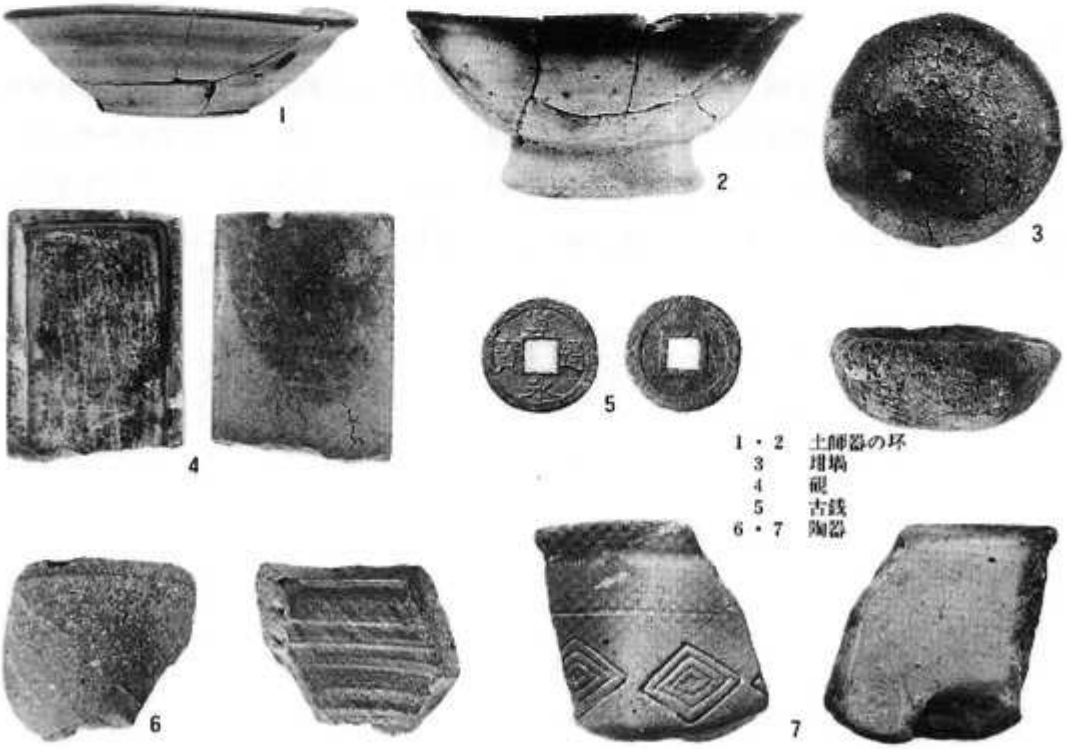
今回の調査で、二郭南側に巡る堀跡は新旧の時期差がある事が確認できた。三郭では中世城館に先行する平安時代の竪穴住居跡の上に土塁を構築しており、中世の竪穴住居跡を埋め戻ししていることが判明した。当地域の中世城館における縄張や堀の構造を考える上での貴重な資料を得ることができた。文献における観音館（下須々孫館）の館主や沿革については不明な点が多い。

堀跡（新）

堀跡（旧）

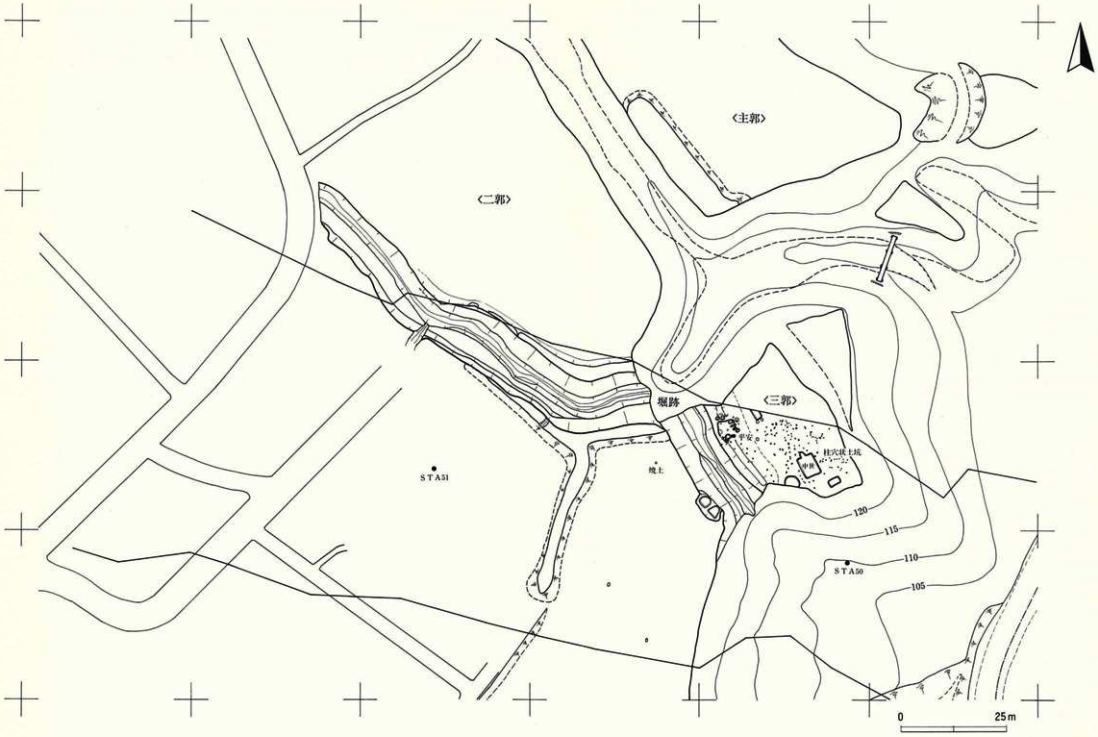
堀跡断面（新）

中世の竪穴住居跡



1・2　土師器の坏
3　埋瓶
4　硯
5　古銭
6・7　陶器

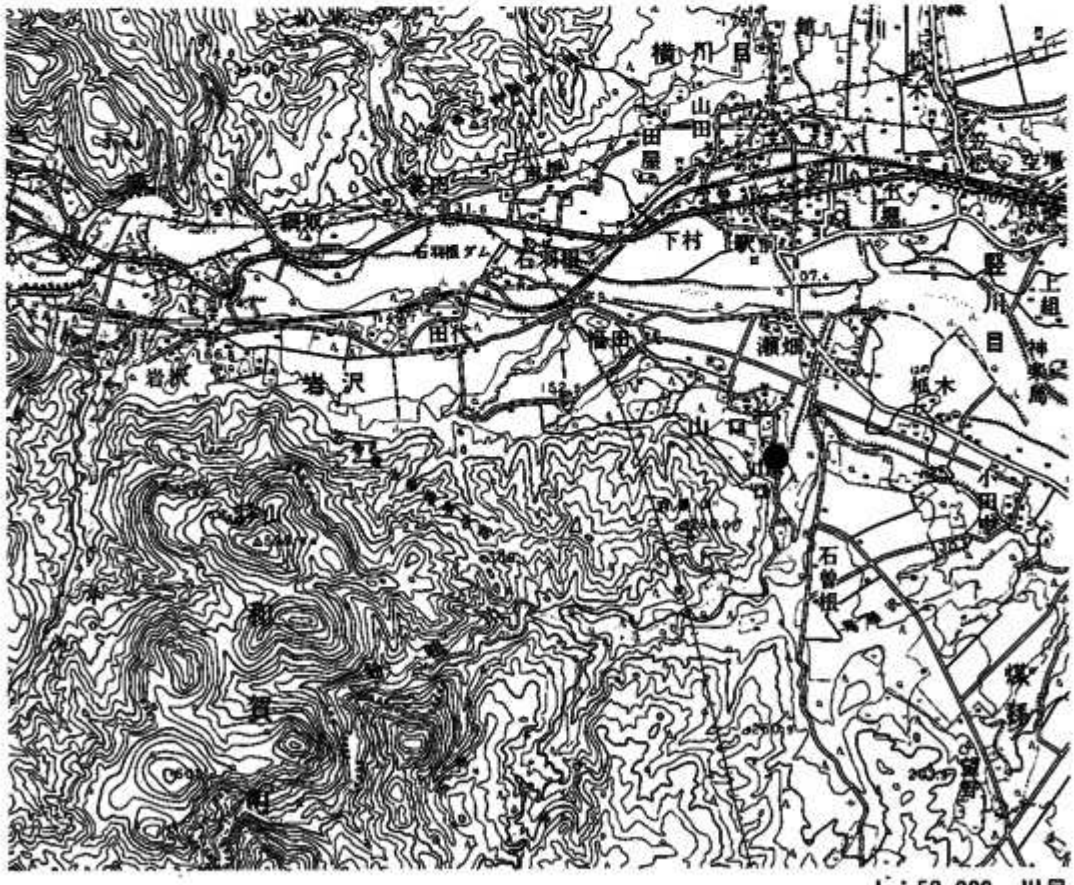
観音館跡　検出遺構・出土遺物



観音館跡遺構配置図

(2) 千手堂遺跡

所在地	北上市和賀町山口38地割２－８ほか
委託者	日本道路公団仙台建設局　北上工事事務所
発掘調査期間	平成４年４月15日～７月31日
調査対象面積	6,900㎡
発掘調査面積	6,900㎡
遺跡番号・略号	ME63－0055・ＳＪ－92
調査担当者	佐々木信一・新倉信一郎
協力機関	北上市教育委員会



遺跡位置図

1．遺跡の立地

千手堂遺跡は、東日本旅客鉄道北上線横川目駅の南約1.8kmに位置し、和賀川右岸の河岸段丘上に立地している。遺跡の東側には鈴鴨川が北流している。遺跡の標高は116～123mで、和賀川との比高は9～16m、鈴鴨川との比高は5～12mである。遺跡の現況は畑地、山林である。

本遺跡の東側には鈴鴨川を挟んで田中館跡、八幡野Ⅱ遺跡、西側には羽黒山麓Ⅱ・Ⅰ遺跡がある。

2．調査の概要

検出された遺構は、時期不明の溝跡1条である。出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、石器である。

〈溝跡〉

調査区域の高位面から検出されている。方向は南西―北東で、南西端は調査区域外へ延びており、北東端は中位面へ続く斜面で消滅している。全長は7m、幅は35～80cm、深さは16～40cmである。断面形はU字状で、底面は10～20cm大の礫が多く、凹凸がある。埋土は黒色土で、粘性は弱く、しまりにも欠ける。出土遺物はない。

〈出土遺物〉

出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、石器で、高位面からの出土がほとんどである。縄文土器は中期、晩期のもので、器種は深鉢、台付鉢、壺である。弥生土器は弥生時代初頭と末期のもので、器種は甕である。石器は凹石、掻・削器類である。

3．まとめ

調査の結果、時期不明の溝跡1条が検出されただけである。出土した土器はほとんどが磨耗しており、他の場所から流入したと考えられる。地形から考え、本遺跡の南西に集落跡が存在する可能性がある。

遺跡遠景（東から）

土層断面（南から）

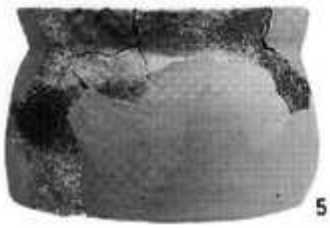
溝跡（南東から）

1

2

3

4



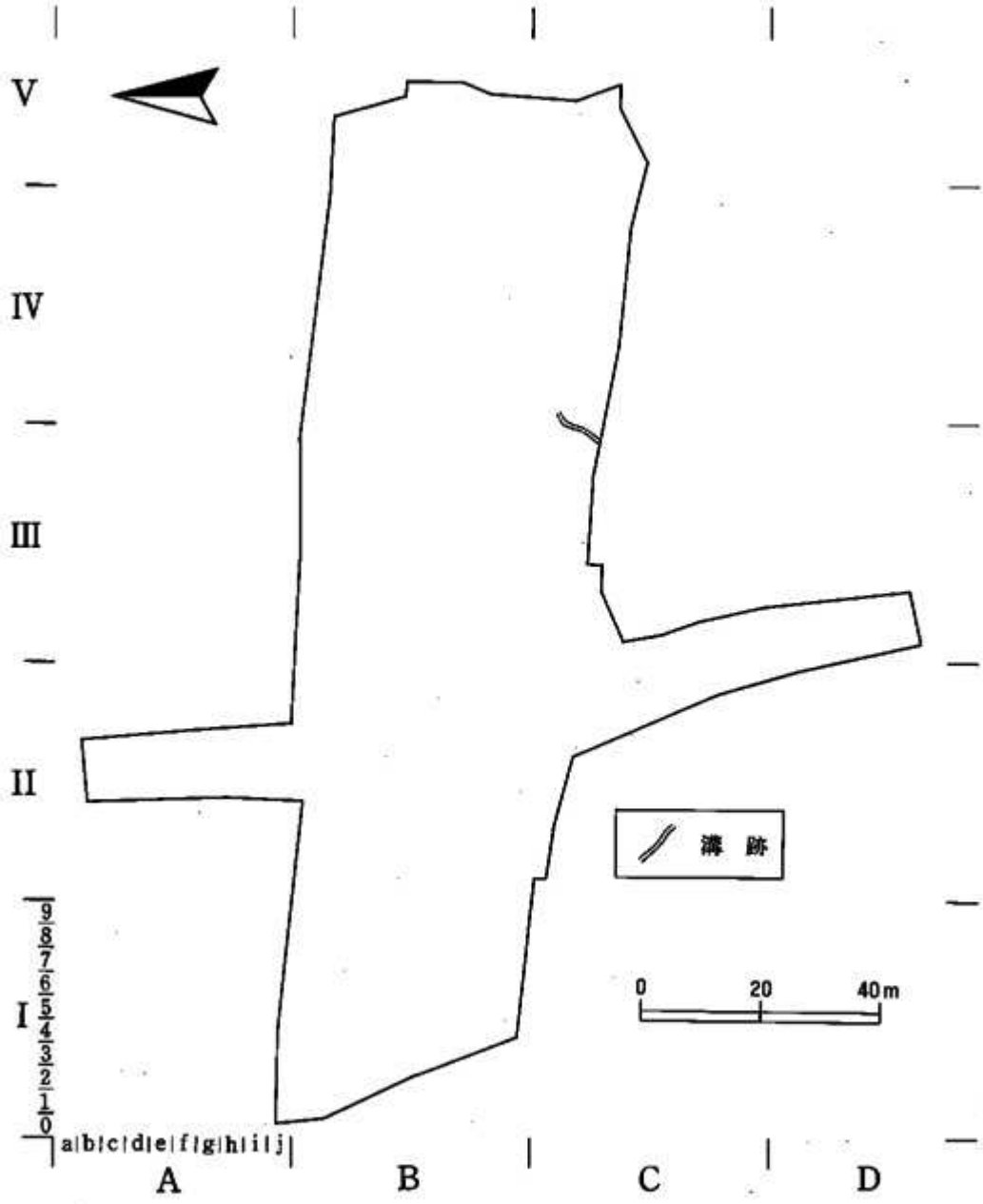
5

6

7

1・2　石器
3　縄文土器
4～7　弥生土器

千手堂遺跡　検出遺構・出土遺物



千手堂遺跡遺構配置図

(3) 羽黒山麓（はぐろさんろく）II遺跡

所　在　地　北上市和賀町山口38地割144ほか

委　託　者　日本道路公団仙台建設局　北上工事事務所

発掘調査期間　平成4年8月3日～10月9日

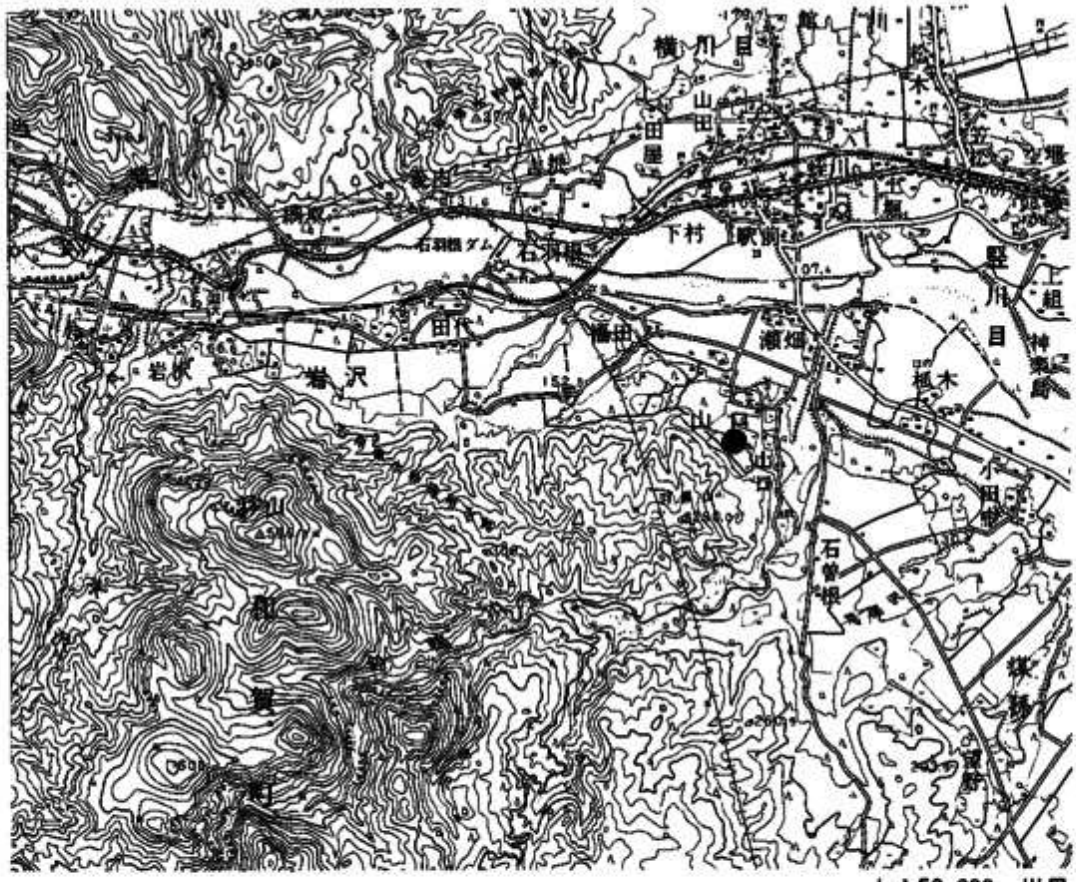
調査対象面積　4,300㎡

発掘調査面積　4,300㎡

遺跡番号・略号　ME63—0073・HGII—92

調査担当者　佐々木信一・新倉信一郎

協力機関　北上市教育委員会



遺跡位置図

1．遺跡の立地

羽黒山麓Ⅱ遺跡は、東日本旅客鉄道北上線横川目駅の南約1.7kmに位置し、和賀川右岸の河岸段丘上に立地している。遺跡の東300mには鈴鴨川が北流し、北1kmには和賀川が東流している。遺跡の標高は132～140mで、和賀川との比高は25～33m、鈴鴨川との比高は21～29mである。遺跡の現況は山林、放牧地である。

本遺跡の東側には千手堂遺跡、田中館跡、八幡野Ⅱ遺跡、西側には羽黒山麓Ⅰ遺跡がある。

2．調査の概要

調査の結果、検出された遺構は土坑6基、柱穴状土坑7基である。出土した遺物は縄文土器、弥生土器、石器である。

〈土　　坑〉

6基検出されている。調査区域の北西部と東端部に3基ずつで、平面形は円形、楕円形、隅丸長方形である。最大のものは径145×155cmの円形で、深さは46cmである。東端部の土坑3基からは縄文土器片が出土している。

〈柱穴状土坑〉

調査区域の東端部から7基検出されている。規模は径27～42×32～45cm、深さは17～40cmである。埋土は暗褐色土が主体である。

〈出土遺物〉

出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、石器で、調査区域東端部からの出土がほとんどである。縄文土器は中期、後期、晩期のもので、特に晩期が多い。器種は深鉢、浅鉢、台付鉢、壺である。弥生土器は弥生時代後期のもので、天王山式に並行するものである。器種は甕である。石器は石鏃、石錘、石匙、石箆、石鏃、凹石である。

3．まとめ

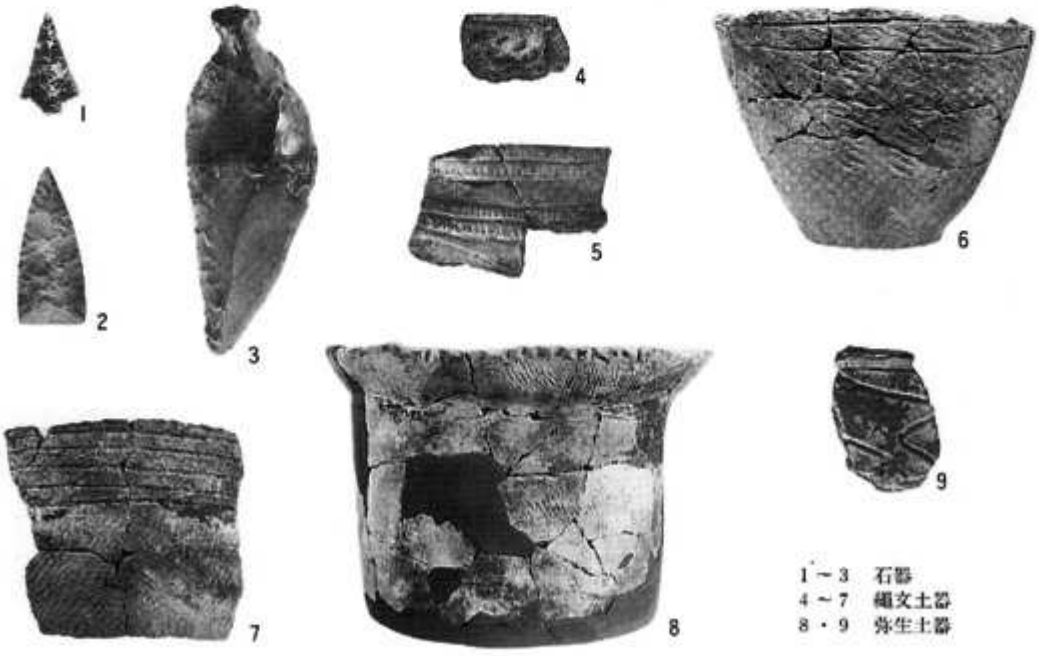
調査の結果、土坑13基（柱穴状土坑7基を含む）が検出された。住居跡は検出されなかったが遺物が出土していることから、地形から考え、本遺跡の南西に集落跡が存在する可能性がある。

遺跡近景（北東から）

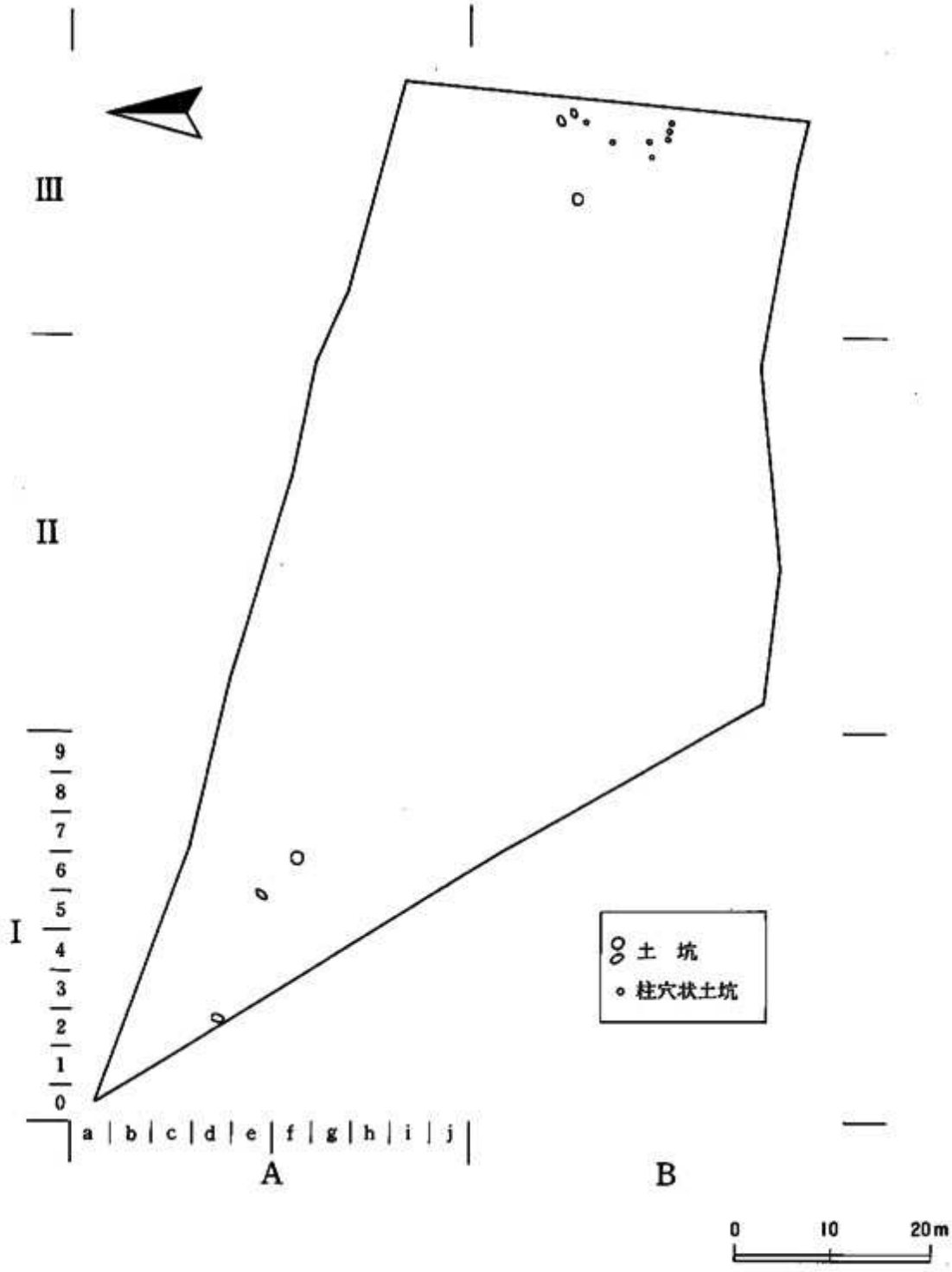
土層断面（南東から）

土坑断面（南東から）

柱穴群（南から）



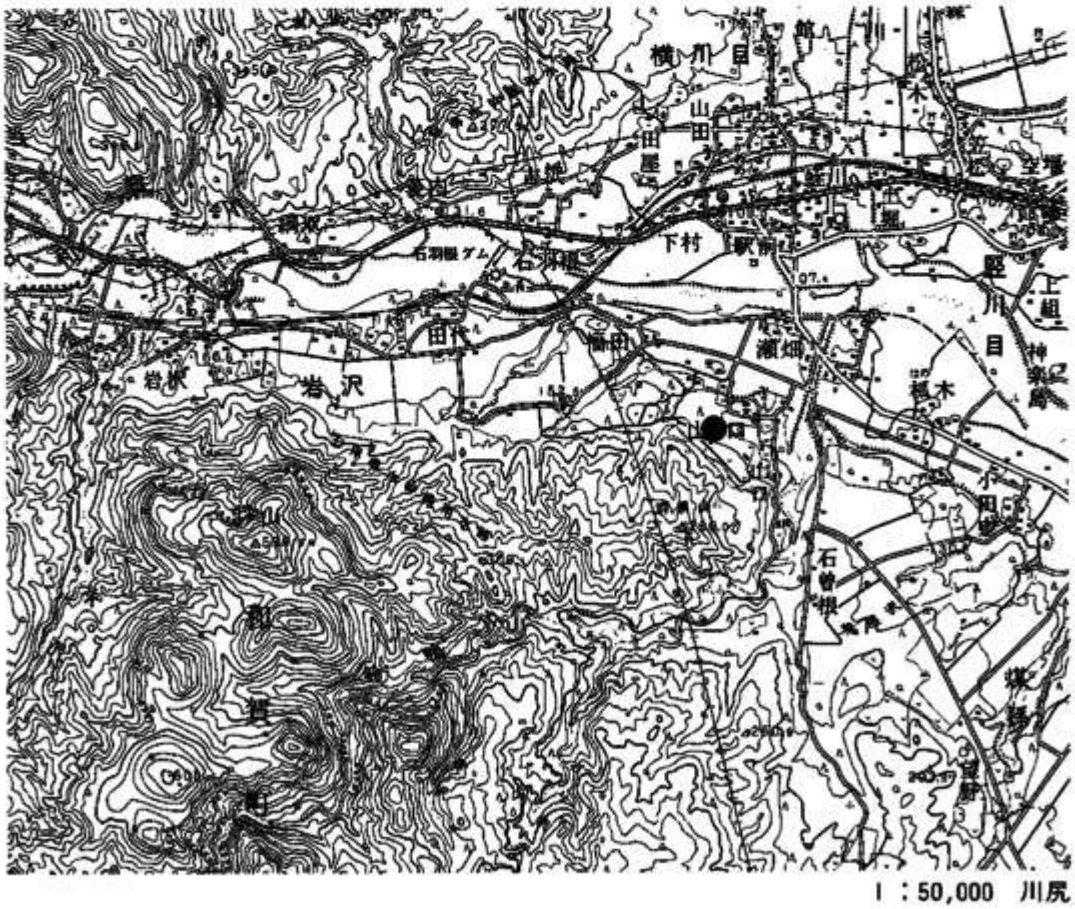
羽黒山麓Ⅱ遺跡　検出遺構・出土遺物



羽黒山麓Ⅱ遺跡遺構配置図

(4) 羽黒山麓Ⅰ遺跡

所在地	北上市和賀町山口23地割36
委託者	日本道路公団仙台建設局　北上工事事務所
発掘調査期間	平成4年9月21日～10月30日
調査対象面積	3,900㎡
発掘調査面積	3,900㎡
遺跡番号・略号	ME63—0052・HGⅠ—92
調査担当者	佐々木信一・伊東　格・小山内　透・新倉信一郎
協力機関	北上市・花巻市教育委員会



遺跡位置図

1．遺跡の立地

羽黒山麓Ⅰ遺跡は、東日本旅客鉄道北上線横川目駅の南約1.6kmに位置し、和賀川右岸の河岸段丘上に立地している。遺跡の東300ｍには鈴鴨川が北流し、北900ｍには和賀川が東流している。遺跡の標高は141～148ｍで、和賀川との比高は34～41ｍ、鈴鴨川との比高は30～37ｍである。遺跡の現況は放牧地、スキー場である。

本遺跡の東側には羽黒山麓Ⅰ遺跡、千手堂遺跡がある。

2．調査の概要

調査の結果、検出された遺構は炭焼窯跡１基である。出土した遺物は縄文土器、石器である。

〈炭焼窯跡〉

調査区域中央部北端の斜面下方で検出されている。平面形は長辺にやや膨らみをもつ隅丸長方形で、中央部に円形の掘り込みを持つ。規模は長辺が４～4.2ｍ、短辺が1.9～2.2ｍ、深さは17～51cmである。底面はほぼ平坦で、細かい炭化物が散乱し、長辺に平行に数本の溝がある。中央部の掘り込みは直径約110cm、深さは約90cmである。掘り込み面から底面にかけて焼成を受け、焼土が形成されている。燃焼部と思われる底面の焼土の下には表面の炭化した材と礫が敷かれている。出土遺物はなく、時期は不明である。

〈出土遺物〉

出土した遺物は、縄文土器、石器である。縄文土器は晩期のもので、器種は深鉢である。石器は石鏃、石錘である。

3．まとめ

調査の結果、時期不明の炭焼窯跡１基が検出された。遺物が少量出土しているが、他から流入したと考えられる。地形から考え、本遺跡の南東に集落跡が存在する可能性がある。

遺跡遠景（南西から）

炭焼窯跡（西から）

1

2

3

4

5

6

7

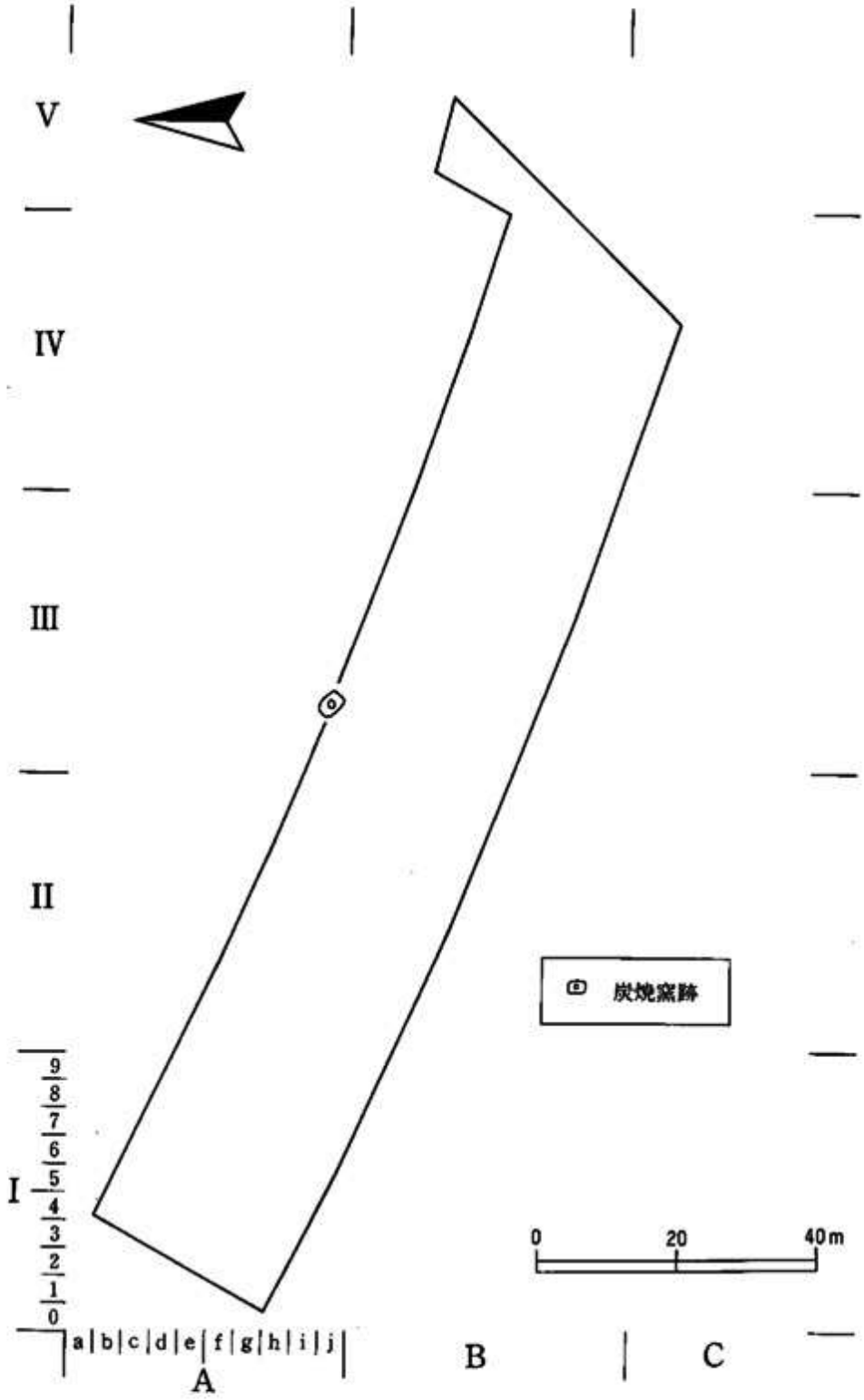
8

9

10

1～5　石器
6～10　縄文土器

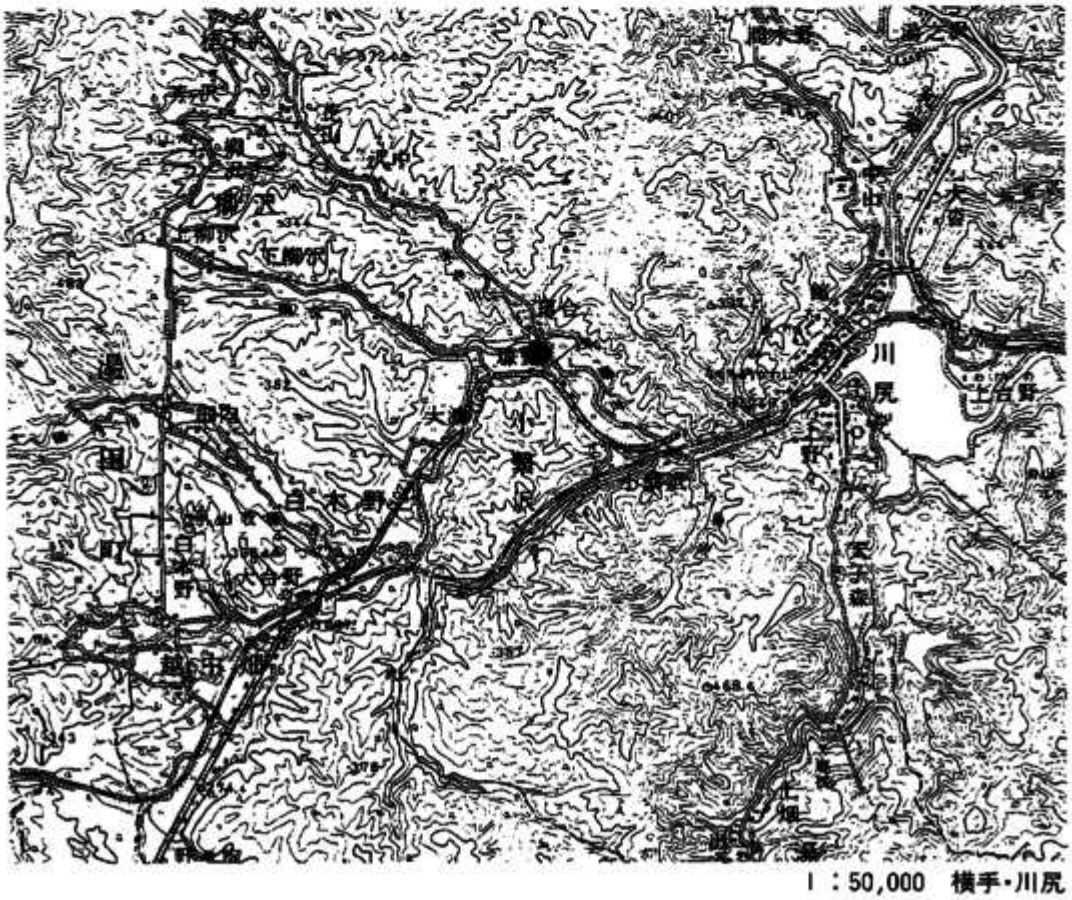
羽黒山麓Ⅰ遺跡　検出遺構・出土遺物



羽黒山麓Ⅰ遺跡遺構配置図

(5) 塚野（つかの）Ⅰ遺跡

所在地	和賀郡湯田町第55地割145-88ほか
委託者	日本道路公団仙台建設局　北上工事事務所
発掘調査期間	平成4年4月22日～9月4日
調査対象面積	11,200㎡
発掘調査面積	7,755㎡
遺跡番号・略号	MD58—1126・TNⅠ—92
調査担当者	藤村敏男・工藤剛司
協力機関	湯田町・北上市・花巻市教育委員会



1：50,000　横手・川尻

遺跡位置図

1．遺跡の立地

塚野Ⅰ遺跡は北緯39°19′東経140°45′30″付近に位置し、湯田町役場の西約2.3km、東日本旅客鉄道北上線湯田高原駅の北東約2.3kmのところにある。湯田町は、岩手県央部の西端部にある。奥羽山地中央部に位置しており、西方に比較的起伏の大きい山岳が南北に連なっている。遺跡は平鹿盆地中央部付近の標高257m前後の川尻洪積段丘上にある。和賀川支流の鬼ケ瀬川が遺跡の北側を東流し、比高差は14m～17mである。遺跡の南側程標高が増す。西隣に塚野Ⅱ遺跡・大渡Ⅱ遺跡と続く遺跡群がある。現況は、開削された水田と畑地である。

2．調査の概要

検出された遺構は土坑7基のみである。遺物は石器および少量の土器が認められる。調査区の西端部に剥片石器および剥片が多く認められる。縄文土器の大半は甕である。

〈土　　坑〉

直径1.20m～1.40mの小型のもの2基と直径1.50m～1.60mで平面形が楕円形のもの5基である。それぞれの深さは、前者において50cm～60cm、後者において0.80m～1.10mである。西端に位置する中型の土坑2基のそれぞれから磨耗した土器と石器が出土している。

これらの土坑のうち楕円形の7基は形状などから墓壙の可能性が考えられ、その内の3基は陥し穴の可能性も考えられる。時期は不明である。

〈そ の 他〉

調査区西端部の西側は沢状に落ち込んでおり、そこに流れ込む小沢が認められた。この小沢の流下する先端部沢底は岩盤になっており、前述の沢とは6m程の落差をもつ。小沢の埋積土には遺物が2～3点程認められた。小沢の中間地点の1m位離れた所に剥片の密集した箇所が検出された。これらの剥片は原位置を保っていると考えられる。

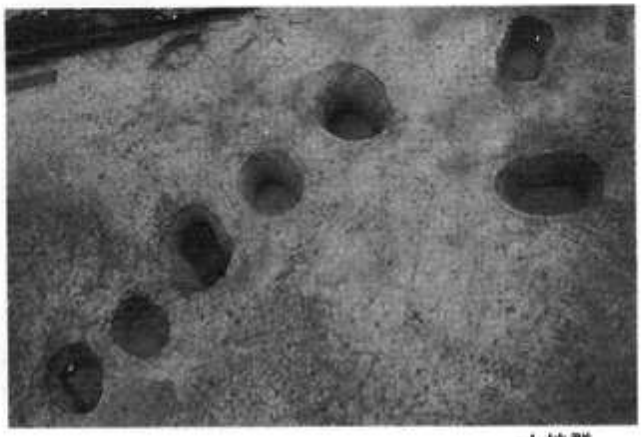
〈出土遺物〉

遺構外の出土遺物は石器および土器で、縄文時代前期から中期にかけての遺物である。1点だけ晩期の遺物と考えられるものがある。1箇所から検出された剥片は、数片が接合したものや2片のみ接合したものがある。別の地点から出土したものとの接合関係は認められなかった。

3．まとめ

今回の調査によって、縄文時代前期からの縄文土器・石器などの遺物が確認された。地山に達する撹乱を受け遺構・遺物はあまり残っていないが、遺跡の性格として定形石器の石鏃が比較的多いことなどから狩猟の場とも考えられる。比較的残りのよい西端部は石器製作の場であった可能性が考えられる。またある時期においては墓域として用いられたとも考えられる。

遺跡全景

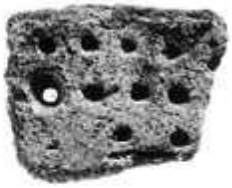


土坑群

石鏃

石槍

石槍



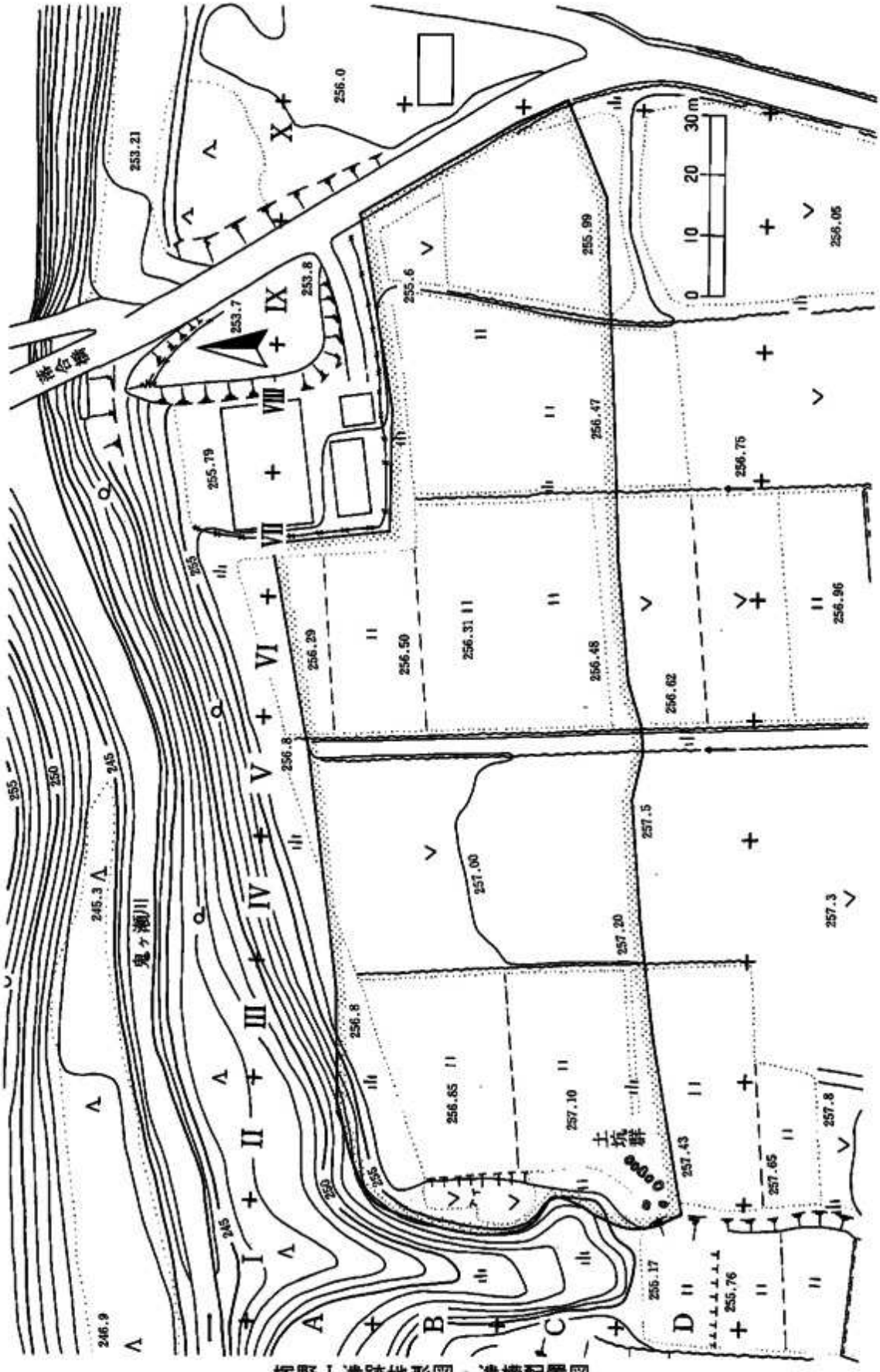
縄文土器

打製石斧

石匙

石錐

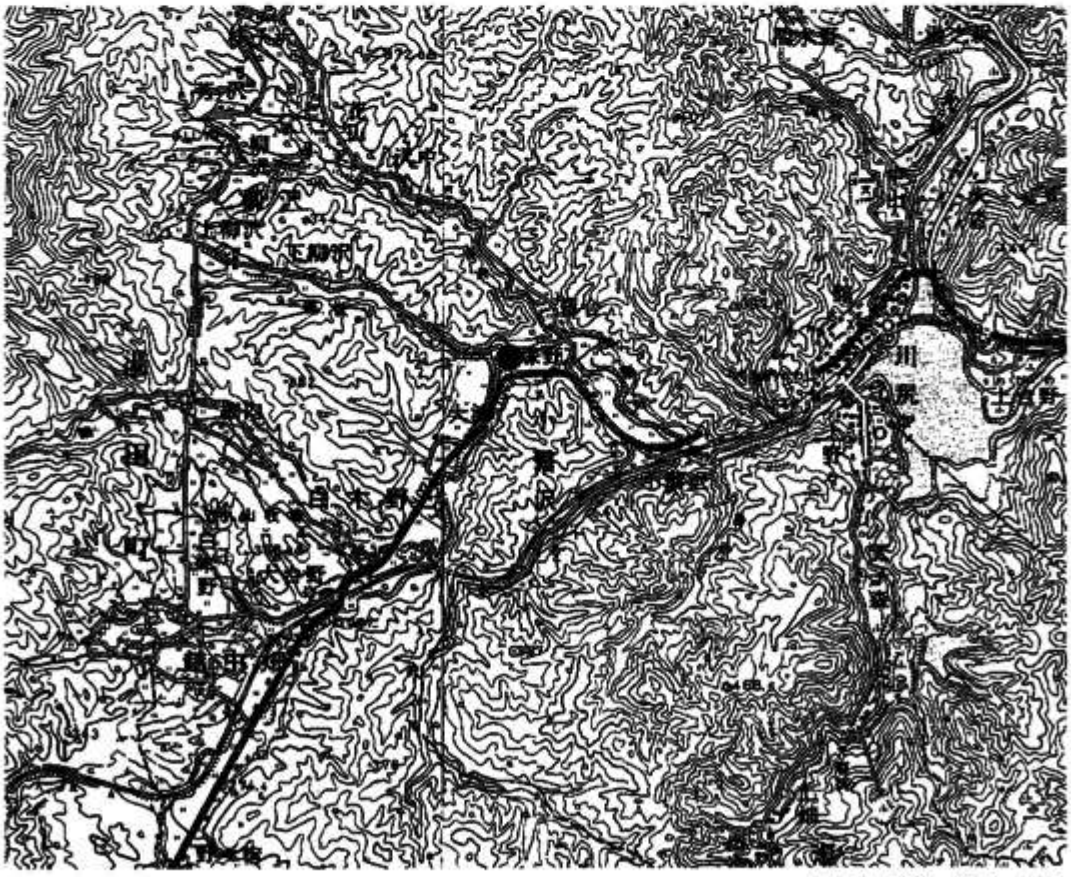
塚野Ⅰ遺跡　検出遺構・出土遺物



塚野Ⅰ遺跡地形図・遺構配置図

(6) 塚野（つかの）II 遺跡

所在地	和賀郡湯田町第55地割157—11ほか
委託者	日本道路公団仙台建設局　北上工事事務所
発掘調査期間	平成4年4月22日～9月30日
調査対象面積	13,000㎡
発掘調査面積	13,000㎡
遺跡番号・略号	MD58—1134・TNII—92
調査担当者	佐々木　弘・溜　浩二郎
協力機関	湯田町教育委員会



1：50,000　横手・川尻

遺跡位置図

1．遺跡の立地

塚野Ⅱ遺跡は湯田町役場の西約2.5km、東日本旅客鉄道北上線湯田町高原駅の北東約2.1kmに位置している。遺跡は奥羽脊梁山脈グリーンタフ地帯の内陸盆地群に属する平鹿盆地と呼ばれる盆地中央付近にあり、和賀川支流の鬼ケ瀬川によって形成された洪積段丘（川尻段丘）に立地している。標高は257～259mで、遺跡の西～北側を北～東流する鬼ケ瀬川との比高差は10～14mである。遺跡の現況は開削された水田・畑地である。

2．調査の概要

検出された遺構は、陥し穴状遺構1基、土坑16基、竪穴状遺構1棟である。他に、縄文時代の石器・剥片・チップ類が集中して出土している箇所や縄文時代のものと思われる旧沢跡などが発見されている。出土した遺物は、縄文時代の土器・石器である。

〈陥し穴状遺構〉

調査区東側中央付近で1基検出された。長さ2.6m、幅0.5mの溝状のもので、両端が膨らんでいる。深さは80～120cmで東側に傾斜している。形態や類例から縄文時代のものと思われる。

〈土　　坑〉

調査区西側を除くほぼ全域から16基検出されており、東側にやや集中する（8基）。平面形は、円形のもの12基、楕円形1基、隅丸長方形1基、不整形のもの2基である。円形のものは直径1.8m～1.5mで深さ52～132cmのもの8基、直径2.4mで深さ1.2mのもの1基、直径1.5～1mで深さ14～34cmのもの3基である。前者9基の形状はビーカー形や袋形、底部にかけてすぼまるものなどがある。後者3基は浅皿状やすり鉢状のものである。前者は埋土等から縄文時代のものと思われるが、後者は不明である。楕円形のものは径102×75cm・深さ65cm、隅丸長方形のものは径136×120cm・深さ84cmで、いずれも縄文時代のものと思われる。他に、径172×114cm・深さ24cm、径224×114cm・深さ50cmの不整形のものがあるが時期は不明である。

〈竪穴状遺構〉

調査区中央部南西側で1棟検出された。北西側半分が削平されているため全体の形状は不明である。残存する壁は、南北方向で6m、東西方向で4.4m、高さは16cmを測り、正方形か長方形のプランであったと思われる。南西側床面と東壁中央外側に隣接して、径70cm・深さ10～30cmの小土坑2基を伴う。時期は出土遺物がなく不明である。

〈そ の 他〉

その他に、石器・剥片・チップ等が集中して出土している箇所が2カ所、縄文時代のものと思われる沢跡が1カ所見つかっている。石器集中区は調査区南西端と北東側で、いずれも開田

時の削平・撹乱をあまり受けていない所である。西側鬼ケ瀬川に面したやや傾斜する面に位置し、石鏃・石篦等を含む剥片やチップ類が８ｍ四方の範囲に1500点以上出土しており、特にチップ類の出土が多い。北東側は剥片類が多く、数点接合可能なものもある。これらは石器製作が営まれていたことを示すものと思われる。

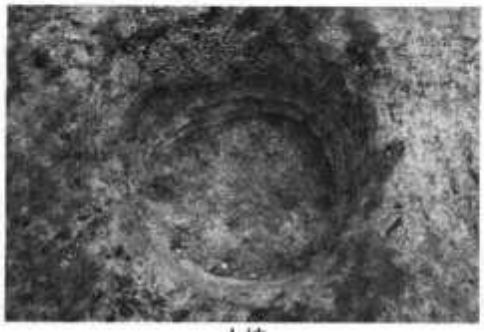
旧沢跡は調査区北東端に位置し、幅約３～４ｍ・長さ約20ｍで、上～下流の底面の比高差は約１ｍで、北東側鬼ケ瀬川につながる。底面に１個体分の土器がつぶれた状態で出土しており、縄文時代前期初頭のものと思われる。周辺には同時期のものと思われる土器片や石器・剥片などが出土しており、当該期の沢跡と思われる。

〈出土遺物〉

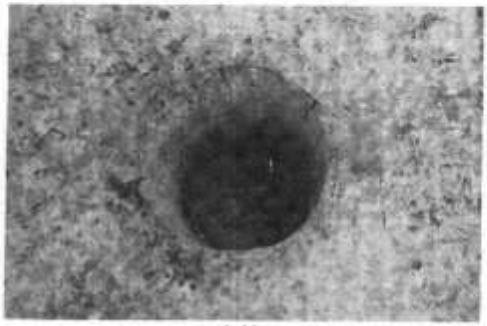
縄文時代の土器・石器が出土している。土器は縄文時代前期初頭のものが主体で、後期のものが数点出土している。小破片のものがほとんどで復元できたものは２点だけである。総量はコンテナ（中）１箱である。石器は、石鏃・石匙・石篦等の剥片石器が39点、擦石が２点出土しており、他にフレイク・チップ類が出土している。

３．まとめ

今回の調査で塚野Ⅱ遺跡は、水田造成時に著しい削平・撹乱を受けているにもかかわらず、少量ではあるが土器・石器等が出土していること、石器製作跡の存在を思わせる剥片・チップ類が集中して出土している箇所があること、土器がまとまって底面から出土した旧沢跡があることや陥し穴状遺構や土坑の存在などから、縄文時代の狩り場を含む何らかの生活の場として利用されていたことが明らかになった。



土坑

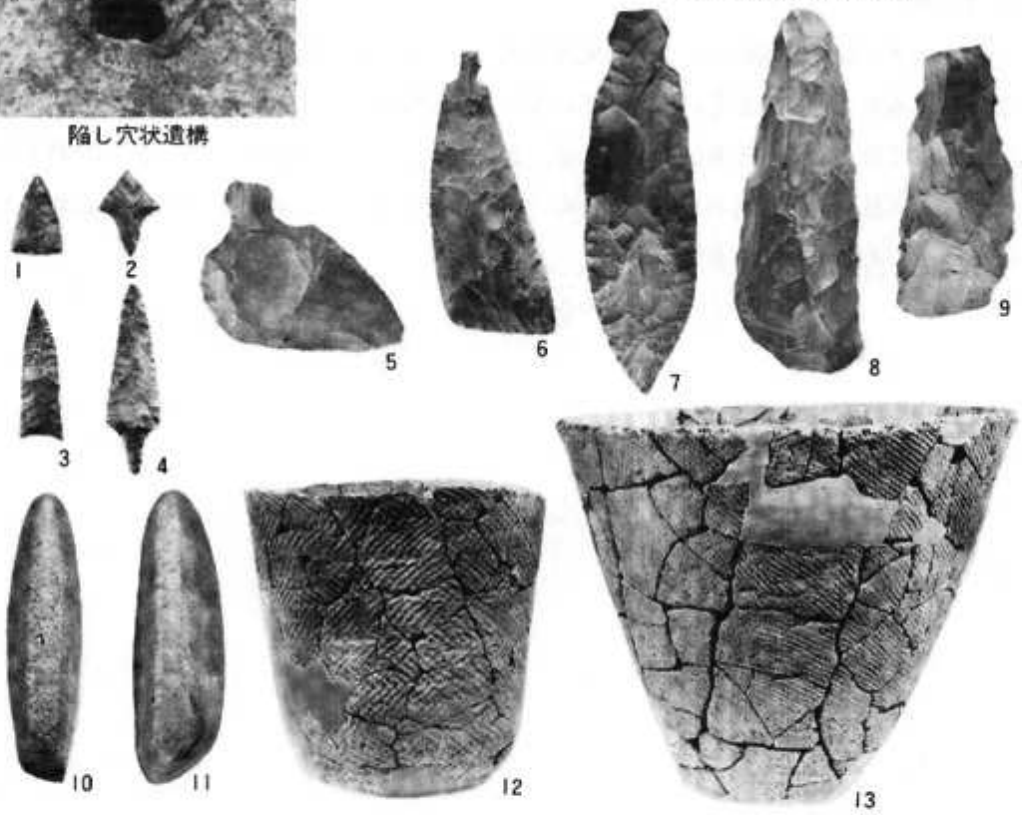


土坑

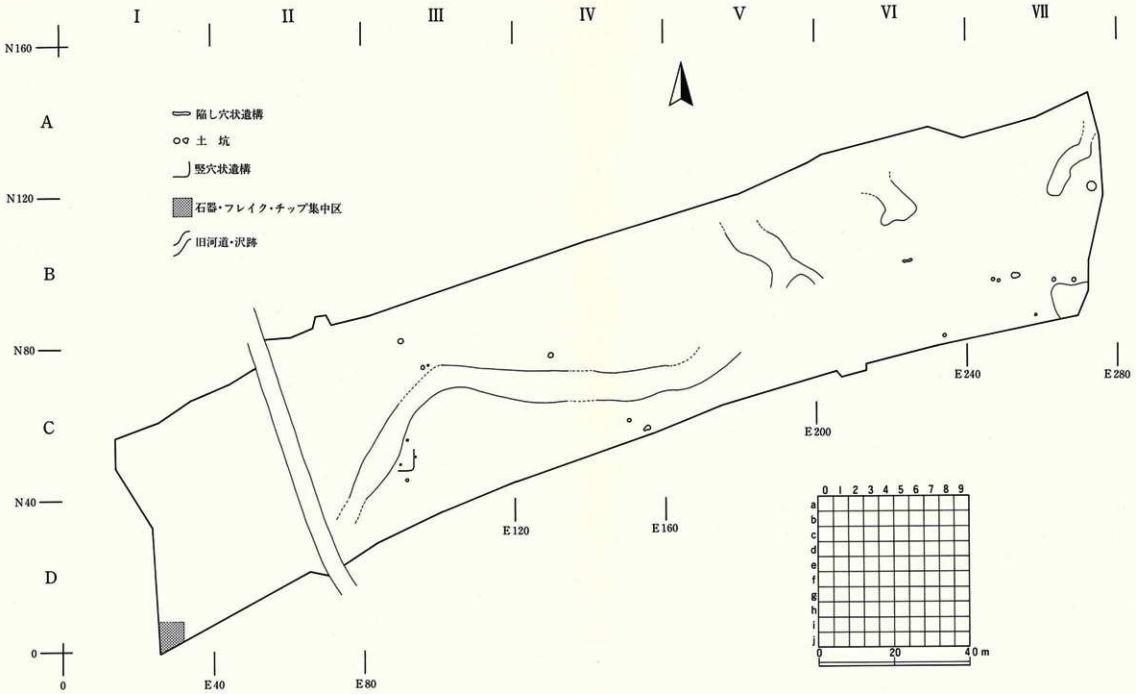
陷し穴状遺構

1～4　石鏃
5～7　石匙
8～9　石篦
10・11　すり石
12・13　縄文土器
（前期初頭）

土器出土状況（旧沢跡）



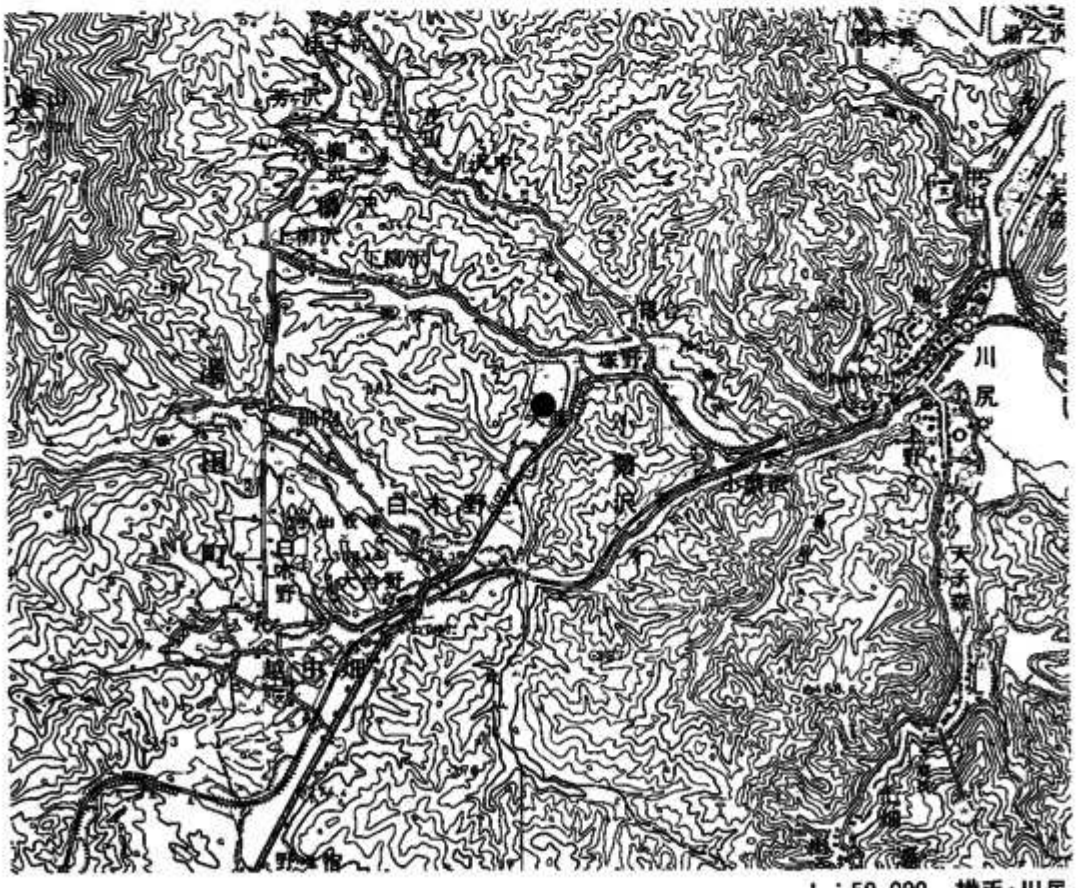
塚野Ⅱ遺跡　検出遺構・出土遺物


I
II
III
IV
V
VI
VII
N160
N120
N80
N40
0
A
B
C
D
隠し穴状遺構
土　坑
竪穴状遺構
石器・フレイク・チップ集中区
旧河道・沢跡
E40
E80
E120
E160
E200
E240
E280
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9
a
b
c
d
e
f
g
h
i
j
0
20
40m

塚野Ⅱ遺跡遺構配置図

(7) 大渡（おおわたり） II 遺跡

所在地	和賀郡湯田町第57地割42—16ほか
委託者	日本道路公団仙台建設局　北上工事事務所
発掘調査期間	平成4年4月21日～10月30日
調査対象面積	39,900㎡
発掘調査面積	35,500㎡
遺跡番号・略号	MD58—2032・OWII—92
調査担当者	中川重紀・星　雅之・佐瀬　隆・佐々木　弘・山口博英・柳田　磨・溜　浩二郎
協力機関	湯田町・北上市・花巻市教育委員会



1：50,000　横手・川尻

遺跡位置図

1．遺跡の立地

遺跡は湯田町役場の西2.8km、東日本旅客鉄道北上線湯田高原駅の北東約1.6kmに位置し、遺跡の東側20ｍを和賀川支流の鬼ケ瀬川が北流する。遺跡の立地する川尻段丘は、今回の調査により高低２面に分かれることが明らかになった。高位面の構成層最上部には、ＡＴ(姶良・丹沢)火山灰が挟在し、さらに１～４ｍの厚さの扇状地性砂層に覆われ、その上部には黒色土が載る。

低位面は、２ｍの比高で高位面と接し、面上には旧流路がかなり明瞭に残存し、完新世テフラ(十和田ａ火山灰・中掘火山灰)を挟む泥炭が堆積している。標高は260～280ｍで、鬼ケ瀬川との比高は10ｍで、遺跡の現況は水田、畑地、牧草地である。

2．調査の概要

調査は、平成３年度からの継続調査である。遺構・遺物は主に調査区中央部、及び北端部より検出し、旧石器時代と縄文時代に大別される。

旧石器時代の遺構は、石器集中区６カ所、泥炭検出区２カ所、炭化物粒集中区18カ所を高位面からのみ検出した。

縄文時代の遺構は、高位面上部(黒色土)及び低位面より検出され、土坑１基、陥し穴状遺構13基、石器集中区１カ所、近現代の炭窯１基、それに付随する土坑を２基検出した。その他、旧河道跡、旧沢跡、時期不明の溝跡３条等が検出されている。なお、その他についての記述は省略する。

〈石器集中区〉

旧石器時代の石器集中区は昨年度から引き続き調査を行ったCIV・DIV区より、２ｍ～４ｍの範囲で石器集中区を昨年度と同一地点から２カ所、また新たに１カ所を検出した。それらは少量の炭化物粒を伴う。それ以外に、炭化物粒集中区１カ所を検出した。今年度新たに調査されたBIV区からは、ＡＴ火山灰直下の石器集中区が２～４ｍの範囲で３カ所検出された。そのうち１カ所においては比較的粒径の大きい炭化物が伴って検出されている。

〈土　　坑〉

縄文時代の土坑は調査区北端部(AVI区)より検出された。平面形は円形を呈し、規模は開口部径約100×90cm、底部径約60×50cm、深さは約40cmである。埋土中からの出土遺物はないが、周辺より石器、フレイク、チップ等が多数出土している。

〈陥し穴状遺構〉

縄文時代の陥し穴状遺構は13基で、いずれも牧草地として利用されていた調査区中央部緩斜面部(BIII区、BIV区、CIII区)に分布し、上部の黒色土を剥がした時点でプランを確認した。

これらはすべて扇状地性砂層を掘り込んで造られている。このうち11基が円形で、規模は開口部径約95～150cm、底部径約50～80cm、深さ約30～140cmである。残りの２基は溝状を呈し、規模は開口部径約195×40cm、底部径約185×20～30cm、深さ約45cmである。埋土中からの出土遺物はない。

〈炭　窯〉

炭窯は調査区西端部（ＣⅢ区）の急斜面より１基検出された。平面形は方形状で壁面は階段状になっている。また西壁面にはタールが付着して固くなっていた。規模は上端部約270×270cm、下端部約215×215cmで、深さ約10～60cmである。煙道部は斜面上方の西壁中央部に築かれており、規模は幅25×25cm、深さ約30cmである。煙道部周辺は火熱のため強く赤変している。その周辺に土取り穴と思われる土坑状のものが２基見られ、この内１基には焼土が堆積している。

〈出土遺物〉

旧石器時代の遺物は、高位面の更新世河成粘土層（高位面構成層）中からのみ出土している。昨年度から継続であるＣⅣ・ＤⅣ区では、ナイフ型石器１点、ブレード５点、その他チップ約90点程出土した。ＢⅣ区では、ＡＴ火山灰直下よりナイフ型石器と思われるもの２点、スクレイパー１点、ナイフの破片と思われるもの１点、敲石と思われる礫１点、フレイク・チップ等数点が出土した。

縄文時代の遺物は主に低位面のＡＶ・ＡⅥ区より出土し、前・後・晩期の土器片と石篦、石鏃、石匙、スクレイパー、その他フレイク、チップを合わせ約3,000点程出土している。またＡＶ区より接合する剥片が数点出土し、剥片剥離技法を確認できる貴重な資料になると思われる。

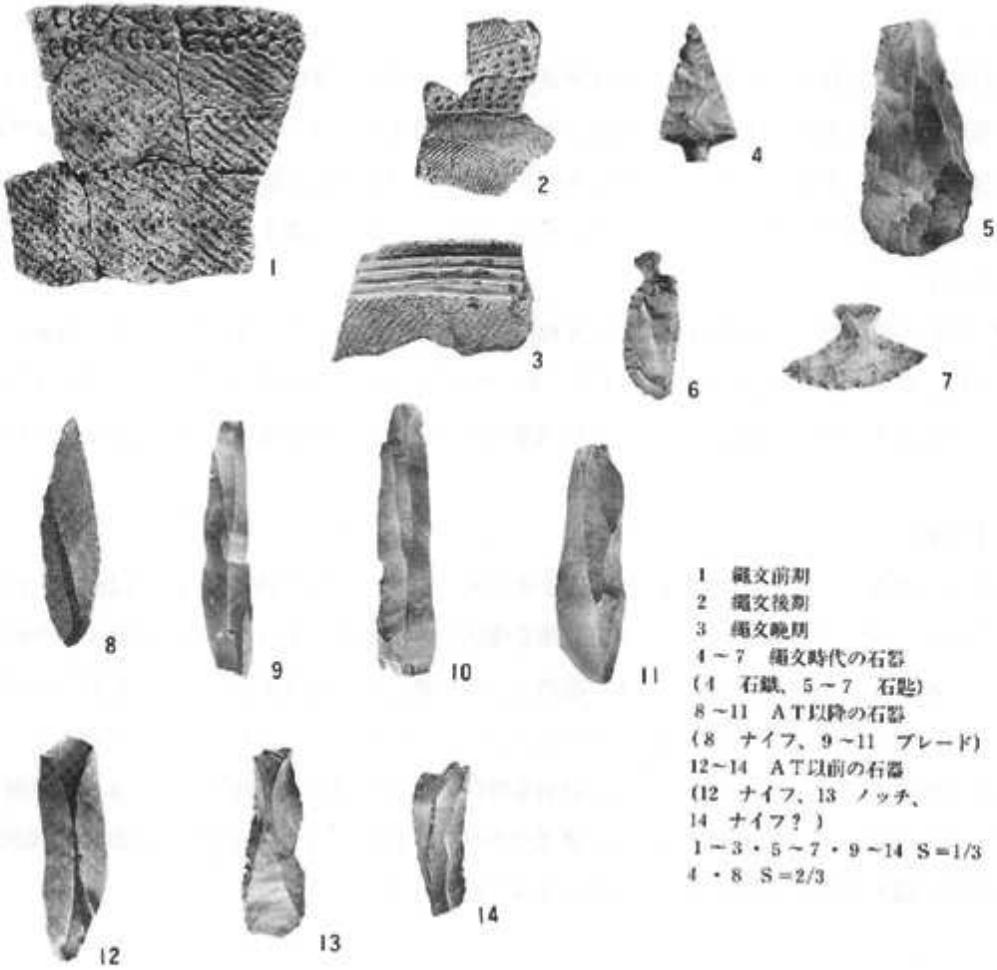
３．まとめ

今年度の調査で当遺跡より検出されたＡＴ火山灰は約2.2万年前の年代を示す広域テフラで、ＡＴ火山灰を挟んで２時期の旧石器出土層準を確認できる成果があった。縄文時代では今回の調査で、陥し穴や土坑が検出され、また遺物としては縄文前～晩期までのものが検出されている。このことから当遺跡でも、縄文時代の人々がこの地で生活していたことがうかがえる。

来年度の調査でＢⅣ区からは、さらに旧石器時代の遺物の出土が期待される。また泥炭層の精査も合わせて行い遺物分布の広がりを確認できれば、岩手県内（湯田地方）における後期旧石器時代の環境を復元できる貴重な資料となると思われる。

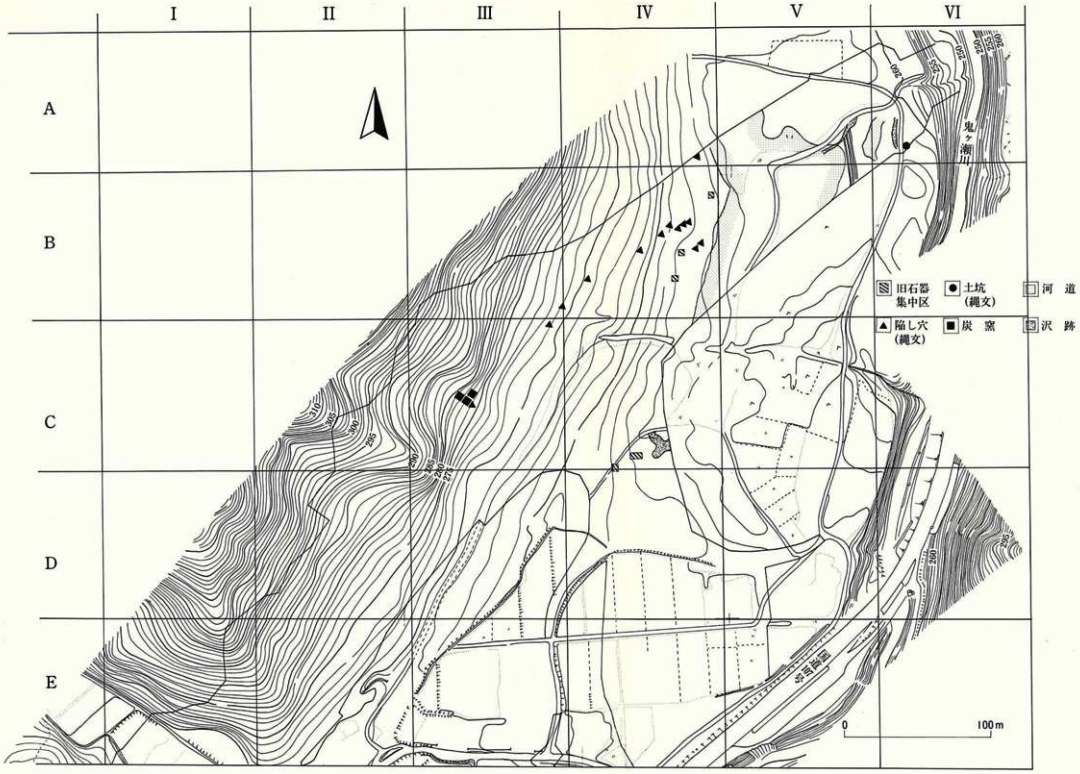
大渡Ⅱ遺跡全景

BⅣ区旧石器出土状況



1　縄文前期
2　縄文後期
3　縄文晩期
4～7　縄文時代の石器
(4　石鏃、5～7　石匙)
8～11　AT以降の石器
(8　ナイフ、9～11　ブレード)
12～14　AT以前の石器
(12　ナイフ、13　ノッチ、
14　ナイフ？)
1～3・5～7・9～14　S＝1/3
4・8　S＝2/3

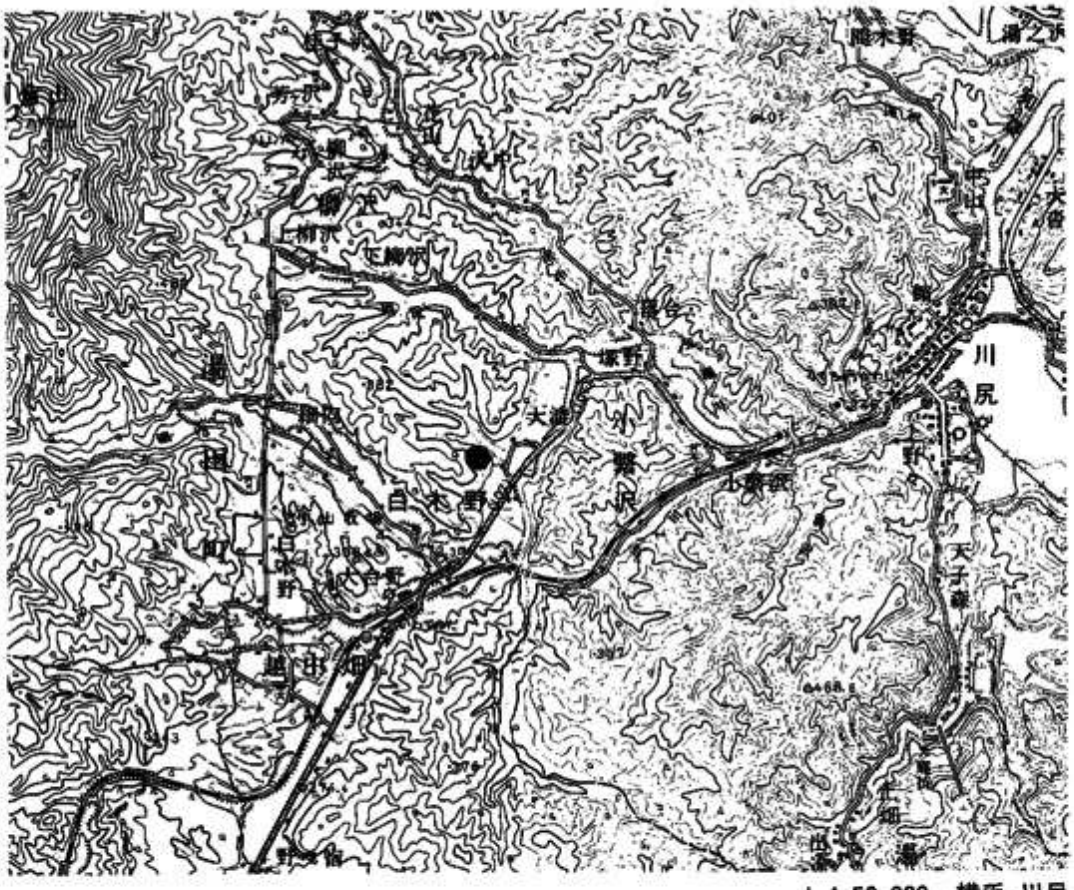
大渡Ⅱ遺跡　遺物出土状況・出土遺物



大渡Ⅱ遺跡周辺地形・遺構配置図

(8) 大渡（おおわたり）遺跡

所在地	和賀郡湯田町第57地割37—15ほか
委託者	日本道路公団仙台建設局　北上工事事務所
発掘調査期間	平成4年4月21日～6月20日
調査対象面積	2,200㎡
発掘調査面積	2,200㎡
遺跡番号・略号	MD58—1096・OW—92
調査担当者	佐瀬　隆・山口博英
協力機関	湯田町教育委員会



1：50,000　横手・川尻

遺跡位置図

1．遺跡の立地

大渡遺跡は、東日本旅客鉄道北上線湯田高原駅の北東約1.2kmに位置する。遺跡は、鬼ケ瀬川とその支流の柳沢川、細内川に囲まれた丘陵の麓部斜面に立地する。この斜面の平均斜度は約16 、標高は270～280mで、下位の谷底面との比高は約３mである。この麓部斜面と背後の下部谷壁斜面とを境する傾斜変換線付近で継続的な湧水がみられるために調査区は過湿の状態にあり、タニウツギ、ヨシ、ミズゴケの優占する植生が成立している。

2．調査の概要

調査は、最大傾斜方向に平行に幅２mのトレンチをほぼ等間隔にいれながら進めた。なお、調査区北東に隣接する谷底面にもトレンチをいれ、遺跡、遺構の有無を確めた。

検出された遺構は、土坑が１基だけである。検出された土坑は、径70cmの円形の平面形を有し、深さ44cmで、フラスコ様の形状を呈する。遺物は、出土していない。

調査区の大半では、表土は極めて薄く、下部谷壁斜面の崩壊堆積物起源の下層土が認められる。また、草地造成工事に伴うと思われる木片などの植物残渣に富む砂質土が旧地形の凹地部を埋めているのが確認された。土層は、恒常的な湧水のために過湿状態にありグライ化作用を受けている。比較的厚い黒色の壌質砂土の表土がみられるのは東側の調査区である。ここでの下層土は、匍行堆積物を主とする。湧水はみられず、土層は適潤状態にある。

調査区の基盤層は、新第三系の花山層で、走行ＮＳ、西へ15°の傾斜を示し、全般に半固結の砂岩が卓越する。この基盤層の上部は、土壌匍行に伴い斜面下方へ張っぱられる塑性変形を受け、また、酸化鉄の帯が堆積構造を切って発達している。

谷底面では、上記の花山層を基盤とし、その上位に亜円礫層、砂層、最上部に粘土質の耕作土が累積する。なお、砂層には泥炭層の介在や、有機質の葉理の発達、木材、子実、葉の集積がみられる。これらの自然遺物の構成は、ブナが卓越する。これは、遺跡付近の潜在植生と調和的である。

3．まとめ

本調査によっては、土坑一基が検出されたにすぎないが、隣接する大渡II遺跡ほかの立地環境を復元する上に貴重な資料が得られた。

なお、大渡遺跡に関わる報告は、これをもって全てとする。

調査区全景

土層断面

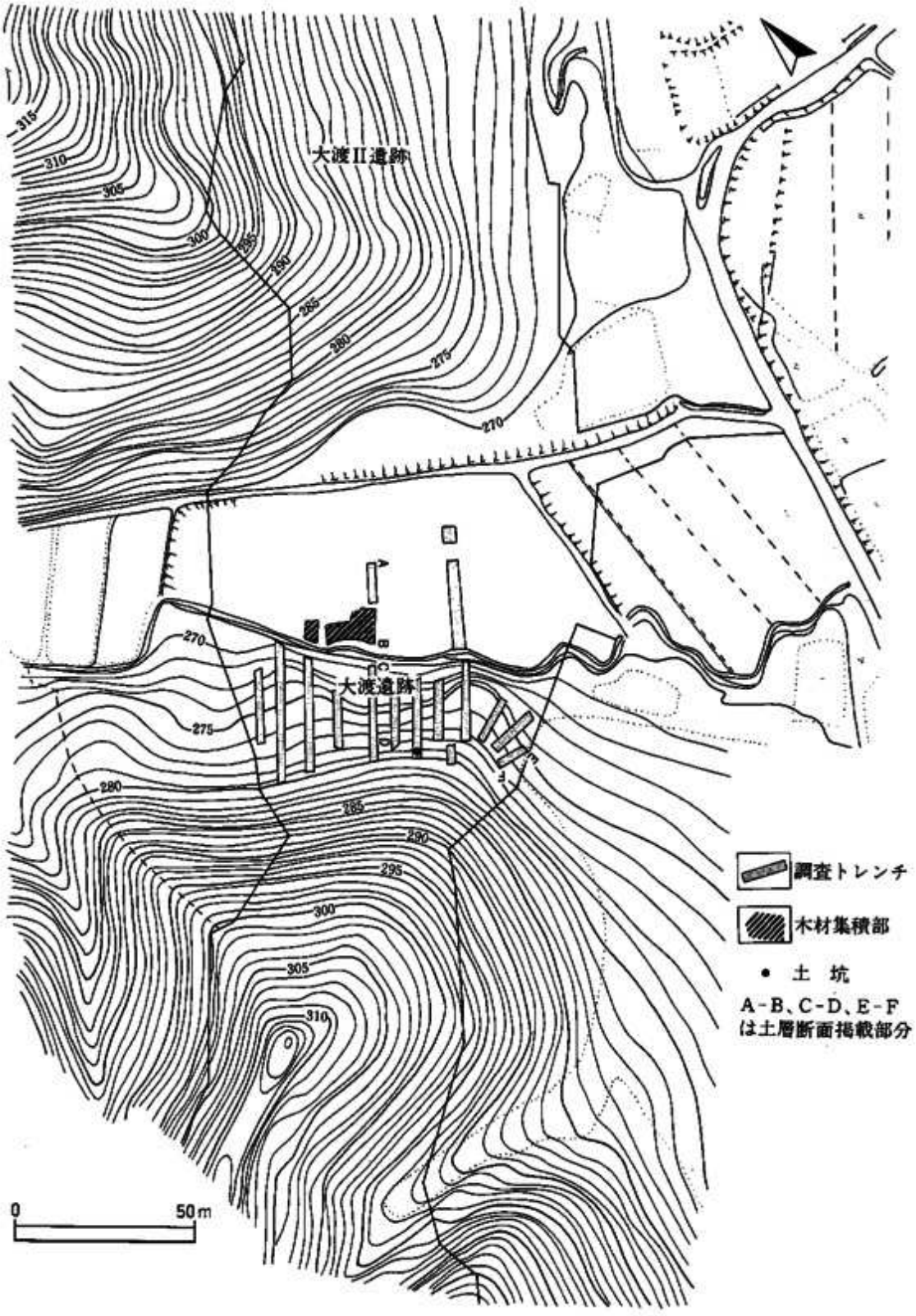
土坑完掘

土坑検出状況

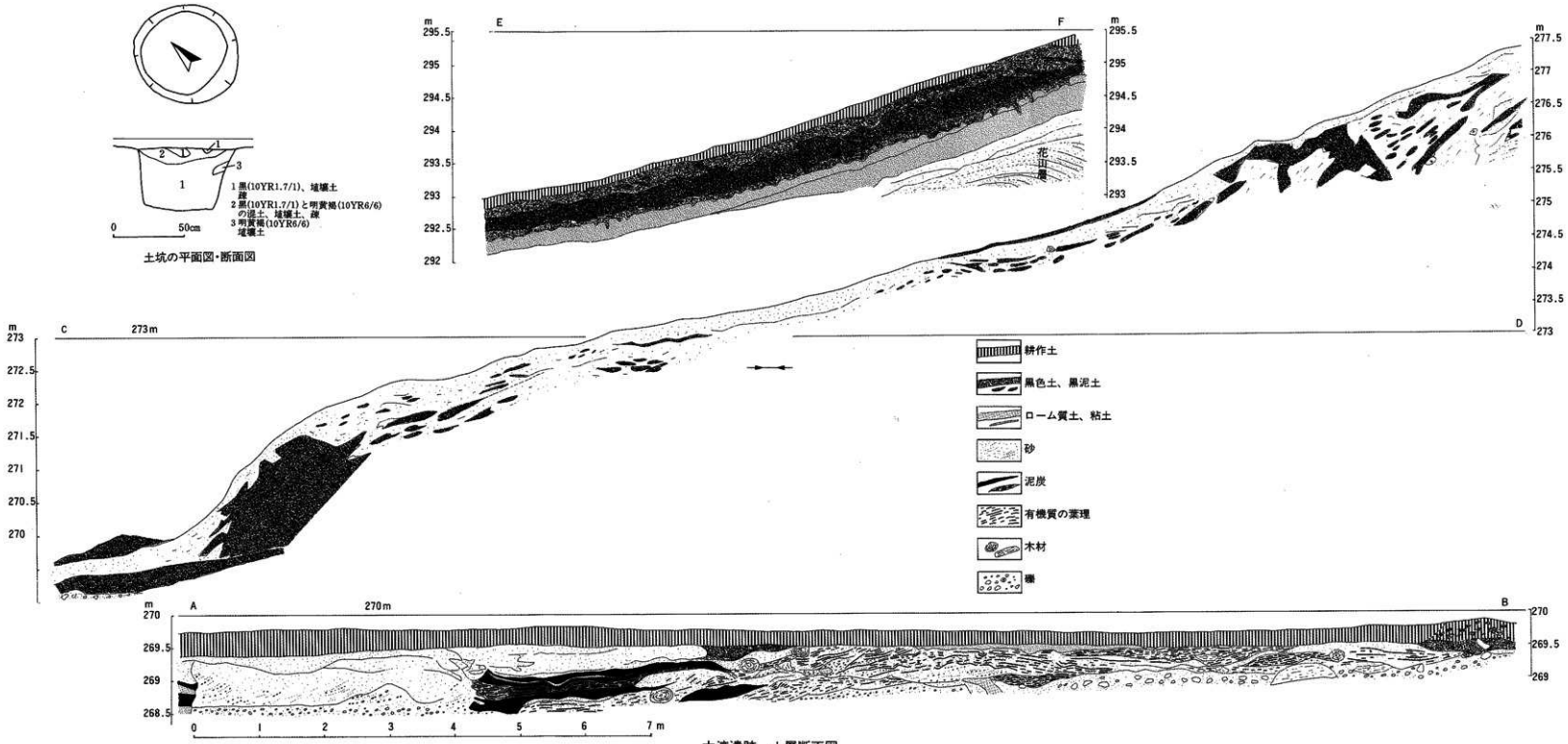
流木出土状況

出土子実

大渡遺跡　検出遺構・出土遺物


大渡II遺跡
大渡遺跡
315
310
305
300
295
290
285
280
275
270
A
B
C
D
E
F
調査トレンチ
木材集積部
土 坑
A-B、C-D、E-F
は土層断面掲載部分
0
50m

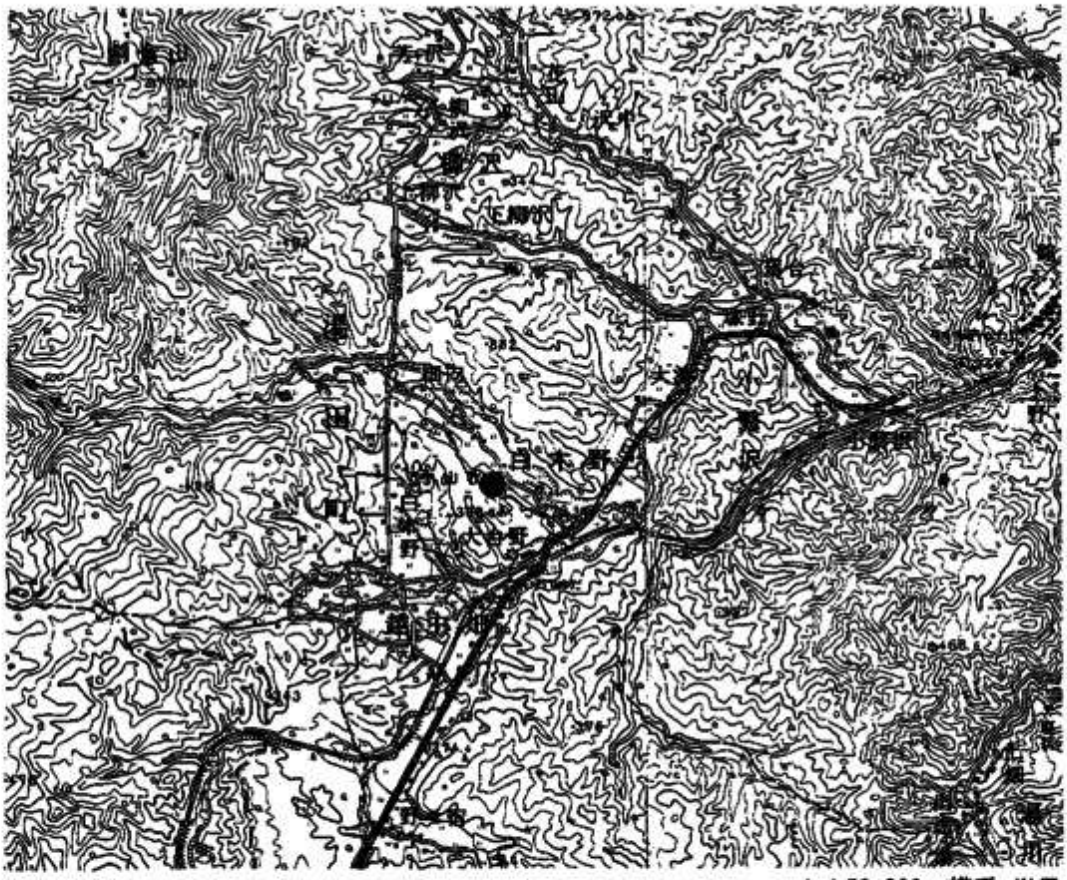
大渡遺跡遺構配置図


1 黒(10YR1.7/1)、埴壌土
2 黒(10YR1.7/1)と明黄褐(10YR6/6)の混土、埴壌土、線
3 明黄褐(10YR6/6) 埴壌土
0 50cm
土坑の平面図・断面図
E
F
花山層
C
273m
D
A
270m
B
耕作土
黒色土、黒泥土
ローム質土、粘土
砂
泥炭
有機質の葉理
木材
礫
0 1 2 3 4 5 6 7m

大渡遺跡　土層断面図

(9) 白木野Ⅰ遺跡

所在地	和賀郡湯田町第68地割265―5ほか
委託者	日本道路公団仙台建設局　北上工事事務所
発掘調査期間	平成4年9月1日～9月30日
発掘対象面積	3,000㎡
発掘調査面積	3,000㎡
遺跡番号・略号	MD57―2322・SKⅠ―92
調査担当者	羽柴直人・鎌田精造
協力機関	湯田町教育委員会



1：50,000　横手・川尻

遺跡位置図

1．遺跡の立地

白木野Ⅰ遺跡は湯田町役場の西方約4.1km、東日本旅客鉄道北上線湯田高原駅の北約500mに位置している。遺跡の標高は283～292mで、遺跡の北東側約100mに細内川がある。細内川との比高差は11～20mである。調査区の現況は水田、畑地である。

2．調査の概要

調査区の大部分が近年の耕地整理のため削平されていたが、埋設土器遺構が1基と小規模な捨て場が検出されている。ともに縄文時代前期後葉（大木6式期）のものである。

〈土器埋設遺構〉

調査区の東側から検出された。正立の状態で埋設されており、底部付近は半分ほど欠損しているが、当初から欠けたまま埋設されたものらしい。

〈捨 て 場〉

調査区東側の埋設沢の斜面上に約4m四方の広がりをもった小規模な捨て場が検出された。土器、石器、土製品等がみられた。

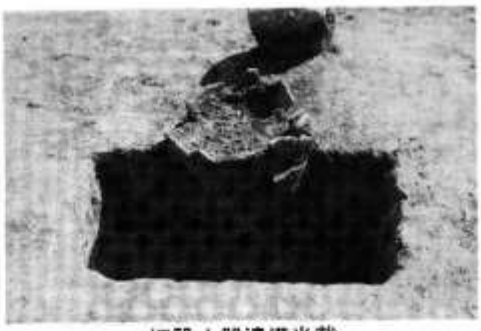
〈出土遺物〉

捨て場から縄文土器がコンテナ(大)2箱、石器は約30点、土製品1点出土している。他に削平された面の上にかぶせられた耕作土中から縄文土器片や石器、近世の陶磁器片が若干量出土している。縄文土器はほとんどが大木6式に比定できるものである。石器の器種には石鏃、石匙、石篦、石槍、スクレイパー、磨製石斧、すり石、半円状扁平打製石器がみられる。土製品は長さが3cmほどで糸巻き状の形をしており長軸方向に穴が貫通しており耳飾りでないかと思われる。

3．まとめ

今回の調査で白木野Ⅰ遺跡は縄文時代前期末葉(大木6式期)の生活の場として利用されていたことが明らかになった。捨て場、埋設土器遺構の存在から隣接する削平された部分に住居跡等の集落の本体部分があったことが考えられる。

埋設土器遺構確認



埋設土器遺構半截

捨て場

調査区遠景

縄文土器（埋設）

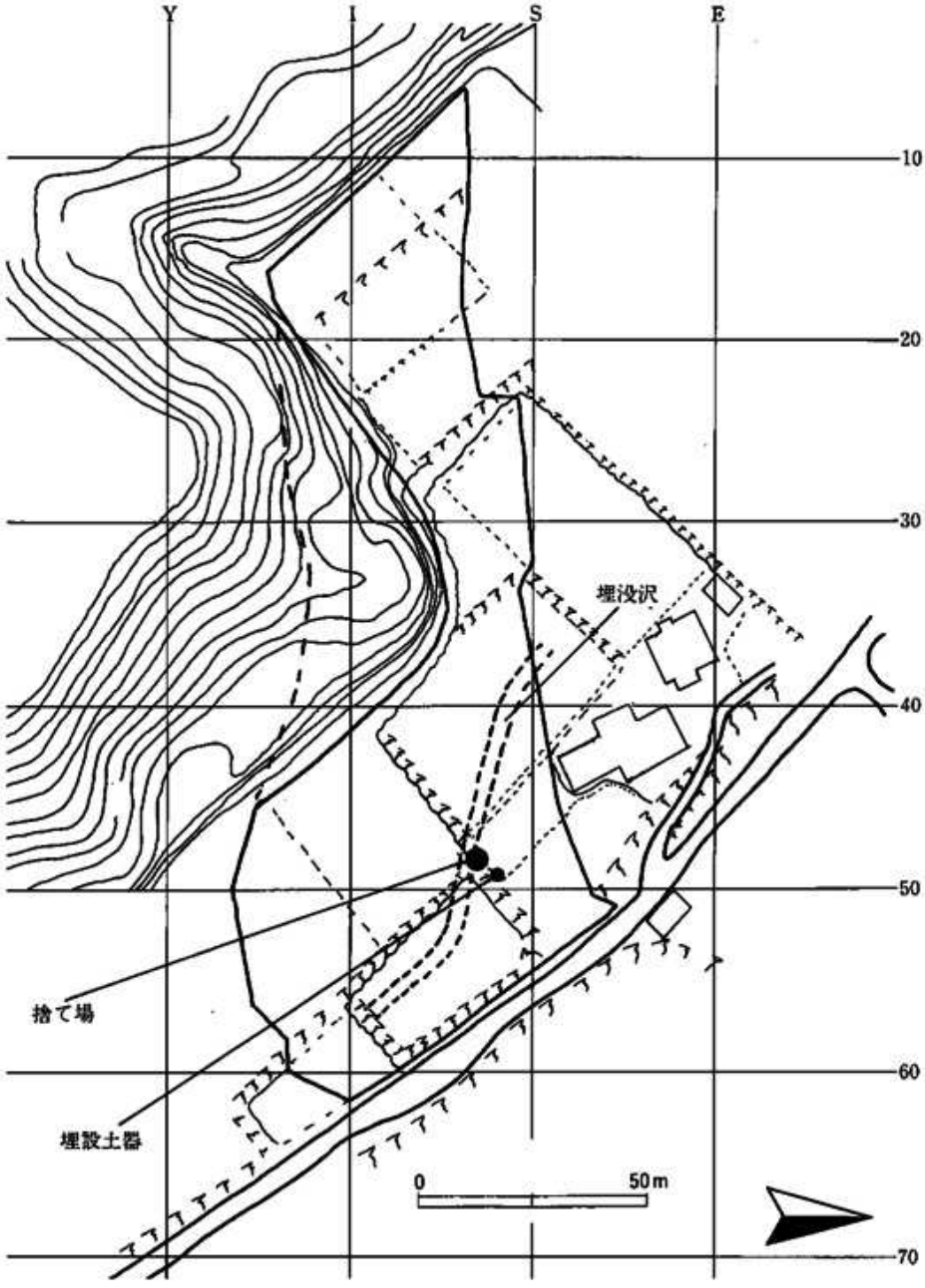
縄文土器（捨て場）

縄文土器（捨て場）

石鏃

土製品（耳飾り）

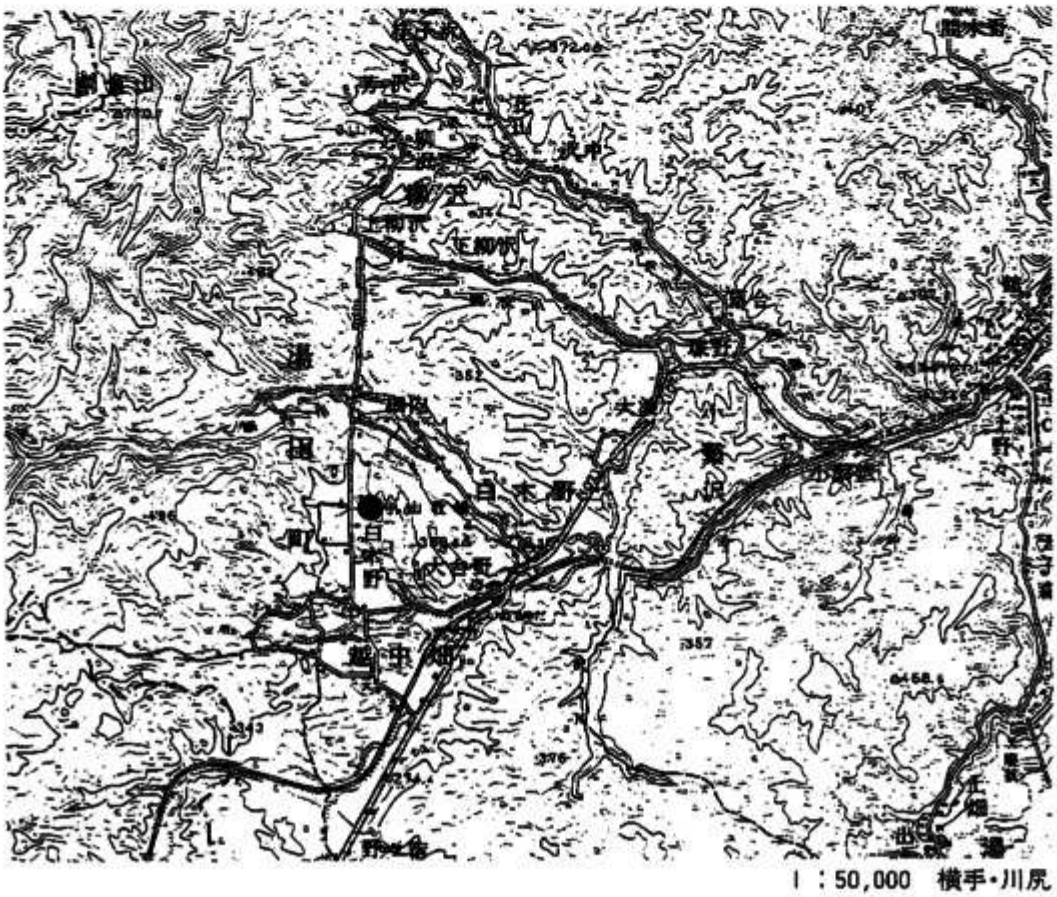
白木野Ⅰ遺跡　検出遺構・出土遺物



白木野Ⅰ遺跡遺構配置図

(10) 白木野II遺跡

所在地	和賀郡湯田町第67地割150ほか
委託者	日本道路公団仙台建設局　北上工事事務所
発掘調査期間	平成4年4月23日～8月31日
発掘対象面積	6,340㎡
発掘調査面積	6,340㎡
遺跡番号・略号	MD57－2384・SKII－92
調査担当者	羽柴直人・鎌田精造
協力機関	湯田町教育委員会



遺跡位置図

1．遺跡の立地

白木野Ⅱ遺跡は湯田町役場の西方約4.6km、東日本旅客鉄道北上線湯田高原駅の北西約1kmに位置している。遺跡の標高は287～298mで、遺跡の北側約1kmに東流する細内川がある。細内川との比高差は15～26mである。調査区の現況は水田、山林、宅地である。

2．調査の概要

遺構の多くは調査区西側の旧宅地部分に存在し、礎石建物跡3棟、掘立柱建物跡16棟、土坑類18基、溝跡17条、池跡6基、竪穴遺構3基、杭を打込んだ跡250、土を突き固めた屋外の作業場である「にわ」跡1基、その他建物に組めない柱穴状のピット約50が検出されている。これらの遺構の時期は形状、出土遺物から近世(17世紀前半～)から近現代にかけてのものと思われ、近世から現代まで連続的に営まれた屋敷跡ととらえる事ができる。また調査区東側の山林部分では何らかの採掘坑と思われる土坑が6基検出されている。

〈建 物 跡〉

建物跡は礎石建物が3棟、掘立柱建物が16棟の合計19棟が検出されている。この内母屋と考えられるものは6棟(掘立柱4、礎石2)、それに不随する小屋と考えられるものが13棟(礎石1、掘立柱13)である。

母屋と考えられる建物跡6棟は、ほぼ同じ位置から重なり合って検出され、それらが時間差をもっていることを示している。その中で一番新しい1号建物跡は、明治26年(1893)に建てられ、昭和39年(1964)に焼失したものであるという。最も古い5号建物跡は掘立柱の建物である。これに後続する6・4・3号建物跡も掘立柱である。5号建物の規模は3間×6間で、1間の長さが2m25cm(7尺5寸)もあり特異である。間取りは広間と土間の境がみられず「広間型3間取り」の成立する前の状態であり、古式な特徴を持っている。後続する掘立柱建物の6・4・3号建物跡は規模、柱間寸法などは5号建物跡とほとんど同じである。だが間取りはいずれも完成した「広間型3間取り」である。5号建物跡の時期を直接示す資料はないが、この遺跡内で出土した陶磁器で、最も古いものは17世紀の前半のものであるので、ほぼその時期のものと考えたい。母屋に付随すると思われる建物は2間×4間のプランのものが多い。

〈池・溝跡〉

屋敷を取り囲むように池、溝が巡っている。池は主に排雪、溝は排水のためのものと思われる。1号池は昭和39年に廃絶され、3号池は出土遺物から明治時代に廃絶されたものである。

〈竪穴遺構・土坑〉

竪穴遺構は3基検出された。1号竪穴は半分以上削平されておりプランは不明である。柱穴は検出されず建物かどうかは不明である。2、3号竪穴は皿状の形態を呈しており、厩の窪み

に形状が類似しているが、厩かどうか判断することはできない。土坑は形態が様々であり、その用途を特定できるものはない。

〈その他の遺構〉

杭を打込んだ跡は約250検出されているがその中で列をなすものが4条ある。垣根、柵といったようなものと思われる。土を突き固めた屋外の「にわ」は1号建物跡に伴うものである。また調査区東側の山林部分の東斜面から土坑が6基検出されている。開口部のプランは円形や楕円形を呈しており、垂直方向に深さ1.5m～3mほど掘ったあと横方向にやや斜め下方に角度を持って1mほど掘り込まれている。その掘り込みは基本土層のⅫ層まで達しているものもあり、Ⅻ層中に含まれる亜炭を採掘する目的の土坑ではないかと考えられる。

〈出土遺物〉

(1)縄文時代の遺物

石鏃2点、石匙、石篦がそれぞれ1点出土した。土器の出土は無かった。

(2)近世～近代の遺物

陶磁器、木製品、金属製品、石製品、土製品がある。

磁器は近世のものはほとんどが肥前産のものである。17世紀前半のものからみられ、碗、小皿、大皿、段重、火入れ、水滴等の器種がみられる。また1点のみであるが明末の染め付けの破片が出土している。幕末から明治にかけてのものには山形県平清水窯のものがまとまってみられる。陶器は近世のものでは唐津系の銅緑釉の小皿が多数出土している。他に唐津系のものではすり鉢、甕等がみられる。近世後半から明治にかけてのものでは秋田県の白岩窯系統のものが大半を占めている。器種としてはすり鉢、片口が多い。木製品は5号池から一括で、下駄、鍬台、鍬の柄、練り鉢、桶、樽の部品が出土している。金属製品は銭貨、かんざし、さじ、煙管が出土している。石製品には硯、砥石、こうがい、石臼、墨書した石が出土している。土製品には戸車、鳥型の土製品、人形？がある。

3．まとめ

今回の調査で白木野Ⅱ遺跡は17世紀前半から現代まで連続して営まれた屋敷跡であることが明らかになった。特に母屋の建物の跡は連続してほぼ同じ位置に建てられているため、その変遷を知ることができ、建築史、民家研究にとっては非常に有効な資料になり得るものと思う。またあまり明らかではない近世の地方の一般民衆の生活についての資料も多く得ることができた。

白木野Ⅱ遺跡主要部

採掘坑跡

掘立柱建物跡

掘立柱建物跡（母屋）

磁器大皿（肥前産）

陶器皿（肥前産）

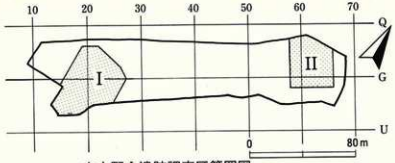
染付青磁皿（肥前産）

磁器皿（肥前産）

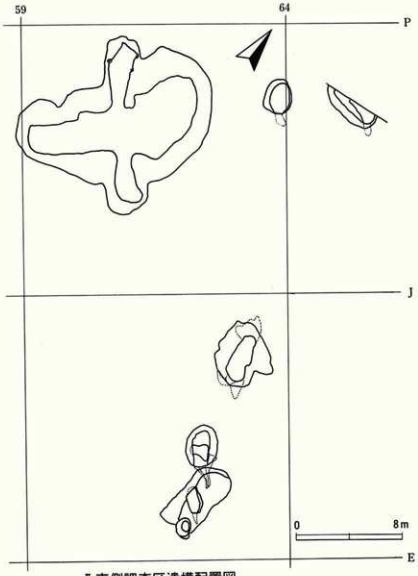
染付皿（明末）

陶器片口鉢（秋田白岩産）

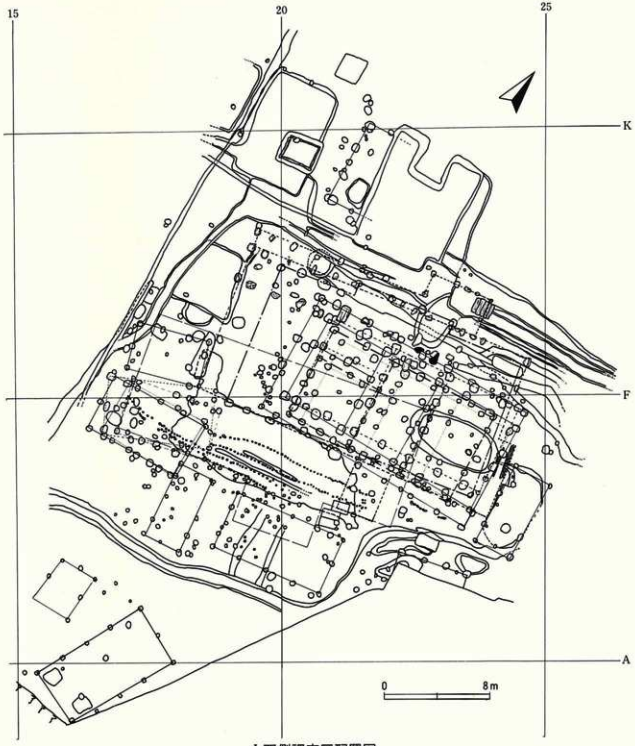
白木野Ⅱ遺跡　検出遺構・出土遺物



白木野Ⅰ遺跡調査区範囲図



Ⅱ東側調査区遺構配置図

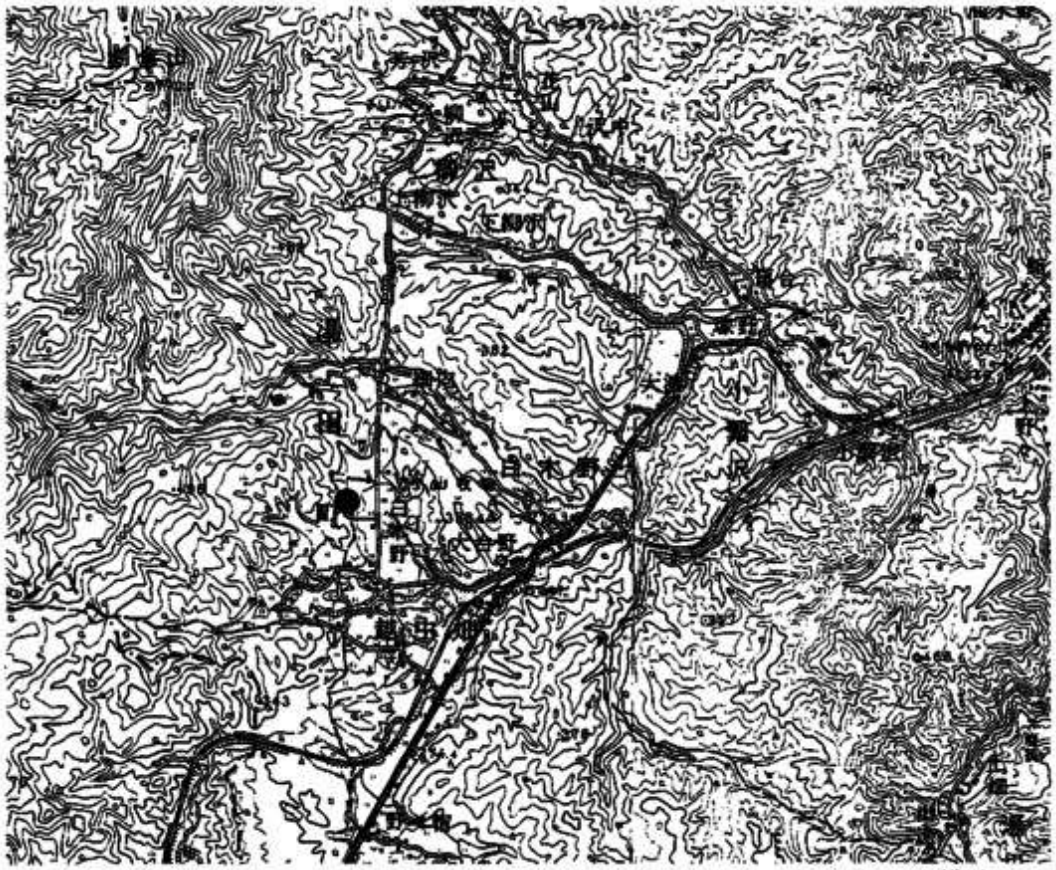


Ⅰ西側調査区配置図

白木野Ⅱ遺跡遺構配置図

(11) 白木野(しらきの)III遺跡

所在地	和賀郡湯田町第67地割6—2ほか
委託者	日本道路公団仙台建設局　北上工事事務所
発掘調査期間	平成4年10月1日～10月29日
発掘対象面積	1,300㎡
発掘調査面積	1,300㎡
遺跡番号・略号	MD57—2350・SKIII—92
調査担当者	羽柴直人・鎌田精造
協力機関	湯田町教育委員会



1：50,000　横手・川尻

遺跡位置図

1．遺跡の立地

白木野Ⅲ遺跡は湯田町役場の西方約4.6km、東日本旅客鉄道北上線湯田高原駅の北西約1.1kmに位置している。遺跡の標高は289～295mで、遺跡の北約1kmに東流する細内川がある。細内川との比高差は17～23mである。調査区の現況は水田、山林である。

2．調査の概要

調査区の東側から堀立柱建物跡1棟と柱穴状のピットが検出された。また調査区の西側からは遺構は検出されなかった。

〈堀立柱建物跡〉

桁行4間(6.0m)、梁行2間(3.8m)の規模の建物である。地元の人の話では昭和時代の中頃まで存在していたものだという。柱材の遺存状態もそれを裏付けている。建築年代もそれほどさかのぼるものではないだろう。

〈柱穴状のピット〉

堀立柱建物の柱穴以外にも柱穴状のピットが約20検出されている。ピットの規模は形状（斜めに掘りこんでいるものもある）から稲を乾燥させるための「はせ」の痕跡と思われる。

〈出土遺物〉

遺物は近世から現代にかけての陶磁器片と石製の硯、縄文時代のものと思われる石匙が出土している。これらは現在の耕作面である盛土中からの出土が多く、現位置を留めていないものが多い。陶磁器には肥前の磁器や秋田県白岩窯の陶器等がみられる。

3．まとめ

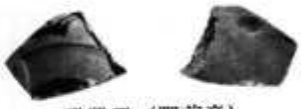
盛土中から出土した石匙の存在により、付近に縄文時代の遺跡がある事が予想される。検出した堀立柱建物跡は年代的に古いものではないが民俗学的な事例として良好な資料になり得るだろう。

調査区遠景

掘立柱建物跡

磁器碗（肥前産）

砥石（石製）

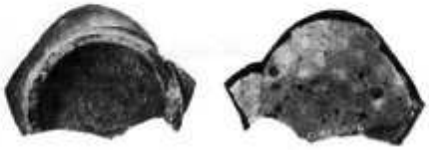


磁器皿（肥前産）

陶器鉢（秋田白岩産）

陶器鉢（秋田白岩産）

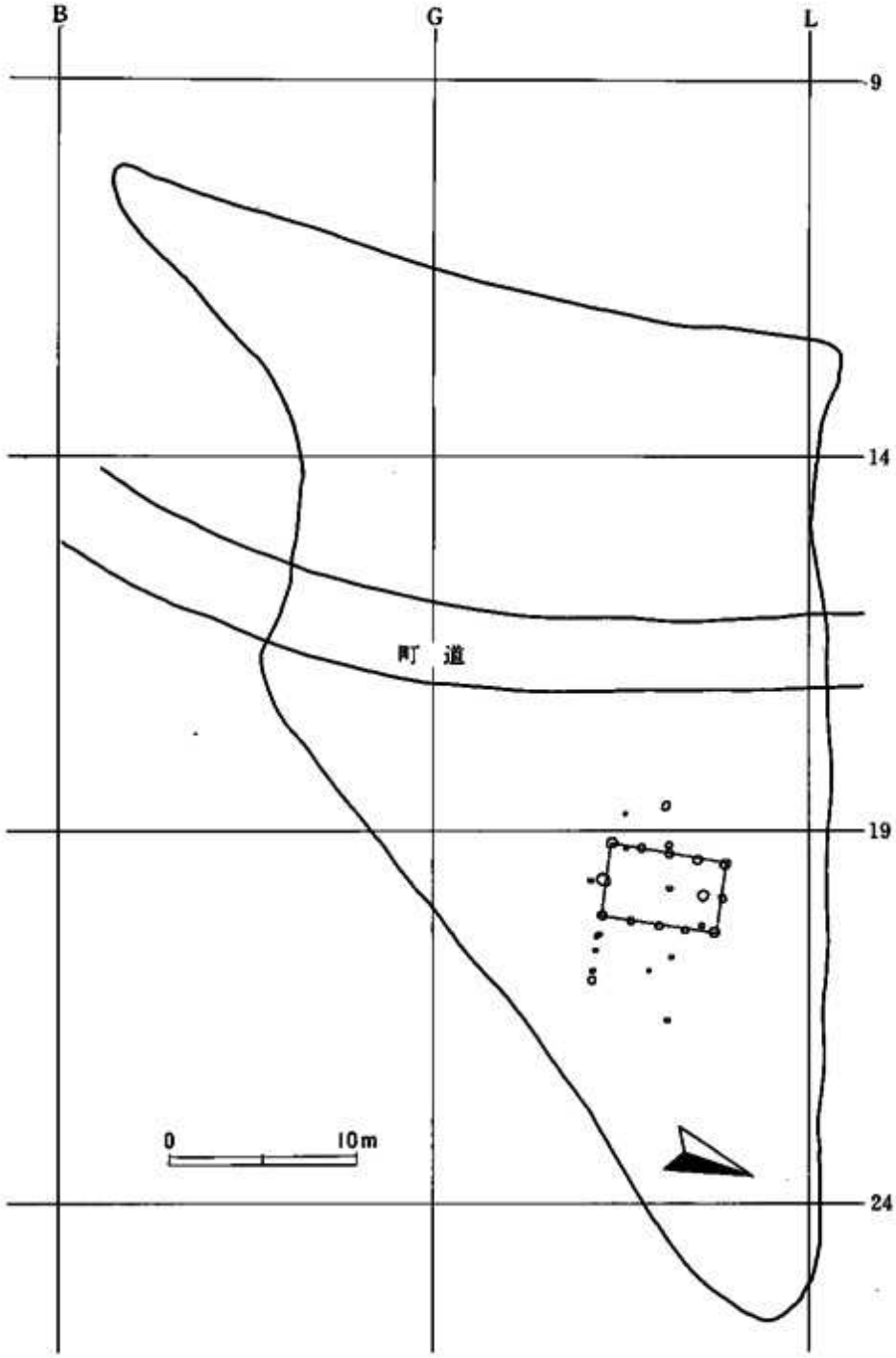
擂鉢（産地不明）



陶器鉢（秋田白岩産）

陶器鉢（産地不明）

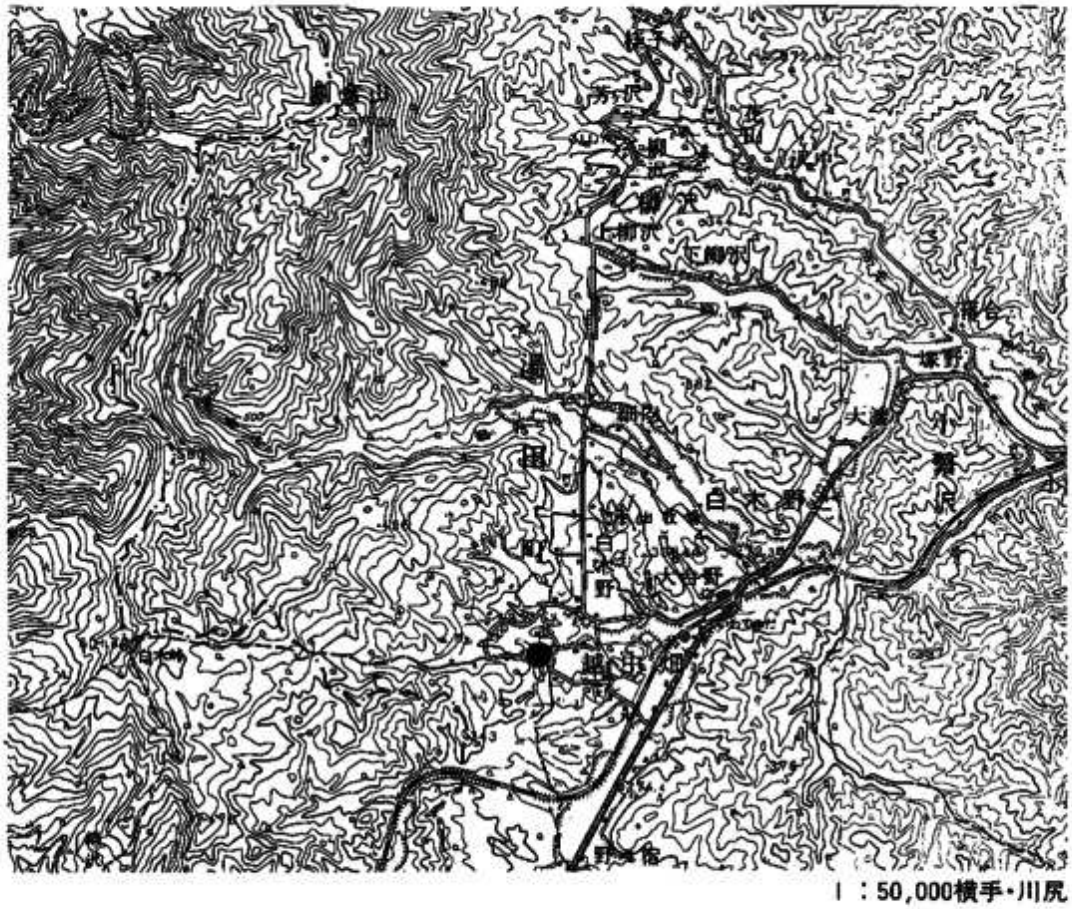
白木野Ⅲ遺跡　検出遺構・出土遺物



白木野Ⅲ遺跡遺構配置図

(12) 越中畑IV遺跡

所在地	岩手県和賀郡湯田町第64地割65
委託者	日本道路公団仙台建設局　北上工事事務所
発掘調査期間	平成4年7月13日～8月7日
調査対象面積	400㎡
発掘調査面積	400㎡
遺跡番号・略号	MD67—2297・ECIV—92
調査担当者	伊東　格・小山内　透
協力機関	北上市・花巻市・湯田町教育委員会



遺跡位置図

1．遺跡の立地

東日本旅客鉄道北上線湯田高原駅の西約1.7kmに位置し、和賀川支流の鬼ケ瀬川によって形成された洪積段丘に立地する。標高は約293mである。調査区の現況は水田である。

2．調査の概要

近世の掘立柱建物跡４棟、柱穴状土坑多数、溝跡４条が検出された。

〈近世の掘立柱建物跡〉

調査区の南東に４棟を検出した。４棟すべてが重複している。１棟が南北棟、３棟が東西棟である。南北棟は最も西にあり、規模は桁行３間(5.4m)×梁行２間(4.6m)である。柱穴の掘り方は円形で規模は径45～35cm、深さ40～35cmである。東西棟のうち、最も西にあるものは桁行３間(6.8m)×梁行２間(5.2m)と推定され、残り２つの東西棟と東半で重複する。柱穴の掘り方は円形で、規模は径40～30cm、深さ50～30cmである。残りの２つの東西棟はほぼ同じ地点で立て替えたもので、規模は桁行３間(7.4～6.8m)、梁行２間(5.4～5.1m)と推定される。柱穴の掘り方は円形で規模径50～40cm、深さ50～30cmである。掘り方の一つから近世の陶器が出土している。

〈柱穴状土坑〉

調査区の全域にわたって検出された。形状、規模、深さともにバラツキが大きく規則性を欠く。出土遺物はない。

〈溝　　跡〉

調査区を東西方向に横切るものが３条、調査区の南東に南北方向に走る短い溝が１条検出された。東西方向に横切るものは全長７～４m、幅30～24cm、深さは18～12cmで規模、形状ともごく類似している。南北方向に走る短い溝は全長２m、幅14cmで深さは約４cmである。

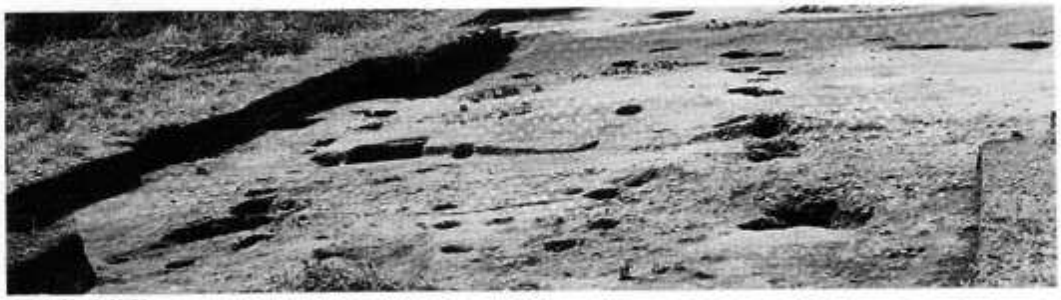
〈出土遺物〉

磨石１点、石錐１点、近世の陶磁器が少量、寛永通寶３点が出土している。

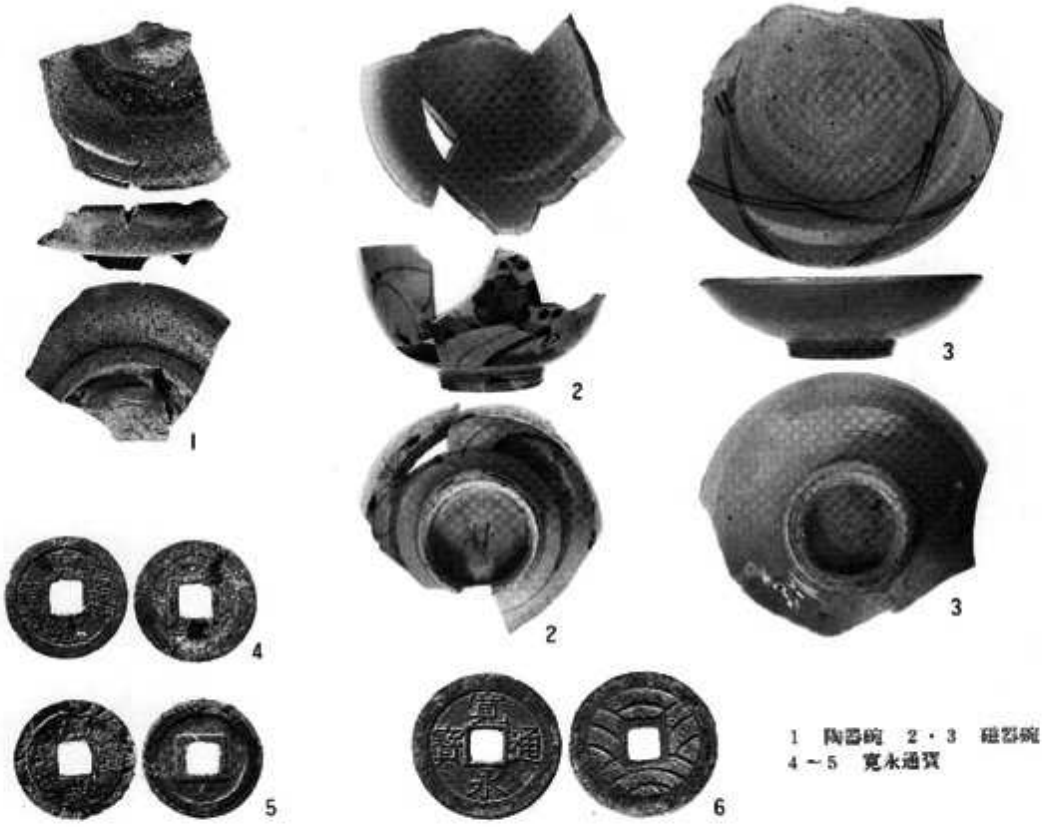
3．まとめ

調査区は全面にわたって開田時の整地によって削平、撹乱を受けており、予想された縄文時代の遺構や遺物はほとんど検出されなかった。出土遺物のほとんどが近世のものであり、遺構はすべて表土を除去した段階で検出されているが、その性格は不詳である。

遺跡全景

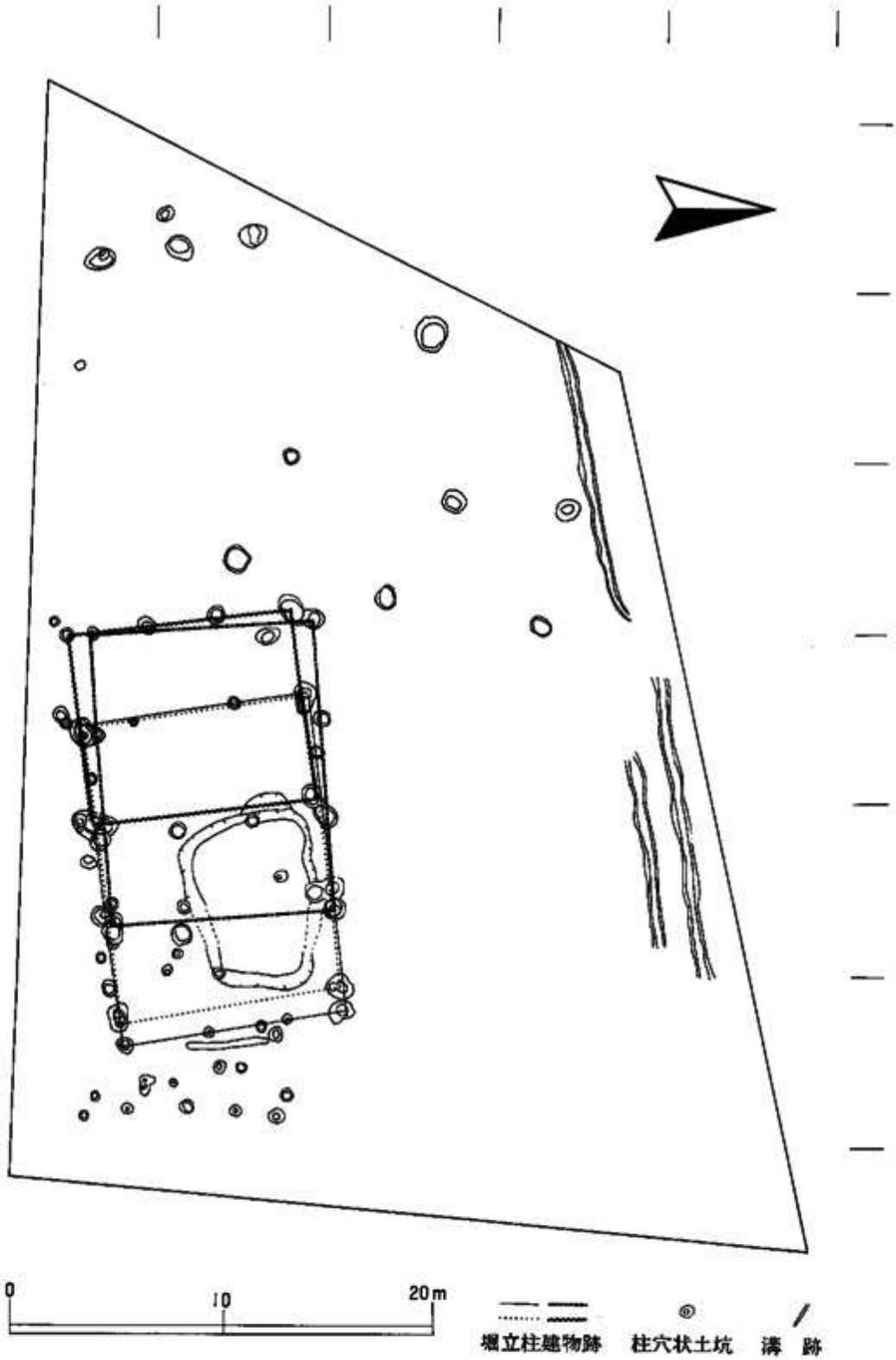


掘立柱建物跡



1　陶器碗　2・3　磁器碗
4～5　寛永通宝

越中畑Ⅳ遺跡　検出遺構・出土遺物



越中畑Ⅳ遺跡遺構配置図

(13) 越中畑Ⅴ遺跡

所在地	和賀郡湯田町第64地割133—16
委託者	日本道路公団仙台建設局　北上工事事務所
発掘調査期間	平成4年5月11日～7月10日、8月11日～9月18日
調査対象面積	4,600㎡
発掘調査面積	4,600㎡
遺跡番号・略号	MD67—2384・ECV—92
調査担当者	伊東　格・小山内　透・柳田　磨
協力機関	北上市・花巻市・湯田町教育委員会

1：50,000　横手・川尻

遺跡位置図

1．遺跡の立地

東日本旅客鉄道北上線湯田高原駅の西約1.8kmに位置し、和賀川支流の鬼ケ瀬川によって形成された洪積段丘に立地する。標高は295～300mである。調査区の現況は山林である。

2．調査の概要

時期不詳であるがきわめて現在に近い時期の炭窯4基、炭窯に伴う土坑4基、時期不明の焼土遺構3基、時期不明の溝跡1条が検出された。他に縄文時代の石器・剥片・チップ類が集中して出土している箇所や、縄文時代のものと思われる旧沢跡などが検出されている。

〈炭　窯〉

2基は調査区の北側斜面に構築されており、現地表面において中央の窪んだマウンド状を呈する。窯本体は旧表土に地山起源の黄褐色土を盛って構築されており、中央の燃焼部の底面は焼成を受け、赤色変化している。底面の下には湿気抜きのための木材が敷かれている。炭窯本体に隣接して、本体を構築する盛土を採取するための土坑が掘られている。もう2基は現地表面に地山起源の黄褐色土を盛ったマウンド状を呈する。表層は焼成を受け、赤色変化しているが、壁は検出されなかった。

〈土　坑〉

いずれも雑物撤去時に現地表面の窪みとして検出されており、きわめて現在に近い時期のものと推定される。4基とも炭窯に近接しており、消火用の水溜として用いられたものと推定される。

〈溝　跡〉

雑物撤去時に現地表面で検出されており、きわめて現在に近い時期のものと推定される。調査区の北側斜面に平行に続く。全長約15m、幅25cmで、深さは15cm程度である。

〈出土遺物〉

石鏃・打製石斧などのほか剥片、チップ類が出土している。また、縄文土器の破片がごく少量出土している。遺物の出土は調査区西端の沢に傾斜している面に集中している。

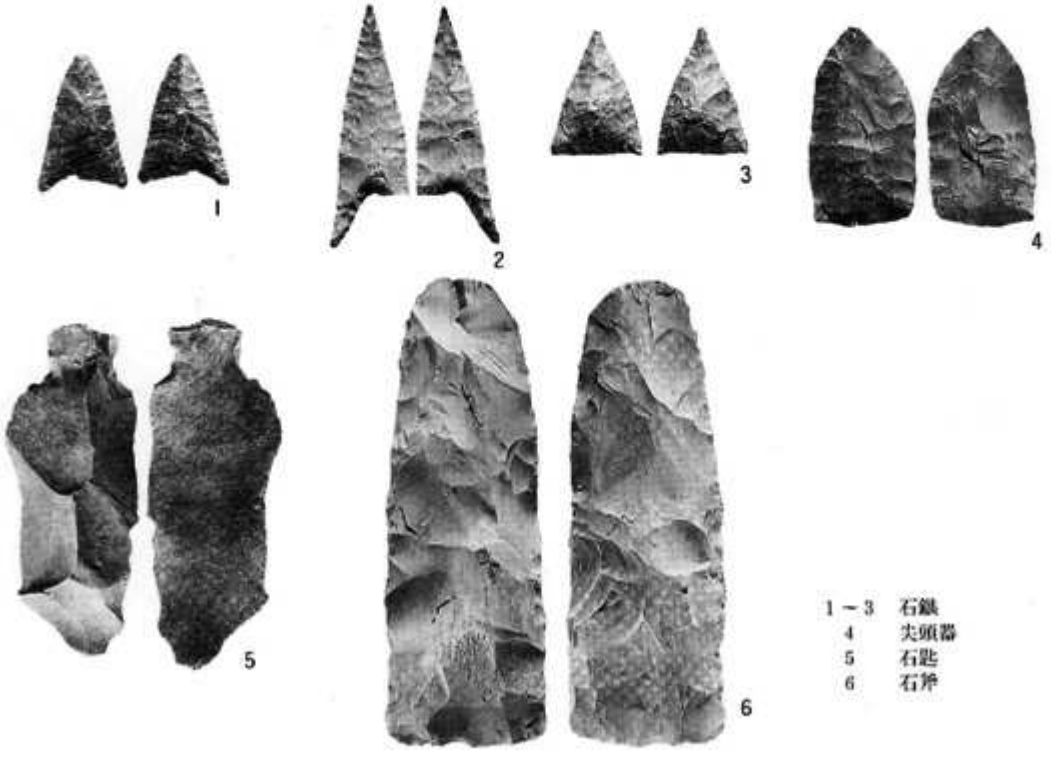
3．まとめ

今回の調査により縄文時代の石器・剥片・チップ類が集中して出土している箇所が確認されており、縄文時代にはなんらかの生活の場として利用されていたものと思われる。また、きわめて現在に近い時期においては木炭生産の場として利用されていたことが判明した。

遺跡全景

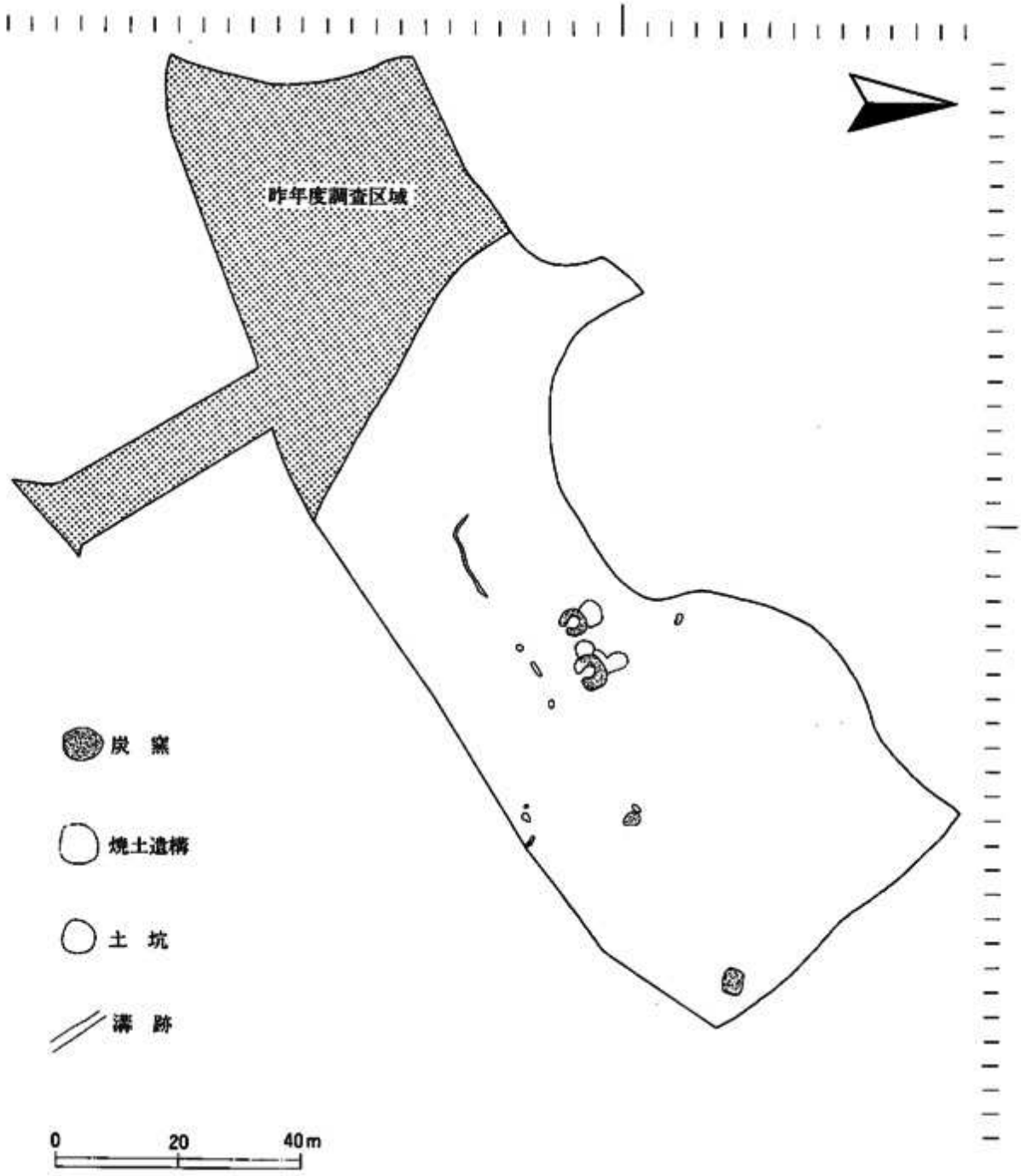
炭窯

炭窯



1～3　石鏃
4　尖頭器
5　石匙
6　石斧

越中畑Ⅴ遺跡　検出遺構・出土遺物



越中畑Ⅴ遺跡遺構配置図

II. 建設省・農水省関係

(1) 柳之御所跡

所在地	岩手県西磐井郡平泉町字柳之御所126-34ほか
委託者	建設省東北地方建設局　岩手工事事務所
発掘調査期間	平成４年４月13日～10月31日
調査対象面積	4,000㎡
発掘調査面積	4,000㎡
遺跡番号・略号	ＮＥ76-0088　・ＹＧ92-36
調査担当者	松本建速・鎌田　勉・阿部勝則
協力機関	平泉町教育委員会

1：50,000　一関・水沢

遺跡位置図

1．遺跡の立地

遺跡は現在の平泉町市街地に近く、東日本旅客鉄道東北本線平泉駅の北約600mにその南端がある。北上川の西岸に接した低位河岸段丘に立地し、北は高館と呼ばれる丘陵、西は伽羅之御所跡や無量光院跡との境になる猫間ケ淵と呼ばれる低地である。南と東は北上川とその沖積地に囲まれている。遺跡は北西から南東に細長く、最大長・最大幅はそれぞれ725m・212mで、残存する面積は約10万㎡である。調査区の標高は22～27m、北上川の現河床との比高差は10～15m、沖積地との比高差は2～7mである。発掘調査前は住宅地と水田・畑地として利用されていた。なお、今回の調査区は昭和44（1969）年の1次調査区から数えて36次調査区となる。

2．調査の概要

36次調査区は、28次調査区（1990年度、大きな建物群や苑池跡が検出された地区）の北西にあたる。調査区の東側は北上川に沿った平坦地、西側は推定される堀へむかう緩やかな斜面となる。そして当調査区は平坦地から緩やかな斜面部に移り変わる縁にあたる。平坦地からは、建物の付近にあったと考えられる塀跡や整地層、各種の土坑などが検出された。11次調査で検出された堀立柱建物の付近には柱穴が複数あったが、建物として認識はできなかった。緩やかな斜面部に移り変わる縁にあたるところからは井戸状遺構、各種の土坑などが検出されたが、建物はなかった。

〈塀　　跡〉

28次調査で検出された大きな建物群の北西部にあたる地区から、塀跡が4条検出された。すべてほぼ平行しているが、同時にあった可能性があるのは2条だけである。2条には、塀に使われた材料の跡などはなく、土が埋め戻されていただけだが、他の2条には木製の板が入れられていたと思われる跡が残っていた。板塀あるいは「板囲い」と言われる性質のものであろう。すべて南へゆくにしたがって浅くなり、途中で消えてしまう。後に地面が削られたためであろう。すべてほぼ南北を向いていて、28次調査区で検出された大きな建物群にほぼ平行している。それらの建物群と外の区域を区画するための塀ではなかったかと推測される。

〈整 地 層〉

地面の上に他の場所から持ってきた土を置き、平坦にしているところがあった。正確な理由はまだわかっていないが、そこはなんらかの理由で整地された場所と考えられる。その運ばれて置かれた土を整地層と呼んだ。2面の整地層が検出されている。

整地層A

11次調査区（2間3間で四面に庇がまわる堀立柱建物が1棟あった地区（註1））に隣接して、その北部と西部にあった。北と西は水田によって削られているが、本来は西側にもう少し

延びていたようだ。整地層の土は付近の地山を構成する明黄褐色の粘土、シルト、砂から成り、厚さは約30cmである。整地層上面に12世紀後半のものと考えられるかわらけの完形品や破片が比較的多く広がっていた(11次調査で土器列と呼ばれた箇所に続く部分と思われる)。そのことからこの整地層は12世紀に造られたと考えられる。

整地層B

付近の地山の粘土、シルトを使って造られており、層の厚さは10～15cmほどだった。層中に磨耗して丸みをおびたかわらけ小片がいくつかあった。層を剝ぐと、浅い溝が3条検出されたが、それらの性質は不明である。溝は浅いので、その上部は削られたと考えられる。層中に含まれる遺物、土のしまりぐあい、硬さから、層は12世紀に造られたと考えられる。

〈井戸状遺構〉

形態と深さが井戸に近い遺構を井戸状遺構と呼んだ。今回完掘したものの中には井戸枠のあるものはなかった。主な遺構と出土遺物は以下のとおりである。

36ＳＥ2

開口部平面形　正方形（1.06×0.94m）　深さ2.9m

出土遺物　木製品（折敷破片、箸、加工材ｅｔｃ.）　外皮つき自然樹木片

植物種子（モモ、オニグルミ、ウリ科ｅｔｃ.）かわらけ破片小量

36ＳＥ3

開口部平面形　正方形（0.96×0.96m）　深さ3.2m

出土遺物　木製品（刀形、折敷破片、箸、加工材ｅｔｃ.）　外皮つき自然樹木片

植物種子（モモ、ウリ科ｅｔｃ.）かわらけ破片小量

刀形木製品は「祓」に使われたと思われる。

〈用途不明の土坑〉

土坑には用途を特定できるものがあまりない。しかし、深さが1mを越すものの中には、時にかわらけや植物の種子が多量に捨てられたかのように見受けられるものもある。主な遺構と出土遺物は以下のとおりである。

36ＳＫ8

開口部平面形　隅丸方形（1.24×1.24m）　深さ1.66m

出土遺物　木製品（ほぼ完形の折敷１枚、折敷破片多数、硯状ｅｔｃ.）

植物種子（ウリ科、ナス、山椒ｅｔｃ.）　昆虫（シラホシハナムグリ前翅、後翅、胸、ハエのさなぎの脱け殻）、かわらけ破片小量

36ＳＫ9

開口部平面形　不整円形（1.34×1.24m）　深さ1.14m

出土遺物　かわらけ多量‥まとめて捨てられた破片が多い。(完形品小量、ほとんどが破片)

ＳＫ８・９には井戸枠はなく、井戸にしては浅すぎる。形態、深さから考えてトイレの可能性もあるが、現時点ではそうとも言えない。ＳＫ8 からはハエのさなぎの脱け殻が出土している。しかし、ハエは養分のあるところであれば卵を産み、羽化するので、ハエのさなぎがあったことは、養分があったことを意味しはするが、すぐにトイレであったことを証明する根拠とはならない。多量の植物の種子が検出されているが、これらの種子がなぜこの穴に入っていたのかよく検討してみなくてはならない。

〈その他の出土遺物〉

温石（滑石製）１点、瓦数十片、白磁や青磁の破片が数十片、かわらけの完形品、破片がコンテナで11箱、陶器破片が９箱出土している。出土遺物のほとんどは12世紀後半のものである。

３．まとめ

36次調査区は、平坦部と緩やかな斜面部に分けることができた。平坦部は、28次調査で大きな建物が検出された地区の北部に隣接する地域や、11次調査で建物跡が検出された周辺にあたるが、今回の調査では明確な建物跡は検出されなかった。ただし、28次調査区に隣接する地区からは区画のための塀跡と考えられる遺構が検出された。そして、その塀跡の西側からは建物跡は検出されていない。

緩やかな斜面部の縁にあたる地区からは井戸状の遺構が検出された。そして、それが埋められてゆく過程で、「祓」に用いられたと考えられる刀形木製品が入れられたりしたことがわかった。また、モモの種も井戸状の穴から比較的まとまって検出されたが、これも「祓」に使われたものであるかもしれない。窪地は地下の世界、「根の国」のような異界につながっていた境界と考えられていた可能性もあろう。これまでの調査で多数検出されているように、柳之御所跡、中でも大きな建物跡の周囲には、井戸状遺構のような深い窪地となっていた場所に多くの完形かわらけなどを捨てたりする行為が多数見られた。昨年度の31次調査では、完形の鏡が井戸状遺構最低面近くに埋められていた。これらのような遺構や行為は柳之御所跡の性質を解く重要な手がかりになるのではなかろうか。

36次調査の平坦部は北、東側に延び、北上川まで続く。28次調査区も含め、平坦部には大きな建物が建てられ、斜面部には大きな建物はなく、それらに付随する周辺にあるべき施設がつくられたという予測が立てられよう。

(註１)平泉町教育委員会1983『柳之御所跡発掘調査報告書　－第11･12次調査概報－』平泉町文化財調査報告書第１集

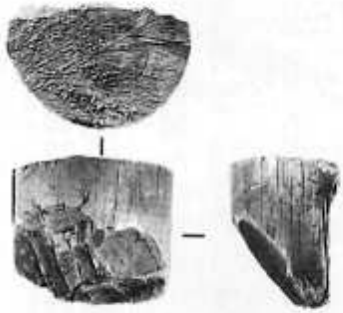
遺跡遠景（東から）　（矢印間が本遺跡）

36ＳＡＩ～ＳＡ４（堀跡）検出状況

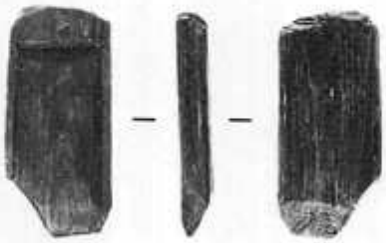
36ＳＫ８遺物出土状況

柳之御所跡　空中写真・遺構

かわらけ



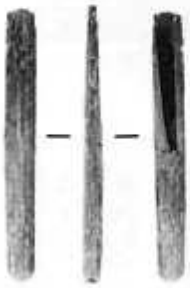
ノコギリ、チョウナの跡を残す材



硯状木製品

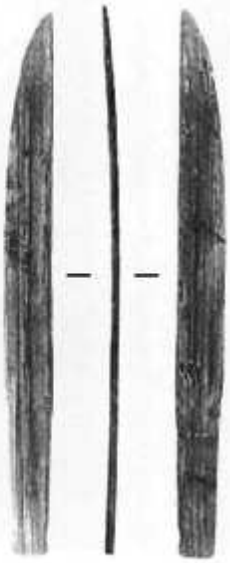
折敷

発火用具？



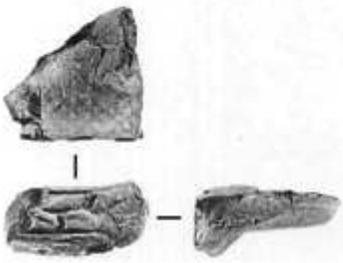
刀子柄

温石



刀形

箸



瓦

S＝⅕

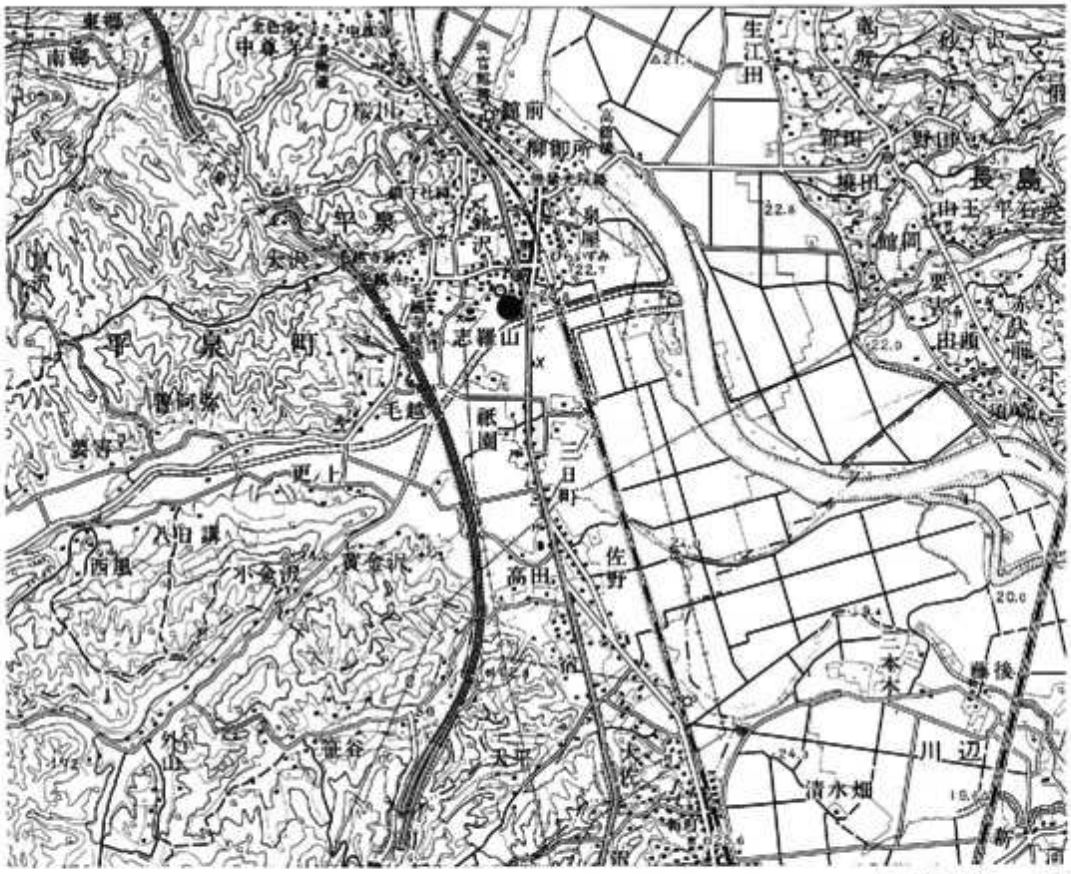
柳之御所跡　出土遺物

整地層A
整地層B
36SE3
36SE2
SA 塀跡
SE 井戸状遺構
SK 土坑
36SK8
36SK9
36SA1
36SA2
36SA3
36SA4
0
5
10
15m

柳之御所跡遺構配置図

(2) 志羅山遺跡

所在地	西磐井郡平泉町平泉字志羅山32-2、34-5
委託者	建設省東北地方建設局　岩手工事事務所
発掘調査期間	平成4年4月13日～7月31日
調査対象面積	3,300㎡
遺跡番号・略号	NE76－1088・SR－92
調査担当者	佐々木　務・川村　均・柳田　磨
協力機関	平泉町教育委員会



遺跡位置図

1．遺跡の立地

遺跡は東日本旅客鉄道東北本線平泉駅の南西約300mにあり、東に向かって流れる北上川支流の太田川北岸に位置する。東側には国道4号が南北に走り、調査区の南東で太田川と交差する。調査区の南側は太田川沿いの自然堤防状の微高地の上にあり、北側はやや低くなる。調査開始前の現況は水田・畑地・荒地で、水田のある西側には遺構は検出されなかった。調査区の標高は22～23mであるが、東側はごく最近の礫混じりの盛土が厚いところで2m程も堆積しているため、遺構検出面の標高は20～22mになる。

2．調査の概要

12世紀に属する遺構・遺物が主体になり井戸跡・溝跡・土坑類などが検出され、かわらけ・陶磁器・木製品等が出土している。

それ以外の時期の遺構は、より古いと考えられる溝跡・住居跡、また新しいと考えられるカマド状遺構・溝跡が検出されている。

〈住 居 跡〉

竪穴住居跡と考えられるが、床面まで削平されており、カマドの焼土と住居跡に伴う土坑2基が検出された。遺物から平安時代中頃のものと考えられる。

〈溝　　跡〉

新旧合わせて10条検出されている。このうち12世紀と考えられるものは7条あり、それより古いものが1条、新しいものが2条ある。

最も古い溝跡は12世紀の遺物が出土する溝跡に切られており、ほぼ東西方向に延びる。この溝跡が今回調査した中では最大の溝跡で、開口部の幅が約3m、深さが最大で約2m、検出された延長が約45mの規模である。この溝跡に伴う遺物が認められないため、機能していた時期は確定できない。ただし埋土中に火山灰と思われる土が堆積しており、これからなんらかの情報が得られる可能性がある。

12世紀と考えられる溝跡は東西方向に延びるものとそれに北から直交するものとがある。地形に起因するためか、いずれも南あるいは東に向かって傾斜しており水は溜まらずに流れるようになっている。最も南にある溝跡は断面形が浅皿状で他の溝跡とは異なる形状をしている。遺物は陶磁器やかわらけが出土しており、陶磁器が比較的多い。

新しい溝跡2条からは煉瓦の破片なども出土しており、ごく最近まで機能していたと考えられる。

〈井 戸 跡〉

6基検出されている。南側の3基が出土遺物から12世紀の井戸跡と考えられる。他の3基は

時期不明であるが、12世紀と考えられる溝跡を切っている。12世紀の井戸跡のうち南側の２基から多くの遺物や、雲母片が出土している。いずれの井戸跡も完掘後には多量の水が涌いてきた。

〈カマド状遺構〉

屋外に設置されたものと考えられる。若干潰れた球形状に地面を掘り込み、それに焚き口が設けられた形で、平面形は鍵穴状を呈する。染付と考えられる小片が出土しており、比較的新しい時期の遺構と考えられる。

〈そ の 他〉

土坑類が13基検出されている。柱穴状のものと性格不明のものとがある。出土遺物から、多くは12世紀に属すると考えられる。

〈出土遺物〉

12世紀の遺物が主体になり、多くは溝跡・井戸跡から出土している。溝跡からは国産の陶器・中国産の陶磁器・かわらけ・瓦などが出土している。今回出土した陶磁器は主に溝跡から出土している。井戸跡からは陶磁器はごく小量しか出土せず、かわらけ・木製品が多く出土している。木製品には下駄・折敷・曲物・椀などがあり、墨書のあるものもある。また、雲母片が多く出土しているのが特徴としてあげられる。

３．まとめ

今回の調査区では12世紀の遺構・遺物が太田川沿いにまで広がっていた。建物跡は検出されなかったが、井戸跡や溝跡、あるいはそこから出土する遺物から調査区に近接する場所になんらかの施設があるものと考えられる。溝跡については調査区外にも延びており、今後周辺での調査が進むにつれて性格がよりはっきりすると考えられる。

調査区全景

溝跡

井戸跡

漆器椀出土状況

かわらけ

白磁壺

青磁碗

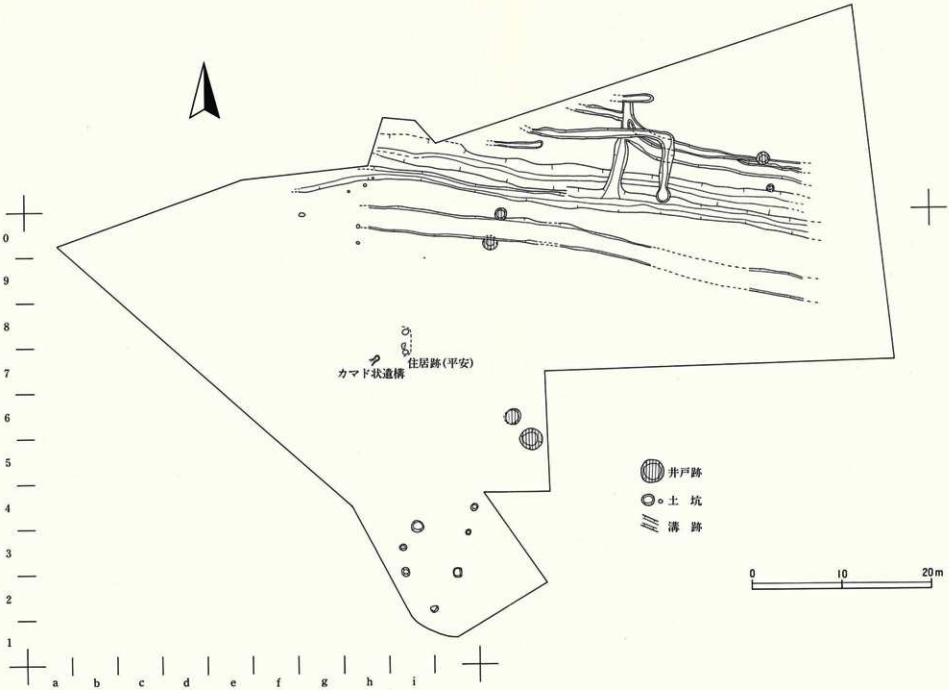
漆器椀

下駄

折敷破片（墨書）

志羅山遺跡　検出遺構・出土遺物

II



志羅山遺跡遺構配置図

(3) 白井坂（しらいざか）Ⅰ遺跡

所在地	水沢市佐倉河字白井坂46－2ほか
委託者	建設省東北地方建設局　岩手工事事務所
調査期間	平成4年7月31～11月13日
調査対象面積	6,000㎡
発掘調査面積	6,000㎡
遺跡番号・略号	NE06－2314・SI－92
調査担当者	川村　均・佐々木　務・柳田　磨
協力機関	水沢市教育委員会

遺跡位置図

1．遺跡の立地

白井坂Ⅰ遺跡は水沢市役所から北に約3km、胆沢城跡から南に1.5kmに位置し、水沢段丘の北東端に立地している。段丘下は北上川の沖積地となっており、遺跡の標高は約48mで沖積地との比高は9～10mである。現況は雑木林である。

2．調査の概要

検出された遺構は、縄文時代、平安時代、中世の館跡に関する遺構に大別できる。縄文時代では土坑3基、平安時代では竪穴住居跡2棟、土坑6基、溝跡1条である。中世の館跡に関する遺構では、堀跡1条、土塁1条、柵列3条、掘立柱建物跡8棟、門跡2カ所4基、溝状遺構18条、焼土遺構8基、道路状遺構2条等である。遺物は縄文土器が若干、須恵器・土師器が大半を占める。また、陶磁器等も出土している。

(1) 平安時代に属する遺構

〈竪穴住居跡〉

1棟は遺跡の北西で検出され、平面形は方形、規模は8×8m、深さ30cmである。周溝、柱穴、土坑も検出されている。カマドは南壁の東側に設置される。もう1棟は北東で検出され、平面形は不整楕円形、規模は3×2.5m、深さ25cmである。カマドは検出されていない。これらの住居内からロクロ使用成形による須恵器の坏、甕、同じく土師器の坏、甕、また、灰釉陶器の皿が出土している。

(2) 館跡に関する遺構

〈堀跡・土塁〉

堀跡は遺跡の西から北東にかけて直線的に延びる。上部幅7～8m、深さ5～6mを測る。断面形は薬研堀状を呈する。土塁はこの堀跡の内側に構築されており、長さ60m、幅4m、高さ1.5～2mの規模である。断面観察から整地と積み上げが繰り返し行われていることから数時期にわたる構築が考えられる。

〈門　跡〉

東側の段丘縁辺中央付近に1カ所、北側の土塁中央付近に1カ所検出されている。柱穴の規模は径50cm、深さ100cm 前後であり、他の柱穴より掘り方が一周り大きい。ともに建て替えが行われている。

〈掘立柱建物跡〉

北東部、中央部で8棟検出されている。最小規模は2間×2間(4.5×4.5m)、最大規模は7間×5間(13.8m×10m)である。柱穴が合計1400個余り検出されていることから、今後の

整理の過程で棟数が増加するものと思われる。

〈柵列・柱穴列〉

柵列は東側段丘縁辺で3条検出されている。溝状を呈し、不規則ながら所々に径10cm前後の柱穴がみられる。最長の柵列は幅20cm、深さ10cm、長さ100 m（一部道路により途切れる）である。他の2条は南東端でみられ最長柵列の内側に位置する。いずれも幅20cm、深さ30cmを測り、長さは7mと10mである。柱穴列は北側門跡の内側に1列検出され、長さ8mである。

〈溝状遺構〉

遺跡の北側、中央部、西側で検出されている。形状は直線状、鉤形状等である。長さは最長20m、18条のうち9条は、門跡に付随するものや堀跡に並行するものがあり、性格的には板塀跡と考えられる。他については時期、性格とも不明である。

〈土　　坑〉

中世に属する土坑は中央部付近に3基検出されている。他の時期に比べ大型の土坑である。形状は円形、楕円形を呈し、規模は長軸で3～5mである。3基ともに埋土に炭化物の層がみられ陶器片が若干包含される。

〈焼土遺構〉

遺跡の北部で検出されている。形状は円形、メガネ状、楕円形等があり、規模は径50cm前後のものが多い。20cm前後の掘り込みに焼土が形成されている。性格的には屋外炉とみられる。

〈出土遺物〉

平安時代の竪穴住居跡から出土した須恵器、土師器がコンテナで10箱で大半を占める。これらの土器と共伴して9世紀代の灰釉陶器（皿、碗）が2点出土している。中世の陶磁器は破片であるが、約250 点出土している。器種別にみると皿、壺、下ろし皿、稜花皿等があり、東海系や在地産の国産品、中国等からの舶載品がみられる。古銭は7種類30枚の出土であり、永楽通宝が11点と最多である。鉄製品は刀子、鉄鏃、火打ガマ等40点である。その他、縄文時代の遺物が若干出土している。

〈ま と め〉

今回の調査により縄文時代から中世に至るまでの遺構、遺物が発見され、複合遺跡であることが判明した。とくに、平安時代の竪穴住居跡から出土した灰釉陶器は、共伴する他の遺物の年代観を考察するうえで好資料となろう。また中世の館跡に関する遺構、遺物も発見され、当地方の中世の歴史を解明する貴重な資料を得ることができた。

遺跡・空中写真

竪穴住居跡全景

灰釉陶器（碗）

青磁（稜花皿）

陶器（下ろし皿）

灰釉陶器（皿）

染付（皿）

須恵器（坏）

永楽通寶

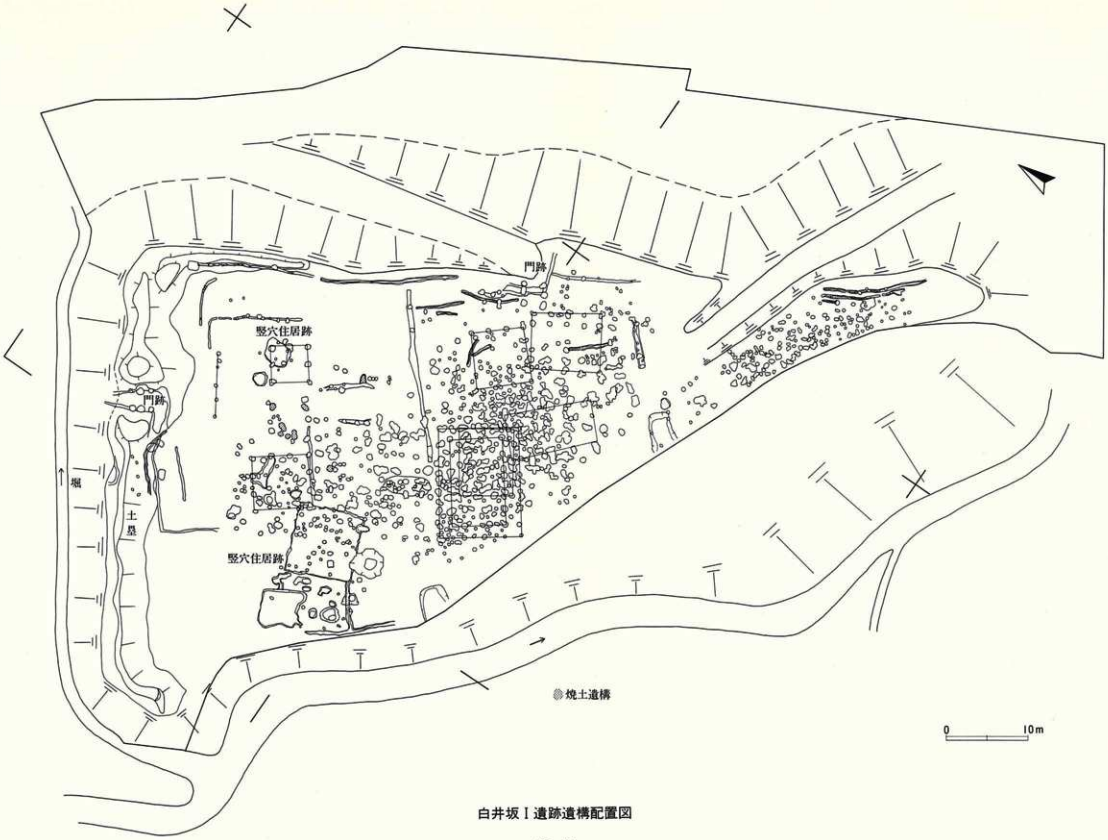
火鉢

須恵器（鉢）

硯

火鉢

白井坂Ⅰ遺跡　検出遺構・出土遺物



白井坂Ⅰ遺跡遺構配置図

(4) 上村遺跡

所在地	下閉伊郡山田町織笠第10地割155,156
委託者	建設省東北地方建設局　三陸国道工事事務所
発掘調査期間	平成4年4月13日～8月31日
調査対象面積	2,000㎡
発掘調査面積	2,000㎡
遺跡番号・略号	MG04－0086・KM－92
調査担当者	鈴木貞行・熊谷博由
協力機関	山田町教育委員会

遺跡位置図

1．遺跡の立地

上村遺跡は東日本旅客鉄道山田線織笠駅の北西約0.6km付近、岩手県立山田高等学校の東側に位置し、織笠川左岸の山地丘陵、大畑山地南端縁辺部の南向き斜面に立地している。調査区内には、斜面を切り崩し畑地造成した狭い平坦地が何段にも廻っている。標高は42～46mで、現況は山林である。

2．調査の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡１棟、鍛冶場跡２カ所、製鉄炉跡８基、鍛冶炉跡２基、木炭窯16基、土坑６基である。

〈竪穴住居跡〉

調査区の北西側で１基検出された。撹乱により規模は確認できなかったが、北西壁沿いにカマドが検出された。カマドの袖部に使用したと考えられる平らな石が出土した。時期は出土遺物から奈良時代である。

〈鍛冶場跡〉

調査区東側と西側で１カ所ずつ検出された。東側のものは平面形が楕円形で、規模が46×30cmの鍛冶炉が検出され、その周辺部で鍛造剝片が少量出土している。分布範囲は狭い範囲に限定される。一方の西側で検出されたものは、大きな礫（鉄床石）を中心に広い範囲で多量の鍛造剝片が出土した。鉄床石の北側で、平面形が隅丸長方形の鍛冶炉が検出された。この鍛冶場跡は、平坦面を造り出した痕跡と柱穴状の小ピット３個が確認されたことから、上屋構造物があったことが推定される。

〈製鉄炉跡〉

８基検出された内、５基は大幅な削平を受けており、炉床、炉壁、残留滓が確認されたが炉体の規模は不明である。残り４基の炉体は円形を呈し、半地下式竪型炉に属すると考えられる。規模は直径0.6～0.8mで斜面下方に前庭部を有している。残存状況のよい中央部北側の１基は前庭部下方に直径0.4mで円形の流動滓が出土している。東側の１基には前庭部に多量の砂鉄が残っていた。検出された炉の中に、炉体の掘り込みの浅いものがあり、これらは精錬炉の可能性も考えられる。

〈木 炭 窯〉

16基検出された木炭窯は、全て伏焼式のもので、規模により、２つのタイプに分けられる。大型のものは４基で平面形が隅丸長方形、規模は長さ3.5～4.5m、幅１～1.5m、である。長軸方向は北東～南西方向を示し、等高線にほぼ平行している。他の12基はいずれも小型のもので、平面形が楕円形ないしは隅丸長方形と推定されるが、これらは撹乱や重複のため正確に把握で

きなかったものが多い。

〈土　　坑〉

中央部西寄りで検出された平面形が長方形の土坑１基は、埋土中に多量の砂鉄を含んでおり、鉄生産に関連する遺構と考えられる。調査区西側で検出された５基の円形土坑は、規模が直径0.3～0.4mのもので、検出面、埋土状況から、新しい時期のものである。

〈出土遺物〉

鉄生産関連では廃滓場と考えられる調査区南側斜面に、多量の鉄滓が出土した。これらの大半は流動滓であるが、椀形滓や鉄塊系遺物も混じって出土している。鍛冶場跡からは鍛造剝片の他、完形の鉄鉗（ちょうばし）１点が出土した。製鉄炉からは炉内滓、砂鉄焼結滓、炉壁、羽口等が出土している。

土器類は量的には少なく、殆どが奈良時代の土師器である。住居跡内からは甕と壺が約８個体出土した。他には弥生時代後期の破片が少量出土している。

特殊な遺物としては、土製紡錘車１点、切り子玉（水晶）１点が上げられる。

３．まとめ

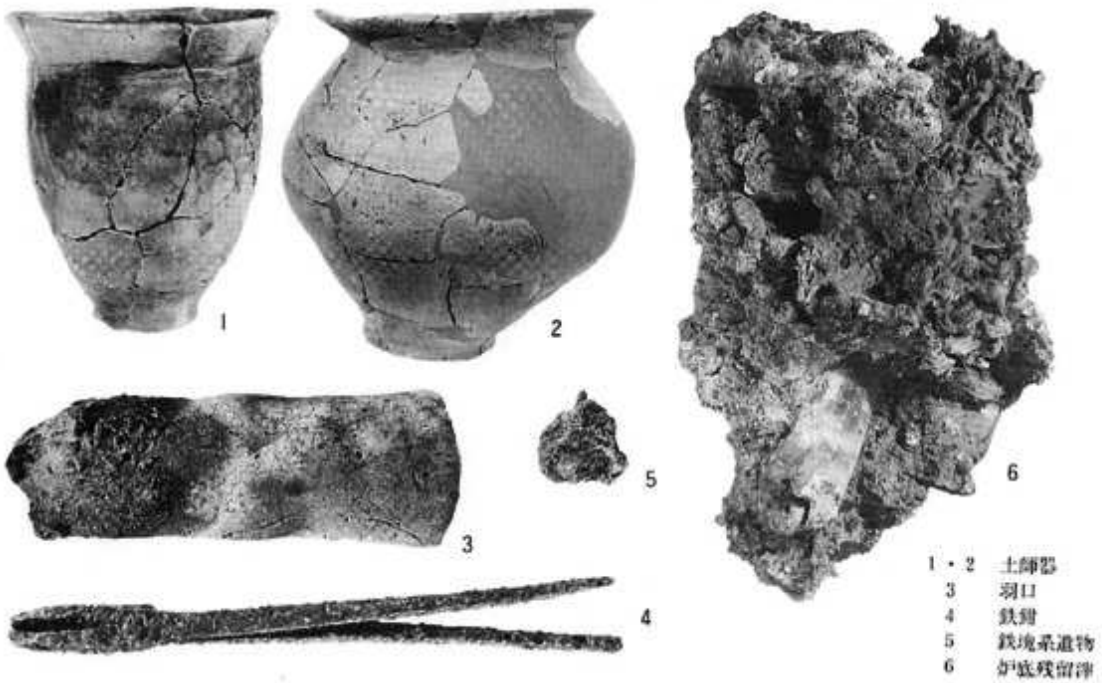
今回の調査により、本遺跡は古代の鉄生産遺跡であることが明らかになった。検出された鉄生産関連遺構は、重複状況や検出層位から操業時期の変遷も考えられ、いままで不明な点の多い古代の鉄生産過程解明に好資料が得られる、貴重な遺跡となった。

調査区全景

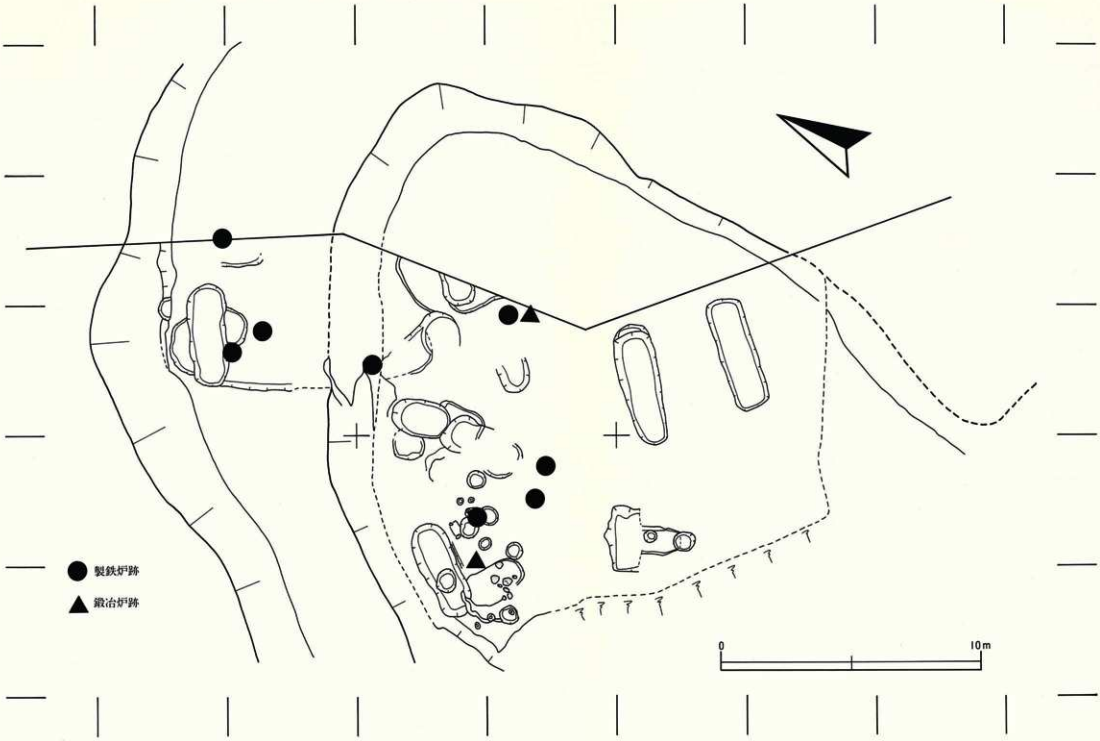
製鉄炉跡

製鉄炉跡（２基）

鍛冶炉跡



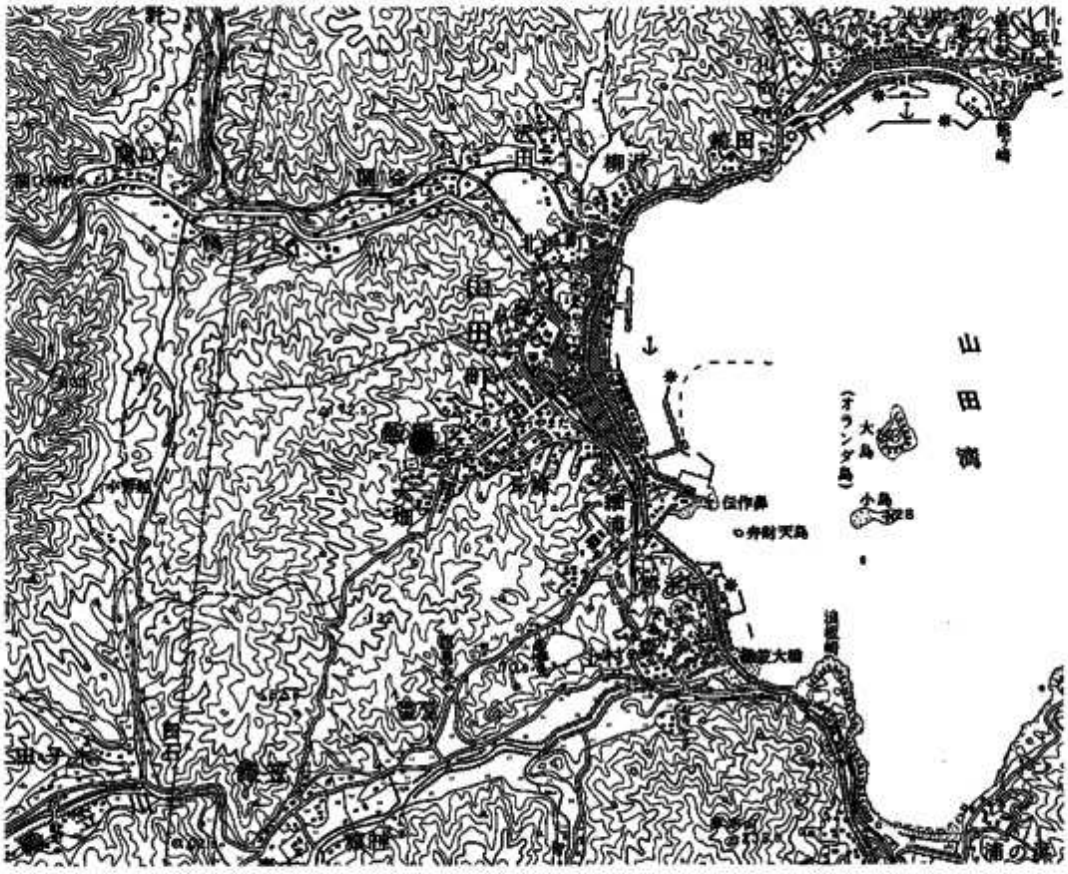
上村遺跡　検出遺構・出土遺物



上村遺跡遺構配置図

(5) 大畑（おおはた）II 遺跡

所在地	下関伊都郡山田町飯岡6地割ほか
委託者	建設省東北地方建設局　三陸国道工事事務所
発掘調査期間	平成4年9月1日～11月13日
調査対象面積	1,000㎡
発掘調査面積	425㎡
遺跡番号・略号	LG93－2345・OHTII－92
調査担当者	渡辺洋一・鈴木貞行・熊谷博由
協力機関	山田町教育委員会



1：50,000　大槌

遺跡位置図

1．遺跡の立地

大畑Ⅱ遺跡は、東日本旅客鉄道山田線陸中山田駅の西方約1.0km付近に位置し、大畑山地の尾根及び山麓部に立地している。標高は47～55m、山麓部下位に広がる山田湾岸低地との比高は約23mである。遺跡の現況は荒れた畑と山林である。

2．調査の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡10棟・炉跡２基・焼土遺構７基・土坑40基・柱穴状土坑35基・陥し穴状遺構１基・溝跡３条・堀跡２条・鍛冶跡３基・炭窯２基である。遺構の占地は、尾根の北縁に近い平坦部分に竪穴住居跡や土坑・溝跡・堀跡が、そしてこの平坦部から続く南山麓部に等高線に沿うように竪穴住居跡や土坑・鍛冶跡などが集中する。本年度はこのうち竪穴住居跡２棟・焼土遺構１基・土坑11基・柱穴状土坑８基・鍛冶跡２基を精査した。遺物は本年度は、縄文時代中期末の土器を中心に縄文時代と思われる石器、弥生土器片数点、土師器片・須恵器片数点、鉄器・鉄滓・羽口片が出土している。

〈竪穴住居跡〉

尾根の北縁に近い平坦部分、そしてこの平坦部から続く南山麓部の緩斜面部に検出された。本年度精査された南山麓部の緩斜面部の２棟は、斜面下半部を削平されているが、平面形は１棟が2.6×1.5m、他の１棟は10.6×４mの長方形を呈すると思われる。地床炉を有する。柱穴配置は明確でない。遺物は床面から縄文土器片と共に刀子・釘等の鉄製品、羽口片・鉄滓が小量出土する。時期は鉄製品出土にかかわると思われるが明確でない。

〈焼土遺構〉

尾根の平坦部分東に２基、南山麓部の緩斜面部に５基検出された。本年度精査された南山麓部の緩斜面部の１基は径30cm・最大厚5cmである。時期は不明である。

〈土　　坑〉

尾根の平坦部分に27基、そしてこの平坦部から続く南山麓部の緩斜面部に13基検出された。本年度精査されたのは南山麓部の緩斜面部の11基である。東側の２基は斜面下半部を削平されているが1.8×1.3mの長方形を呈すると思われる。他の西側の９基のうち８基は平面形は円形(開口部径が0.7～1.4m)・断面形は皿形である。他の１基は開口部径２×1.6m・底径2.2×1.9m・深さ１mのフラスコ形を呈する。付近に縄文土器が多く、かつ西側は遺構の堀込面が縄文土器包含層の上であること、などから多くの遺構の時期・性格の決定は決定しがたいが、出土する土器から縄文時代中期そして古代の時期の可能性が高い。

〈柱穴状土坑〉

尾根の北縁に近い平坦部分、そしてこの平坦部から続く南山麓部の緩斜面部に検出され、竪

穴住居跡の占地に重なるものが多い。建物跡にかかわるかは不明である。

〈鍛 冶 跡〉

本年度精査された鍛冶跡と思われる遺構は、平面形が円形で開口部径20～30cm・深さ20cm、断面形は擂り鉢状を呈する。壁面は火熱を受けている。埋土から鉄滓が出土している。竪穴住居跡からも検出しており、鍛冶跡と思われる。尾根の平坦部分では本年度は検出していないが、すでに羽口片・鉄滓が出土し、竪穴住居跡内からは検出していることから今後検出される可能性は十分あろう。

〈溝跡・堀跡〉

調査区が載る尾根の北縁に近い平坦部分の西側・北縁・東側で検出された。堀跡とした2条のうち西側の遺構は上場が1.8m・深さ0.8m、断面形は緩いU字を呈し、東側の遺構は上場が2.4m・深さ0.9m、断面形は箱薬研堀状を呈する。溝跡とした3条のうち西側の遺構は尾根を断ち切るように位置し、北縁部分では深さが現表土から1.6mに達する。尾根の北縁の溝跡は、途中2m程切れている浅い溝である。東側の溝跡は上場が0.4m・深さ0.3mと小規模であるが、断面形はしっかりした箱薬研となる。いずれの溝跡・堀跡も本年度は精査しておらず、遺構の時期・性格は不明であるが、竪穴住居跡を囲むこの遺構の占地のあり方は、この遺跡の性格を考える上で重要になろう。

〈炭　　窯〉

尾根の平坦部分東側に2基検出した。壁面は火熱を受け埋土からは炭が出土している。

〈出土遺物〉

本年度の遺物は、縄文時代中期末の土器が尾根平坦部東からも出土するが多くは南山麓部緩斜面の西側から出土している。石器は石鏃・石匙が少量、石斧7点、磨石15点等が尾根平坦部や南山麓緩斜面部から出土している。弥生土器片・須恵器片の数点は平坦部や南斜面部から、土師器片数点は平坦部のみの出土である。鉄器・鉄滓・羽口片は南山麓部緩斜面部の遺構からも多いものの、尾根平坦部からも出土している。鉄にかかわる遺物は竪穴住居跡内からも検出していることから未精査の尾根平坦部の竪穴住居跡からの出土が期待される。

3．まとめ

本年度精査した南山麓部の緩斜面部からは縄文時代中期末の土器・遺構、鉄器・鉄滓・羽口とこれにかかわると思われる遺構、そして未精査ではあるが尾根平坦部から出土した縄文土器、鉄器・鉄滓・羽口や検出した古代と思われる竪穴住居跡、加えて尾根平坦部の竪穴住居跡を区画するかのような堀・溝等、検出された。以上のことから本遺跡は縄文時代、そして古代と思われる鉄にかかわる遺構を持つ集落跡等、複合遺跡と思われる。

調査区の尾根平坦部（北西から）

調査区の南斜面部（南から）

1

2

3

5

4

6

7

8

1・2　石鏃　　8　須恵器
3　石匙　　9　楕整滓
4　磨石　　10　流動滓
5　縄文土器　11　羽口
6　弥生土器　12　鉄器
7　土師器

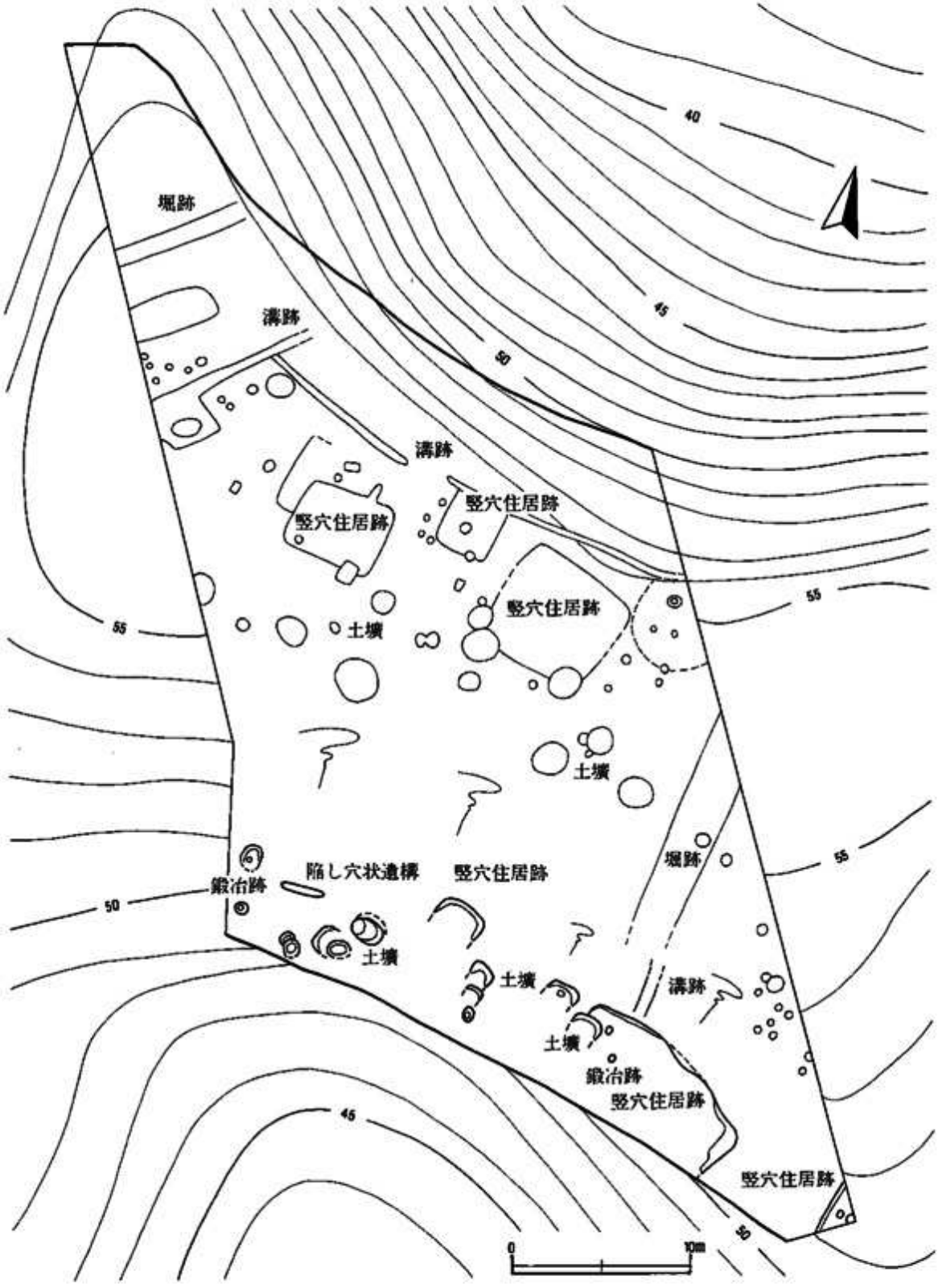
9

11

10

12

大畑Ⅱ遺跡　調査区近景・出土遺物


40
45
50
55
50
45
堀跡
溝跡
溝跡
竪穴住居跡
竪穴住居跡
竪穴住居跡
土壙
土壙
55
55
55
堀跡
鍛冶跡
陥し穴状遺構
竪穴住居跡
土壙
土壙
土壙
溝跡
鍛冶跡
竪穴住居跡
竪穴住居跡
0
10m

大畑Ⅱ遺跡遺構配置図

(6) 猪川館跡

所　在　地　大船渡市猪川町字前田79－6ほか

委　託　者　建設省東北地方建設局　三陸国道工事事務所

発掘調査機関　平成4年4月9日～11月5日

調査対象面積　5,750㎡

発掘調査面積　5,750㎡

遺跡番号・略号　ＮＦ38－1324・ＩＫ－92

調査担当者　斎藤博司・渡辺洋一・鈴木貞行・小山内　透・阿部勝則・熊谷博由

協力機関　大船渡市教育委員会

1：50,000　盛

遺跡位置図

1．遺跡の立地

猪川館跡は東日本旅客鉄道大船渡線盛駅の北西約1.4km、国道45号の西側に位置する。東流する盛川左岸の小起伏山地南端部に立地している。遺跡の標高は約67mで、河岸低地との比高は約60mである。調査区の現況は山林である。

2．調査の概要

調査区は主郭と想定される神社の西側を南北に縦断する。今年度は尾根の北側を調査した。検出された遺構は、掘立柱建物跡1棟、竪穴住居跡3棟、平場5カ所、段築8カ所、堀跡1条、柱穴列2条、柱穴状ピット1850個、土坑215基、井戸跡1基、墓壙1基、炭窯2基、溝及び溝状遺構23条、周溝3条、焼土遺構6基、集石4カ所である。

〈平場・段築〉

平場は5カ所存在する。土盛り造成された段築で構成される3カ所が含まれ、規模は幅5.5～16.5m、長さ48～75mで帯状を呈する。他の2カ所の規模は48.5m×57.5m、42.5m×51.5mの隅丸長方形を呈し、猪川館では比較的大きい平場である。段築は8カ所存在し、東から北東に面して構築されている5カ所と、北端の堀に沿って後方に構築される3カ所である。高さは最大3.5mで、盛り土の厚さは約1.2 mである。

〈堀　　跡〉

調査区北端に存在し、自然の沢筋に沿って西から東へ下る。掘り上げられた土は、堀の南側と北側に盛り土されている。規模は東端部で最大を示し、現況で上幅9m、深さ6mを測り、西端部で収束する。中間での上幅は6.3m、深さ2.6mで、盛り土の厚さが1.8mである。

〈竪穴住居跡〉

3・4号平場に存在し、それぞれ1棟と2棟である。4号平場の1棟は東半が調査区域外である。径3.8mの強の円形と推定され、壁は底面から外傾し、高さが最大43cmである。柱穴や炉は検出されず、遺物も僅少である。3号平場の住居跡は5.1m×2.4m以上の隅丸(長)方形を呈し、東半が削平されている。壁は底面から直立気味で、高さは最大58cmである。カマドは西壁中央部に位置し、煙道は認められない。時期は出土遺物から平安時代である。4号平場の他の1棟は7m×5mの不整形を呈する。壁は底面から直立気味であるが、北東壁は大部分が削平され、高さは最大34cmである。柱穴は6個検出され、12～24cmの円形で、床面からの深さは11～48cmである。床面のほぼ中央に焼土が認められる。

〈掘立柱建物跡〉

6号平場の中央やや北側に存在する。規模は1間（2.24m）×1間（1.98m）で、柱穴の掘り方はほぼ円形を呈し、径25～34cm、深さは38～80cmを測る。柱痕は確認されず、出土遺物もない。時期は8号段築直下から検出されることから中世以前と推定される。

〈柱 穴 列〉

8号段築の盛り土と法面の直下に存在し、8号段築とほぼ並行する。南側は8号段築の盛土に沿って並び、柱間寸法が3.12m－3.18m－3.44m－2.88m－2.52m－2.96mである。柱穴は径17～33cm、深さ23～57cmを測る。北側は8号段築の切土に沿って並び、柱間寸法が1.96m－2.64m－2.98m－2.22m－2.40m－2.22m－2.08m－1.72m－7.52m－2.32m－2.38mである。柱穴は径22～41cm、深さ8～33cmを測る。

〈土　　坑〉

各平場に存在する。平面形が（楕）円形で径2m以上の深めの土坑、平面形が楕円形や小判形で径1m以下の浅めの土坑、平面形が長楕円形で径2m以上の浅めの土坑の3タイプが主体である。

〈溝及び溝状遺構〉

各段築と並行する溝が大半である。段築構築時に形成されたもので、機能的には段築を区画するものと推定される。

〈集　　石〉

4・5・7号段築の盛り土の一部を構成する集石3カ所と、3号平場に存在する径2.1mの円形状に敷かれた集石が存在する。3号平場の集石は直下に径2.2m、深さ120cmの土坑を伴う。

〈出土遺物〉

縄文・弥生時代の深鉢、平安時代の甕や坏が大半で、石器や石製品も含まれる。中世以降では、中国陶磁器数点（染付）、中世陶器数点（美濃・瀬戸系、常滑系）、近世陶磁器170 数点（肥前及び肥前系、相馬大堀など在地もの）である。中国や肥前（系）陶磁器は染付が多く、皿・椀類が主体で、瓶や火入れも含まれる。中世陶器は碗・皿類で、相馬大堀の陶磁器は皿・碗・土瓶類である。その他に金属製品、石製品、銭貨（寛永通寶）などがある。

3．まとめ

猪川館跡は、小起伏山地の西側断崖を除いた南～東～北面が盛り土による段築や堀によって堅固に守られる中世城館である。

採掘跡を館中央部に挟んで南区と北区に分かれ、今年度の北区の調査では防御施設としての段築の時期と2条の柱穴列の時期が確認された。

遺物の出土地点や堀、土塁、柵列に囲まれ、大型掘立柱建物跡を伴う遺構の配置状況から南区が中世城館の主体部で、南区と北区では場の使い方に違いがあるものと推定される。

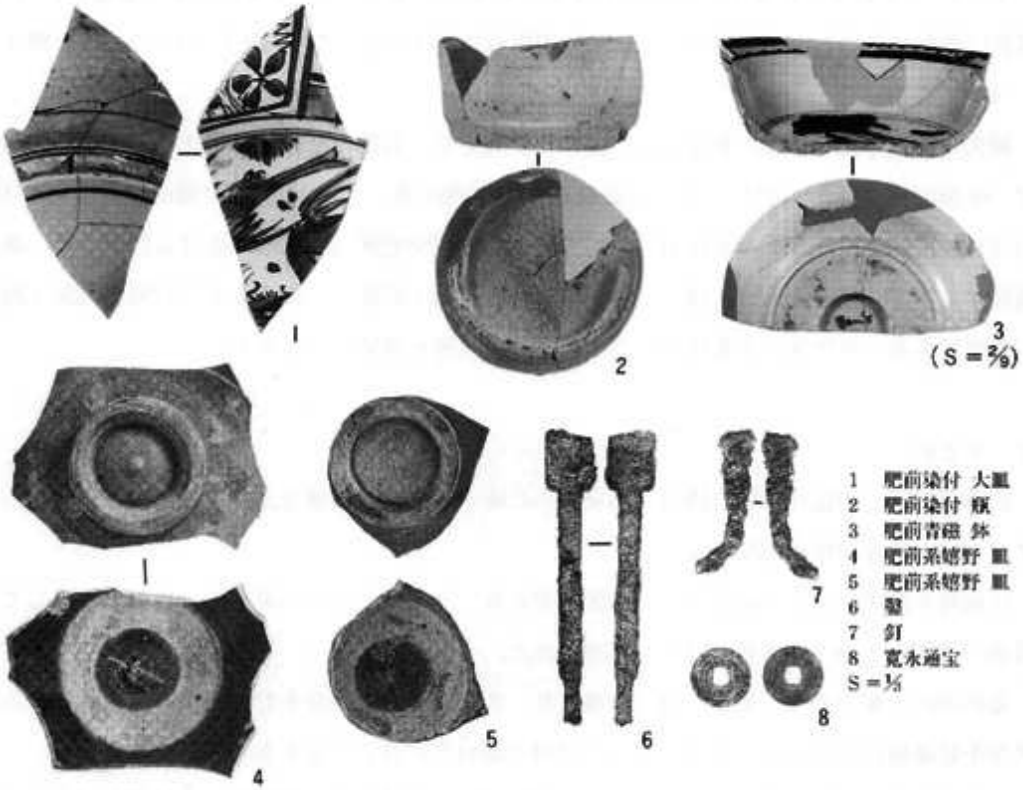
遺物の出土状況では南区の中世陶磁器、北区の近世陶磁器が一般的で、器種別では碗・皿類の陶磁器は多いが、石臼・擂鉢などは僅少である。

26号溝跡（南から）

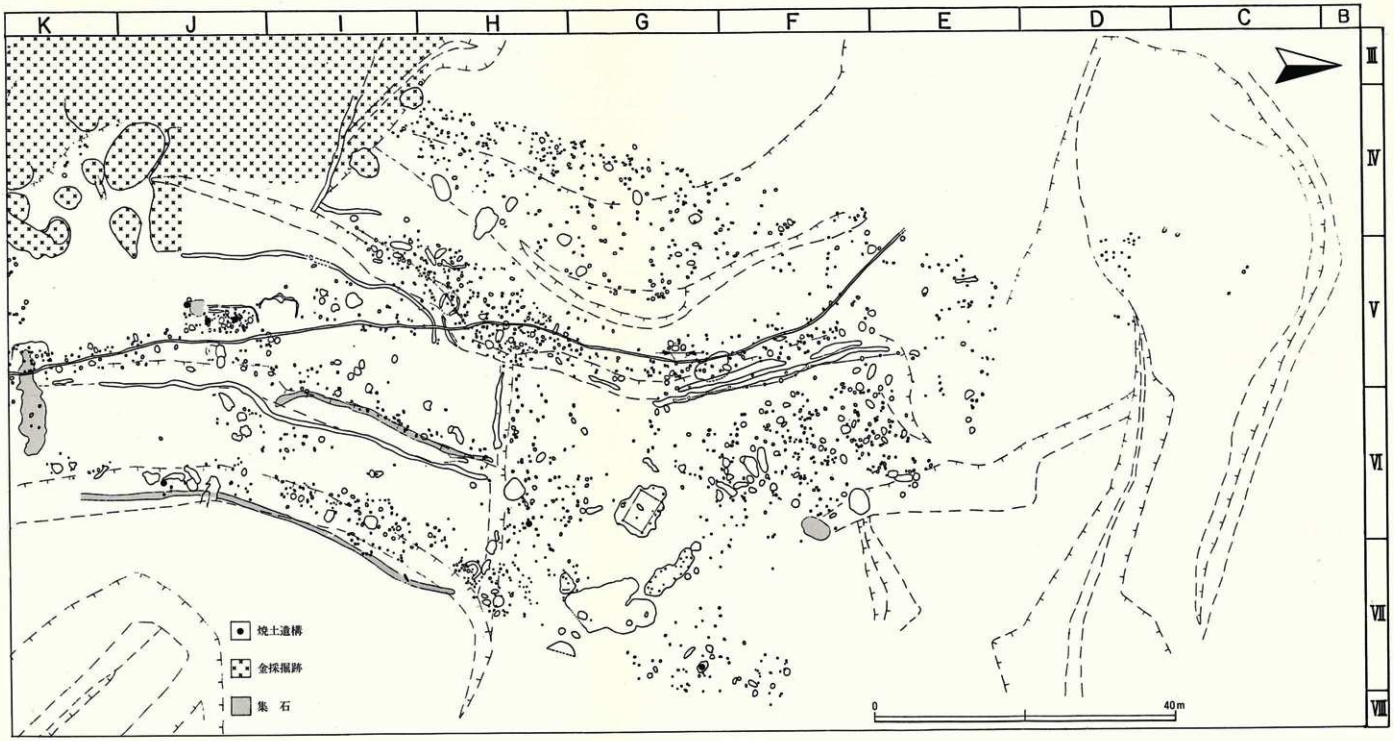
4号段築断面（北から）

20号柱穴列（北から）

5号竪穴住居跡（北から）



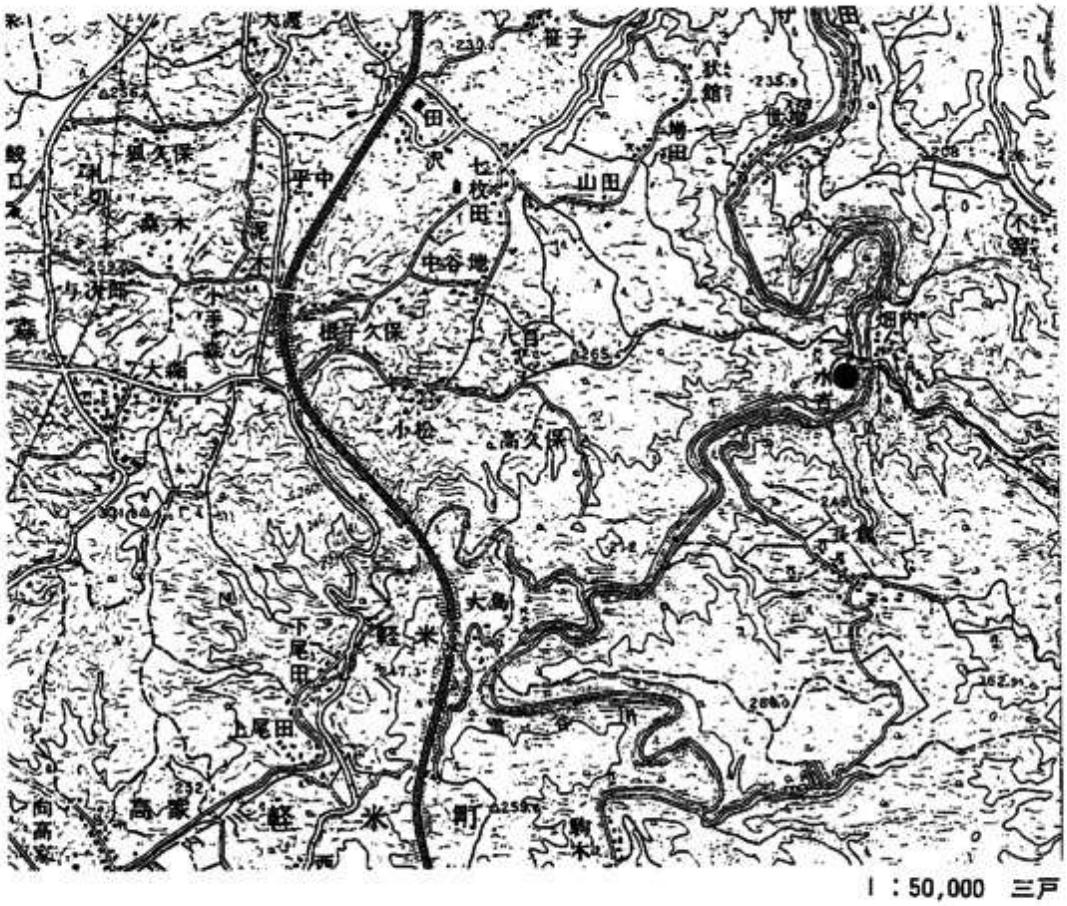
猪川館跡　検出遺構・出土遺物



搗川館跡遺構配置図

(7) 水吉（みずよし） VI 遺跡

所在地	九戸郡軽米町大字軽米第24地割字水吉22ほか
委託者	農水省東北農政局　八戸平原開拓建設事務所
発掘調査期間	平成4年4月14日～10月28日
調査対象面積	16,900㎡
発掘調査面積	16,900㎡
遺跡番号・略号	ＩＦ63－0361・ＭＹＶＩ－92
調査担当者	濱田　宏・佐々木信一・田中元明・柳田　磨
協力機関	軽米町教育委員会



遺跡位置図

1．遺跡の立地

水吉VI遺跡は、八戸自動車道軽米インターチェンジの北北東約5.5km付近に位置し、雷谷川左岸の河岸段丘上に立地する。遺跡の標高は98～110mで、ほぼ南北方向に緩やかに傾斜している。河岸低地との比高は15～22mで、遺跡の現況は山林と畑地である。雷谷川の対岸は青森県南郷村で、本遺跡の東側約500mには畑内遺跡が隣接する。

2．調査の概要

今年度の調査の結果検出された遺構は、竪穴住居跡では、縄文時代７棟（竪穴状遺構２棟を含む）、奈良時代７棟、土坑は87基（古代・時期不明を含む）、陥し穴状遺構20基、炉跡５基である。

〈縄文時代の竪穴住居跡〉

５棟の住居跡は、すべて調査区南側の段丘の先端部で検出されたものである。全体を調査できたものは２棟であり、残りの３棟は一部が流失している。規模は、直径4.5m未満を主体とし、最大のものは6.0×7.2mである。平面形は、円形を呈するものが３棟、楕円形、隅丸方形状を呈するものがそれぞれ１棟ずつである。炉は、石囲炉、複式炉のほかに、石囲炉の外側に「？」記号状に礫を巡らせるものなども見られる。柱穴は、明瞭な形で配置が示される例はなく、不規則に検出されたものが多い。

２棟の竪穴状遺構は、炉を持たず柱穴も確認できなかった。規模は、3.2×3.6mの方形状と直径3.0mの円形である。

時期は、縄文時代中期末葉から晩期中葉にかけてと考えられる。

〈奈良時代の竪穴住居跡〉

検出された７棟を規模別にみると、隅丸方形を呈し一辺が3.0m前後のもの３棟、同じく4.0m前後のもの２棟で、残りの２棟は隅丸長方形を呈する。その規模は、2.6×3.1mと2.9×3.5mである。カマドはすべて北西壁に位置し、構造においては、煙道が長く刳り貫き式であることなど、７棟に共通する部分が多い。このうち１棟の住居跡は、最大で1.3mほどの壁高を測るものがあり、何らかの付属施設を持っていた可能性がある。また、畑地造成の際に削平されたと思われる１棟を除き、すべての住居跡の埋土には、十和田ａ降下火山灰と白頭山降下火山灰がセットで確認されている。

〈土　　坑〉

87基の土坑のうち、その大半は縄文時代の貯蔵穴と思われる円形のフラスコ状土坑である。規模は、直径1.2～1.7mほどのものを主体とし、最大規模のものは直径約2.8mである。埋土に遺物を包含する土坑も多数あり、時期的な細分が可能と思われる。

また、先述の２種類の火山灰が埋土に確認された土坑が３基あり、古代の土坑とした。３基とも1.8×2.0mの隅丸方形を呈する。

検出された土坑は、今年度の調査区全体に散在するが、段丘の先端部に集中する傾向が見られる。

〈陥し穴状遺構〉

円形のもの19基、溝状のもの１基が検出された。前者は直径1.3～1.6mの規模で、いずれも１～３個の杭穴を有するが、２個のものが多い。深さは1.0～1.2m程度である。後者は開口部径1.2×4.0mほどの規模で、深さは1.2mである。

〈炉　　跡〉

５基検出されたが、いずれも石囲炉と思われ、焼土を伴う。うち１基は削平を受けており、付近の状況から住居跡に伴う可能性が高いが、他の４基は不明である。

〈出土遺物〉

土器類は総量で大コンテナ10箱ほどである。縄文時代では、早期から晩期にかけてのものが出土しているが、後期初頭から晩期中葉にかけての遺物が主体である。その他に、奈良時代の土師器が主に住居内から出土している。器種は、坏・甕・甑がみられるが、割合として坏が非常に少ない。なお、北海道系の土器と言われる口縁部に数条の段を持つ甕が出土している。

石器は総数で約200点である。石鏃等の剥片石器は少なく、ほとんどが磨石・凹石などの礫石器で占められる。

また、動物遺存体として、奈良時代の住居内のピットから海水産の貝類が出土している。

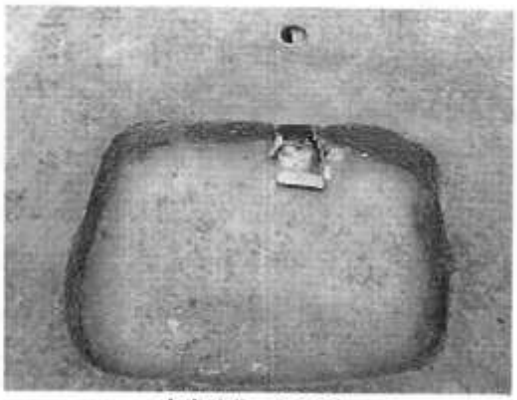
３．まとめ

水吉Ⅵ遺跡は、昨年に引き続いての調査であったが、今年度は縄文時代中・後・晩期の集落跡と８世紀代と思われる奈良時代の集落跡が確認された。その他に、円形の陥し穴状遺構が、規則的に弧を描いて配置されているのが発見され、予想以上の成果を挙げることができた。

昨年は、調査区の西端部で縄文時代中期初頭の集落跡が確認されており、今年度の調査での遺構の検出状況と合わせて考えてみると、縄文時代の各時期における住みわけが予想できる。また、奈良時代においては、北海道系の土器が遺構に伴って出土したことにより、該期の北との交流を考える上で貴重な情報を提供できることと思う。

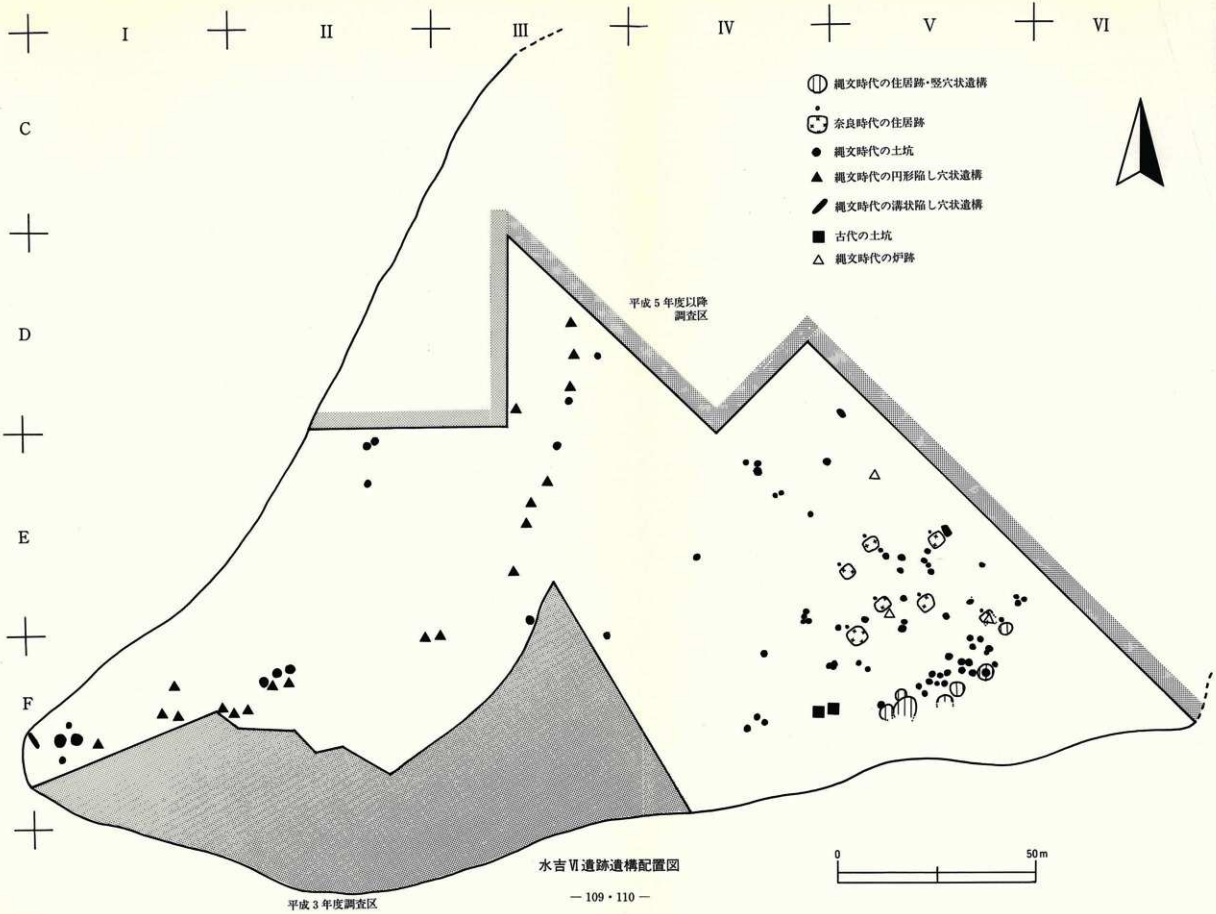
縄文時代の住居跡

フラスコ状土坑群



奈良時代の住居跡

水吉Ⅵ遺跡　検出遺構・出土遺物

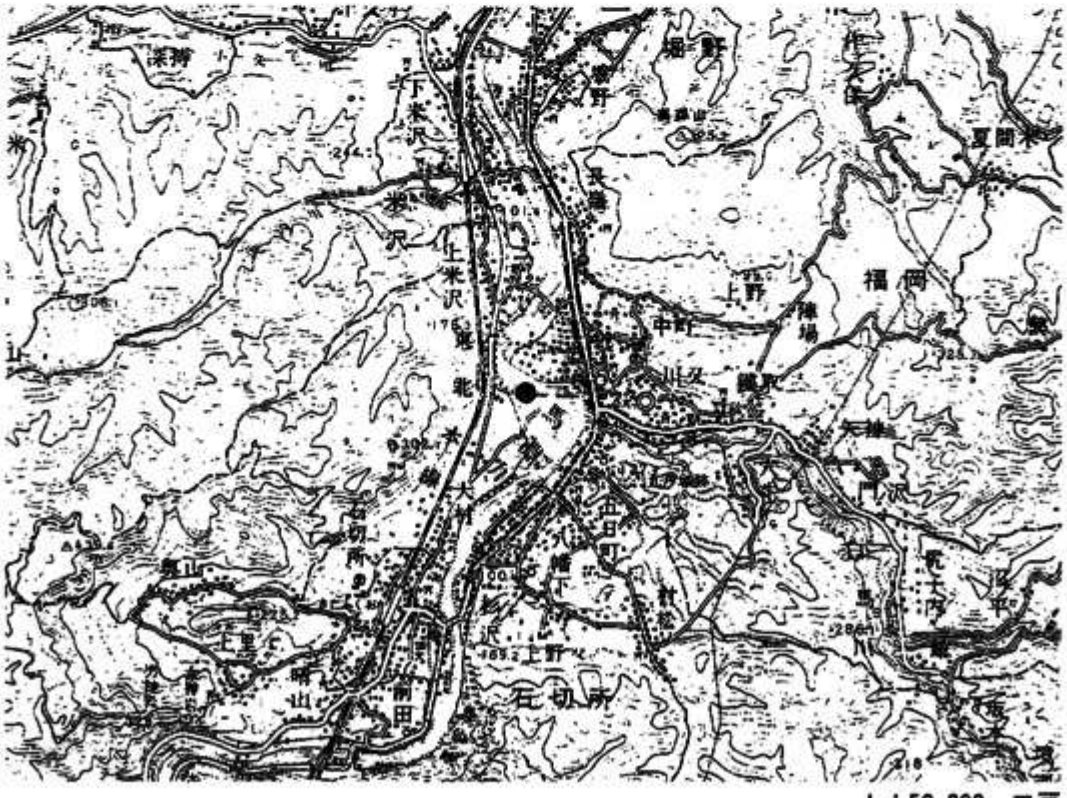

I
II
III
IV
V
VI
C
D
E
F
縄文時代の住居跡・竪穴状遺構
奈良時代の住居跡
縄文時代の土坑
縄文時代の円形陥し穴状遺構
縄文時代の溝状陥し穴状遺構
古代の土坑
縄文時代の炉跡
平成５年度以降
調査区
平成３年度調査区
0
50m

水吉Ⅵ遺跡遺構配置図

III. 岩手県関係

(1) 中曽根遺跡

所在地	二戸市石切所字中曽根13－11・40－2
委託者	岩手県総務部
発掘調査期間	平成4年4月10日～5月31日
調査対象面積	1,300㎡
発掘調査面積	1,300㎡
遺跡番号・略号	ＪＥ09－0314・ＮＳ－92
調査担当者	高橋正之・高橋英樹
協力機関	二戸市教育委員会



遺跡位置図

1．遺跡の位置と立地

中曽根遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線二戸駅の北東約2㎞の位置にあって、二戸市中心部の馬渕川曲流部西岸、白鳥川河口対岸堀野段丘と東方へ舌状に突き出した中曽根段丘にまたがって立地している。西には標高300m程の朝日山を背負い、東に九戸城跡、雄大な折爪岳を眺望できる地形的条件に恵まれた場所である。

調査区の標高は100m程で、現況は果樹園、一部畑地である。なお本遺跡の周辺にはバイパスを挟んで中曽根Ⅱ遺跡や馬渕川対岸の北東方向に堀野遺跡などが隣接している。

2．調査の概要

検出された遺構は、掘立柱建物跡1棟。陥し穴状遺構1基、土坑2基、溝4条である。出土遺物は少なく、若干の磨耗した縄文土器片、石器、フレイク等が出土したに過ぎない。

〈陥し穴状遺構〉

調査区の東縁GⅠ・Ⅱ、HⅠ・Ⅱグリッドに位置している。平面形は不整長楕円形を呈し、規模は径0.5m×3.6m、深さ50㎝～70㎝を測り、埋土より若干の磨耗した縄文土器片が出土している。形状や検出面などから縄文時代のものと推定される。

〈土　　坑〉

検出された2基の土坑はGⅡグリッド・JNグリッドに散在し、平面形はいずれも楕円形(小判状）を呈している。規模はGⅡピット1号が径100㎝×140㎝・深さ30㎝、JⅣピット1号が80㎝×120㎝・深さ34㎝を測る。時期決定の資料に乏しく、GⅡピット1号埋土より剥片2点が出土しただけである。

〈掘立柱建物跡〉

掘立柱建物跡は調査区東側のBⅢ・Ⅳ・VグリッドーDⅢ・Ⅳ・Vグリッドに位置している。身舎の規模は桁行5間（12.6m）×梁行3間（5.64m）で東西両面に庇が付属する南北棟の建物跡である。

柱穴の掘り方はほぼ円形で径30～40㎝で、深さは30～60㎝を測る。桁行の柱穴間寸法は北側から2.44m－2.85m－2.45m－2.43m－2.41mである。伴出遺物は皆無で、時期は不明である。

〈溝〉

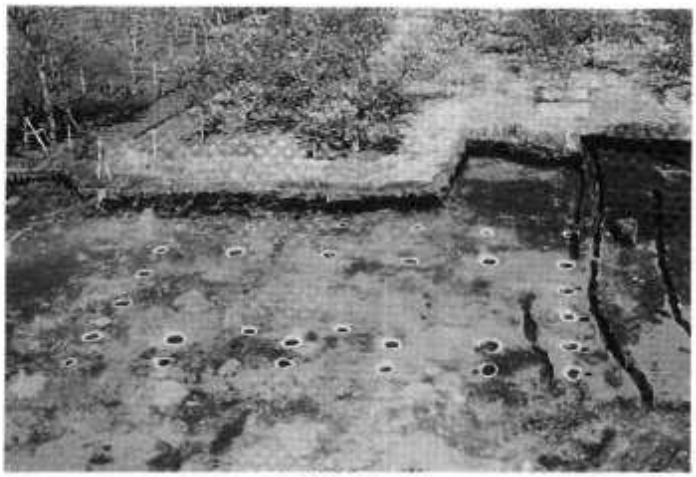
4条の溝はいずれも調査区の中央部を東西に横断する形で検出された。規模は北側から1号溝が全長5.4m・最大幅0.42m・深さ0.38m、2号溝が全長8m・最大幅0.45m、深さ0.43m、3号溝が全長18.6m・最大幅0.35m・深さ0.46m、4号溝が全長12.6m・最大幅0.54m・深さ0.42mをそれぞれ測る。断面形はU字状を呈し、底面には6～8㎝程の小柱穴が数多く認められる。

〈出土遺物〉

本遺跡の遺物は少なく、その殆どが粗掘段階で第１層黒褐色土中からのもので、磨耗した縄文土器片、磨石、凹石、打製石斧の破損品、フレイク等が出土しているに過ぎない。

３．まとめ

今回の調査で陥し穴状遺構や掘立柱建物跡などが検出されたことから、本遺跡が縄文時代に狩り場として利用されていた後も断続的ながら人々の生活の舞台となっていたことが明らかになった。今後、遺構・遺物の詳細な検討分析をとおして遺跡の性格や中曽根Ⅱ遺跡を含めた周辺諸遺跡との関連性などの課題に取り組みたい。



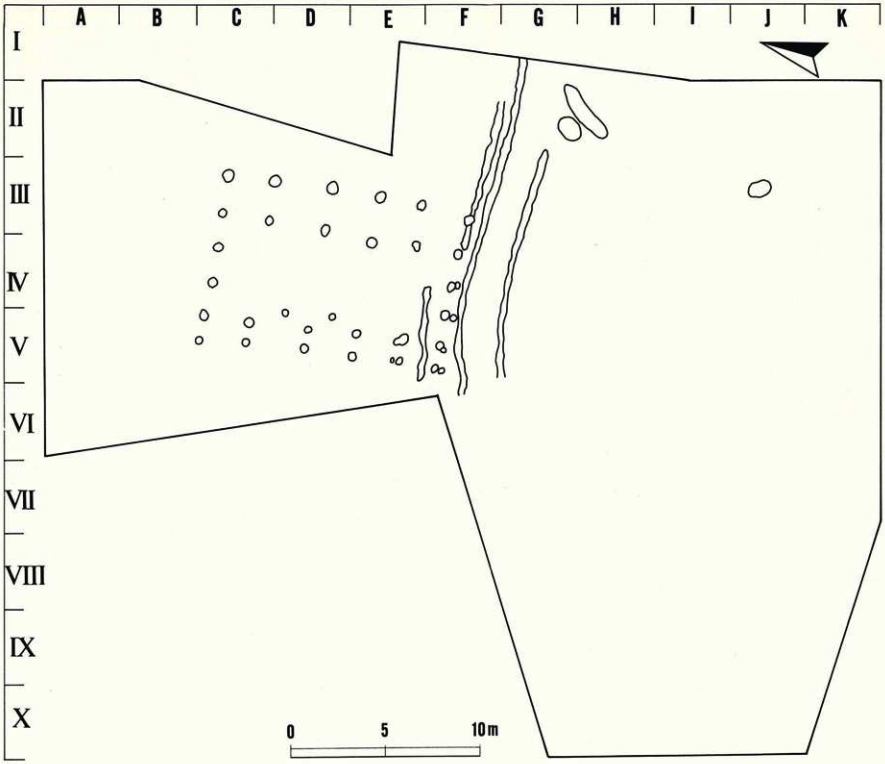
掘立柱建物跡

溝跡

陥し穴状遺構

土坑

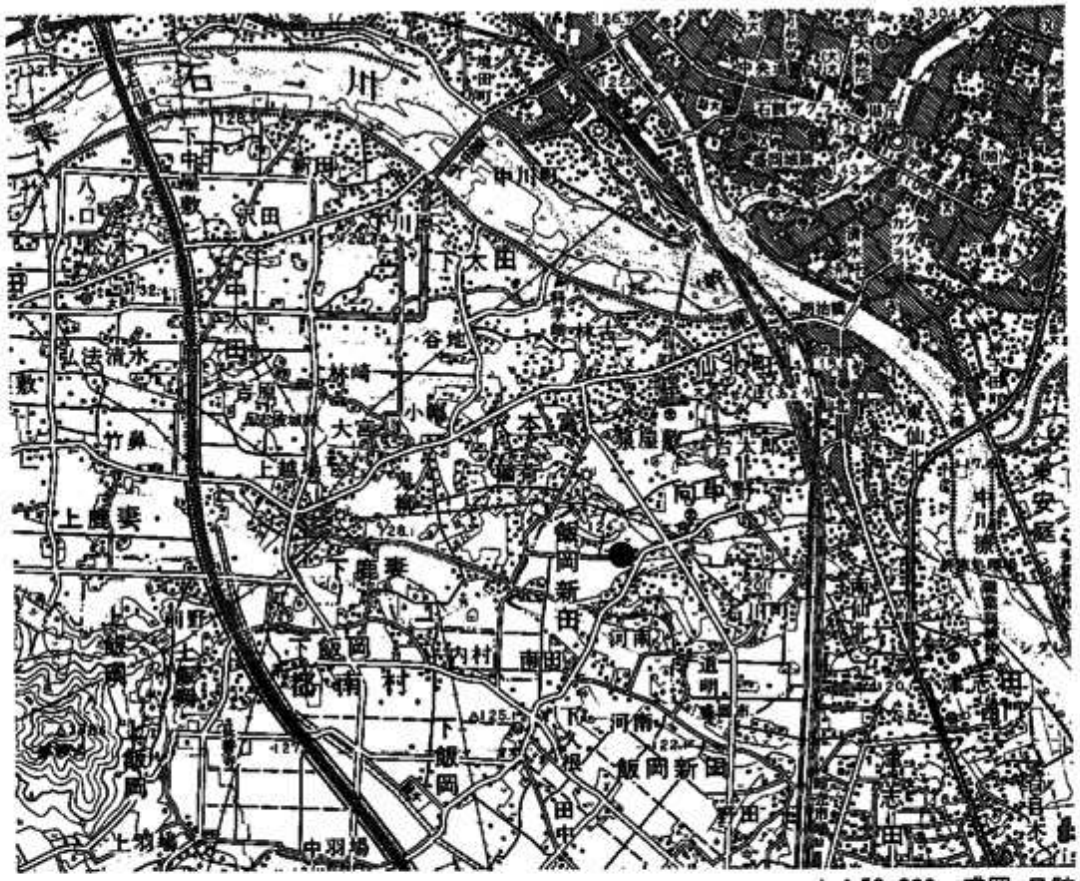
中曽根遺跡　検出遺構



中曽根遺跡遺構配置図

(2) 矢盛（やもり）遺跡

所　在　地　盛岡市飯岡新田第3地割74－2・74－3
委　託　者　岩手県商工労働部
発掘調査期間　平成4年4月9日～平成4年5月8日
調査対象面積　1,300㎡
発掘調査面積　1,300㎡
遺跡番号・略号　LE26－0127・IYM－01
調査担当者　伊東　格・小山内　透
協力機関　盛岡市教育委員会



1：50,000　盛岡・日詰

遺跡位置図

1．遺跡の立地

遺跡は東日本旅客鉄道東北本線仙北町駅の南西約1.6kmに位置し、雫石川右岸の沖積平野上に立地する。第1次調査の範囲は農業用水路に囲まれた微高地で、標高は約124mである。調査区の現況は宅地・畑地である。

2．調査の概要

平安時代の竪穴住居跡3棟、時期不明の土坑1基、時期不明の溝跡1条が検出された。

〈平安時代の竪穴住居跡〉

3棟とも調査区の中央付近で検出された。いずれも残存状況は不良である。残存状況のきわめて悪い1棟は平面形、規模とも不明であるが、残りの2棟は平面形が方形を基調とし、規模は4m前後である。

〈土　　坑〉

平安時代の竪穴住居跡の1棟と重複し、これよりも新しい。平面形は楕円形を呈し、規模は径230×215cm、深さは中心部で15.8cmである。出土遺物はない。

〈溝　　跡〉

調査区を南西から北東に横切る。全長は約27m、深さは最大22cmである。壁は底面からほぼ直立して立ち上がる。出土遺物はない。

〈出土遺物〉

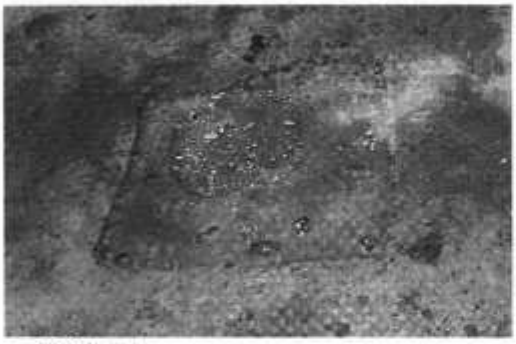
竪穴住居跡の床面から平安時代の土師器坏形土器、須恵器坏形土器、土師器甕形土器、鉄器などが出土している。遺構外の出土はほとんどない。遺物の残存状況はきわめて悪く、復元または反転実測できるものはごく少数である。総量は小コンテナで1箱である。

復元されたもののうち、1号住居跡出土の須恵器坏形土器は9世紀から10世紀初めに、2号住居跡出土の土師器坏形土器は11世紀初めに属するものと推定される。鉄器は3点出土している。器種は手斧、鉄鏃、釘である。1号住居跡出土の鉄鏃は、篦被が長く関部は棘状に突起する柳葉形の長頸鏃で、茎は欠損している。手斧、釘は2号住居跡の出土である。

3．まとめ

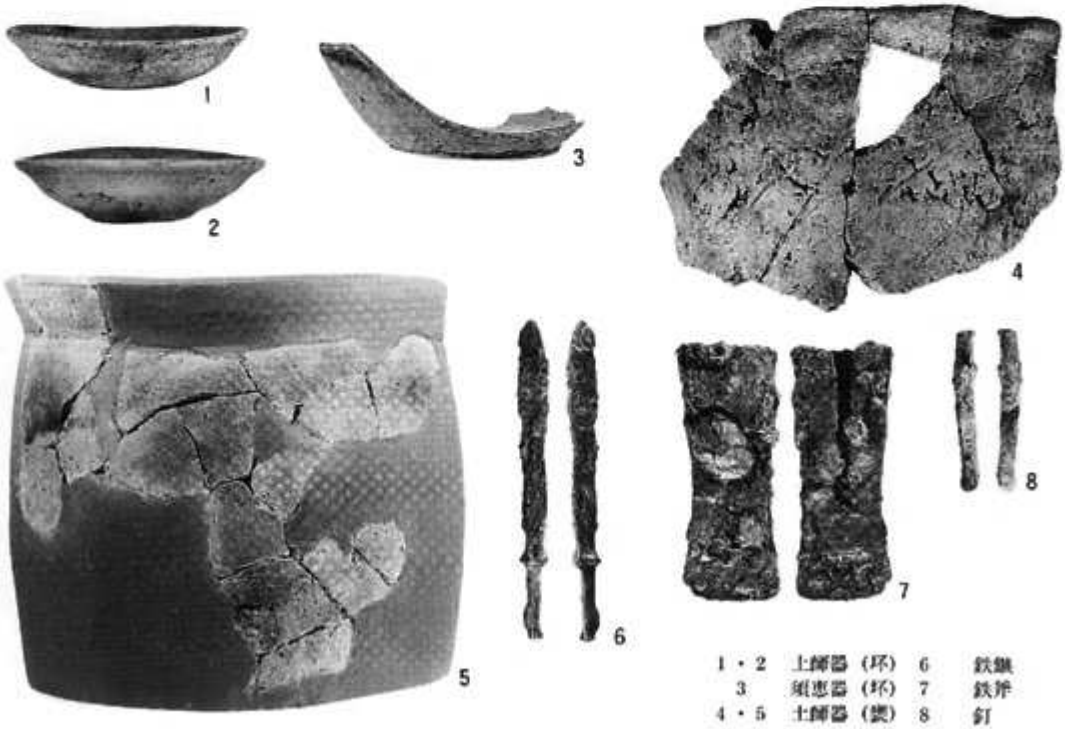
今回の調査により平安時代の竪穴住居跡が確認されたことから平安時代には集落として利用されていたことが判明した。しかし、竪穴住居跡から出土した遺物に年代の差があるため、同時期の存在とは考えられず、集落の性格については今後の検討課題としたい。

遺跡全景



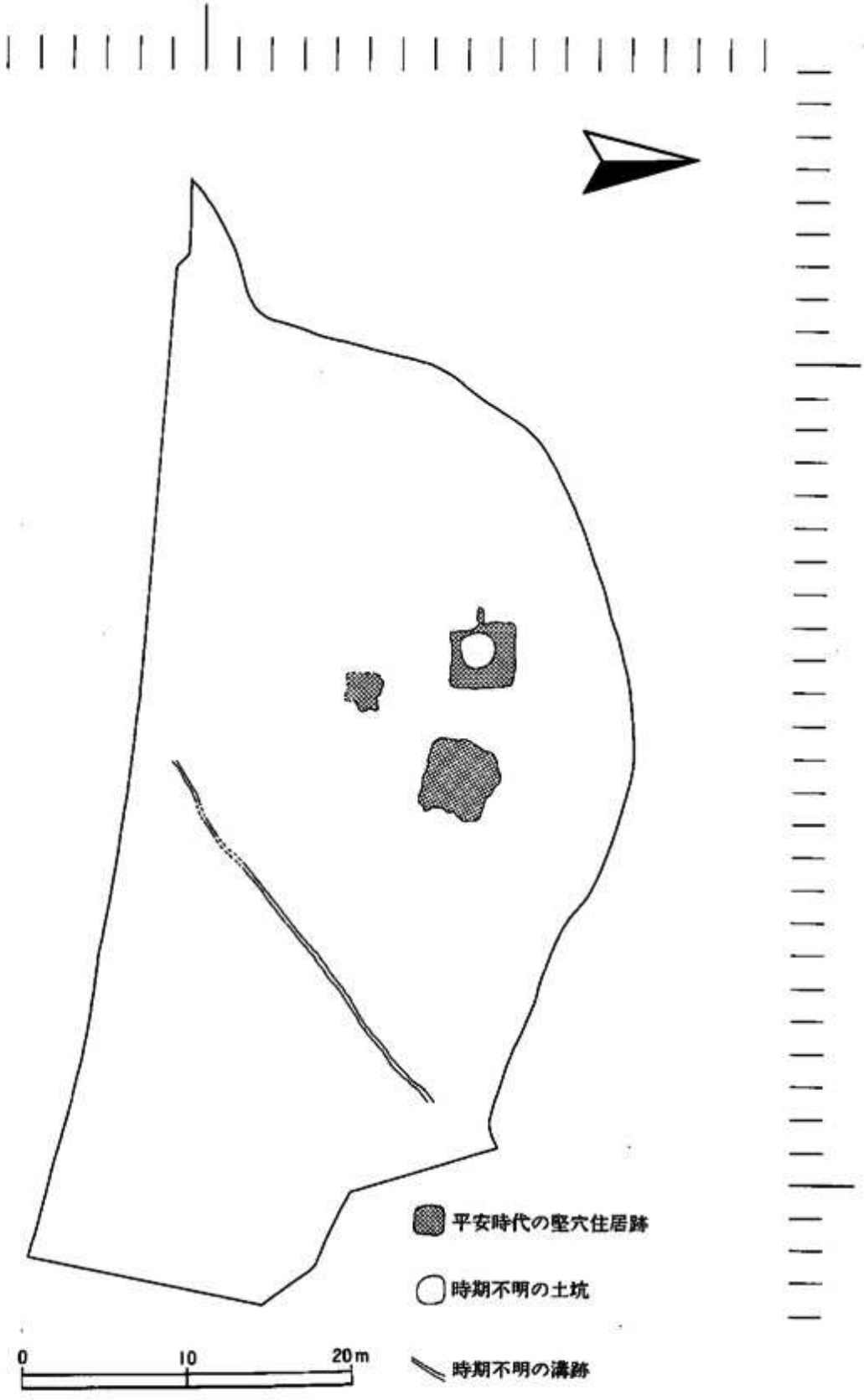
竪穴住居跡

竪穴住居跡



1・2　土師器（坏）　6　鉄鏃
3　須恵器（坏）　7　鉄斧
4・5　土師器（甕）　8　釘

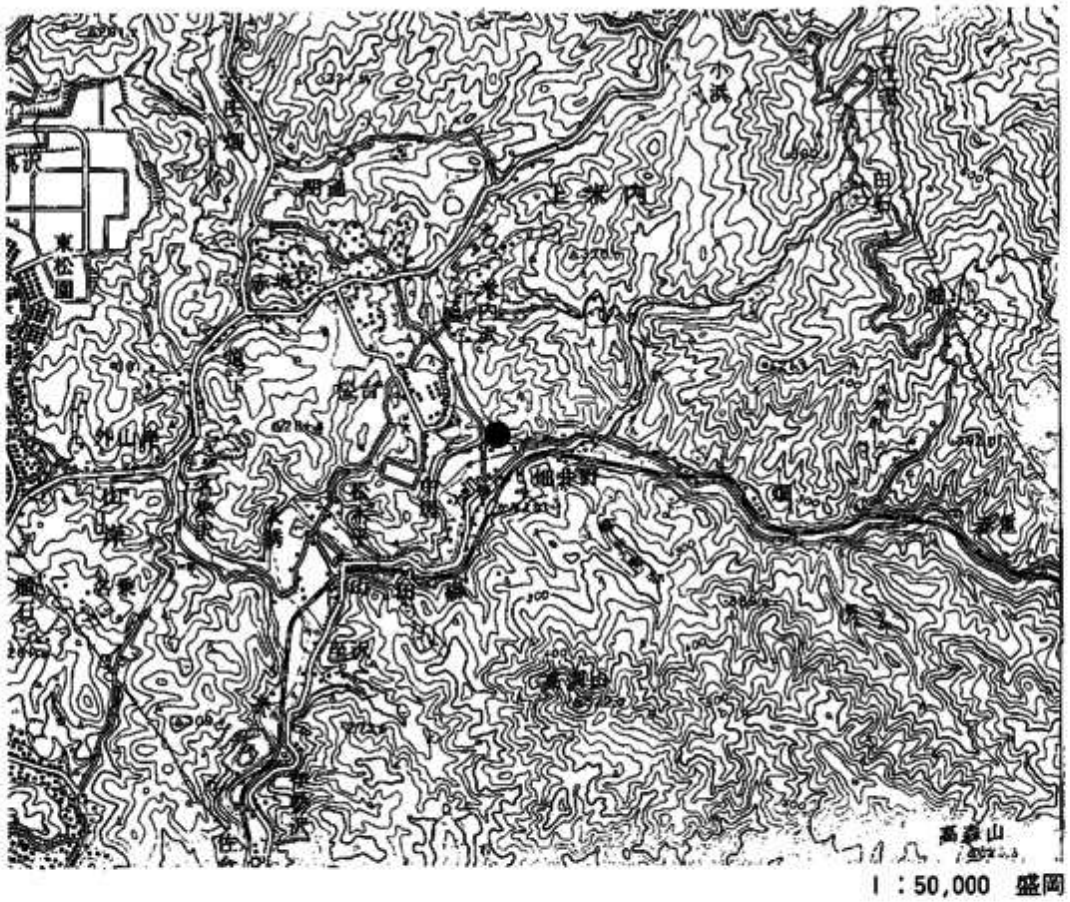
矢盛遺跡　検出遺構・出土遺物



矢盛遺跡遺構配置図

(3) 向館遺跡

所在地	盛岡市上米内字米内沢129－1他
委託者	岩手県土木部　盛岡土木事務所
発掘調査期間	平成4年4月14日～7月31日
調査対象面積	4,352㎡
発掘調査面積	4,352㎡
遺跡番号・略号	KE98－1003・NMT－01
調査担当者	笹平克子・佐々木清文
協力機関	盛岡市教育委員会



1：50,000　盛岡

遺跡位置図

1．遺跡の位置と立地

向館遺跡は盛岡市の中心部から北東約6.5km、ＪＲ山田線上米内駅の北西0.5kmに位置する。米内川によって形成された砂礫段丘と北側から流れ込む米内沢によって形成された谷底平野に立地している。調査区は北上山地から続く丘陵の端にあたり、米内川に向かって緩やかな斜面になっている。米内川は河岸段丘の発達がはっきり見られない。遺跡と川との比高差は２～５ｍで、遺跡は一段高くなっている。調査区の中央から北側にかかる部分は、東側から伸びる丘陵の端が米内沢に侵蝕されているため、米内沢に向かって大きな段差となっている。標高は198～201ｍで、現況は畑地・水田となっている。

2．調査の概要

発見された遺構は、竪穴住居跡19棟、竪穴状遺構２棟、炉跡２カ所、土坑類55基、焼土遺構９カ所、土器埋設遺構１基、配石遺構１組、溝１条、柱穴状ピット多数である。

〈竪穴住居跡〉

いずれも米内川に向かって傾斜する緩い斜面上で検出された。耕作や開田のため削平されたため、住居の壁がはっきり残っているものが少ない。床面からの遺物が少なく、規模や形状がはっきりしない住居跡が多い。そのため貼床や炉跡、柱穴を手がかりに住居跡を検出した。炉は３種類あり、いずれも川原石を使用していた。石囲炉(円形、方形)、土器埋設炉、複式炉である。石組炉（円形）には縄文後期のものと土器埋設炉の下から検出された縄文中期のものがあり、時期差が見られる。また、床面に倒立した形で埋甕が見られた住居が２棟あった。その埋甕は、焼成後に底部が故意に穿孔されていた。住居跡の時期は、縄文中期から後期のものと思われる。

〈土　　坑〉

斜面の下部の平坦部から55基検出された。円形と楕円形およびフラスコ状のものがあり、円形のものが多い。規模は、直径１ｍ前後、深さ20cm～１ｍ30cm。川側の斜面上で検出されたものは、開田の際削平をうけたと思われ、残りが悪い。埋土に、焼土を厚く含むものも見られる。底面に川原石を置いたものもある。出土遺物には、土製の腕輪の破片や切断土器などがある。焼土とともに多くの縄文土器の破片が出土した土坑もあった。平坦部では埋土や底面から土器や石器が出土しているが斜面下部の土坑では削平を受けたため遺物はほとんどみられなかった。また、土坑と住居跡の分布は異なって見られた。

〈埋設土器〉

川側の斜面下位で検出された。深鉢形土器が正立した形でⅦ層（地山）の黄褐色砂質土に埋められていた。掘り方は明瞭に見られなかった。土器の時期は縄文中期と思われる。

〈配石遺構〉

調査区北側のＦ５区で検出された。石組みは沢状の地形に直行するようにほぼ直線状に礫が並べられた列石である。同じ面から焼土遺構も検出されている。性格については不明である。

〈炉〉

川側の南斜面で２基検出された。いずれも北側半分が調査区外にかかるため規模は不明であるが、石組み炉と思われる。斜面にかかるため、床面と思われる平坦な部分はほとんど見られず、柱穴も検出できなかったが、削平を受けた住居跡の可能性が高い。

〈焼　　土〉

平坦部から南斜面にかけて９カ所検出された。検出面はII層の黒褐色土上面と下面であった。周りからは多くの遺物がまとまって見られることから住居跡の炉であった可能性が考えられる。

〈溝〉

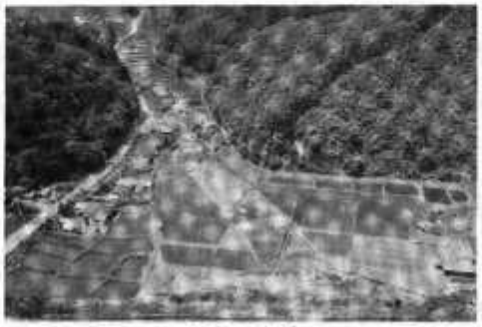
川側南斜面の下位で検出された。西側は攪乱を受けており、東側は調査区外にのびる。長さは340cm、幅は60～80cm、深さは５～40cmである。出土遺物はなく時期は不明である。

３．出土遺物

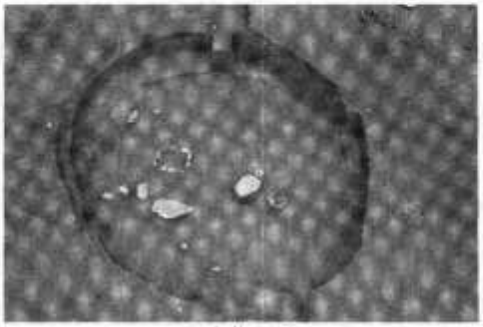
Ｇ６区II層の黒色土からの出土が大半を占める。平坦地の、木根跡からまとまって縄文後期の土器が出土している。また、開田の際の盛土や川跡からも土器や石器が出土している。土器の総量は、コンテナ（大）50箱で、縄文中期から後期にかけての土器が大半を占める。早期や前期、晩期、続縄文の時期も見られる。土製品の中には、腕輪や鐸形土製品などがある。
石器は土器に比べて少なく、遺構外からの出土が多い。石鏃や石匙、磨石、石皿、石斧、石棒などが出土している。

４．まとめ

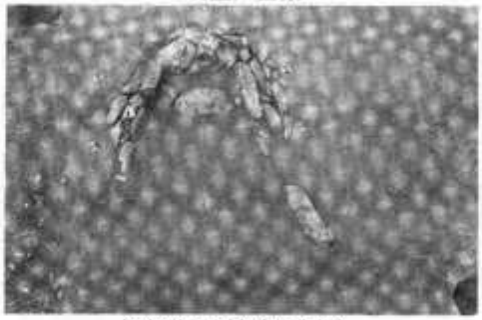
今回の調査の結果、向館遺跡は縄文中期から後期にわたっての遺構や遺物が多く発見され、縄文中期から後期にかけて営まれた集落遺跡であることがわかった。遺跡の範囲はさらに東側まで広がることが予想される。多くの遺物が付近から出土していることから、多くの遺構が発見される可能性がある。集落の実体解明や対岸の上米内遺跡をはじめとする周辺の遺跡との関連は今後の調査の結果が待たれる。



調査区全景

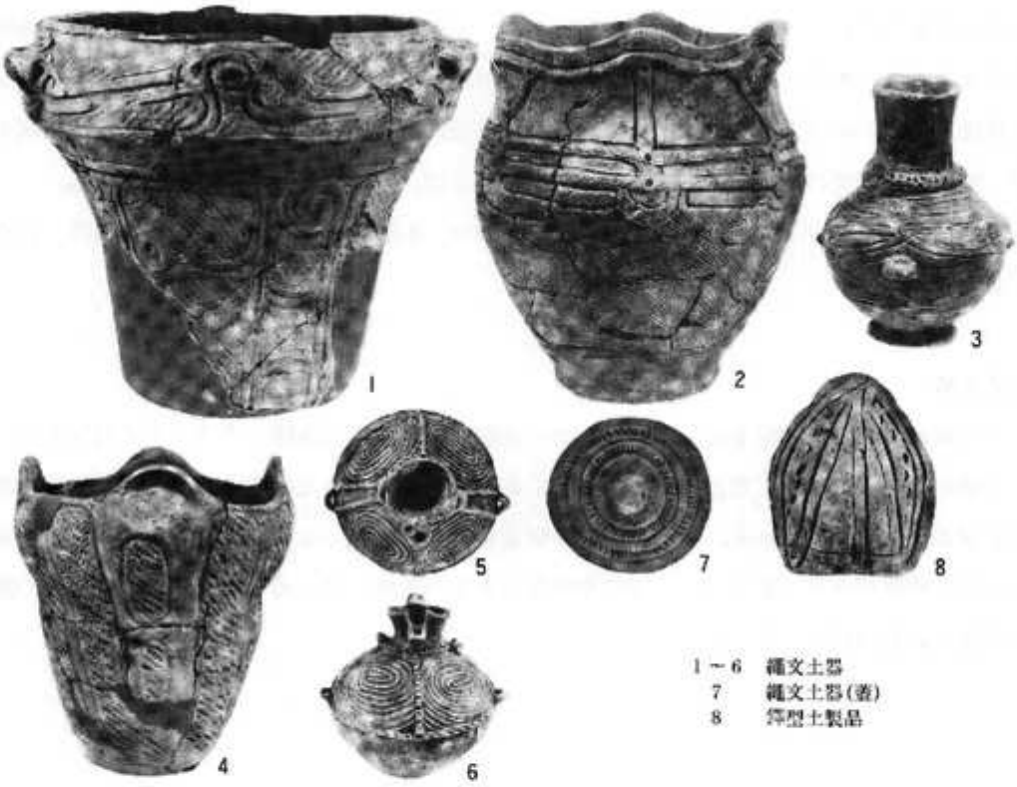


竪穴住居跡



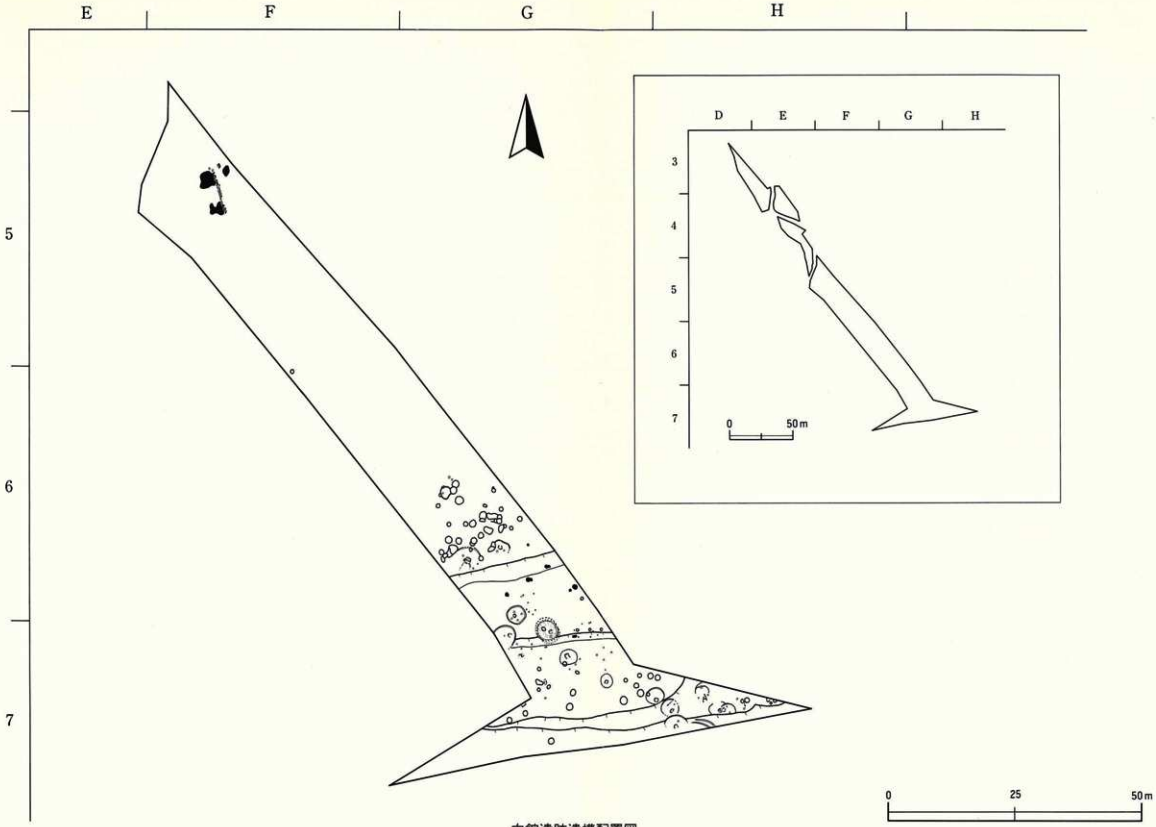
竪穴住居跡（複式炉）

竪穴住居跡内埋設土器



1～6　縄文土器
7　縄文土器(蓋)
8　鐸型土製品

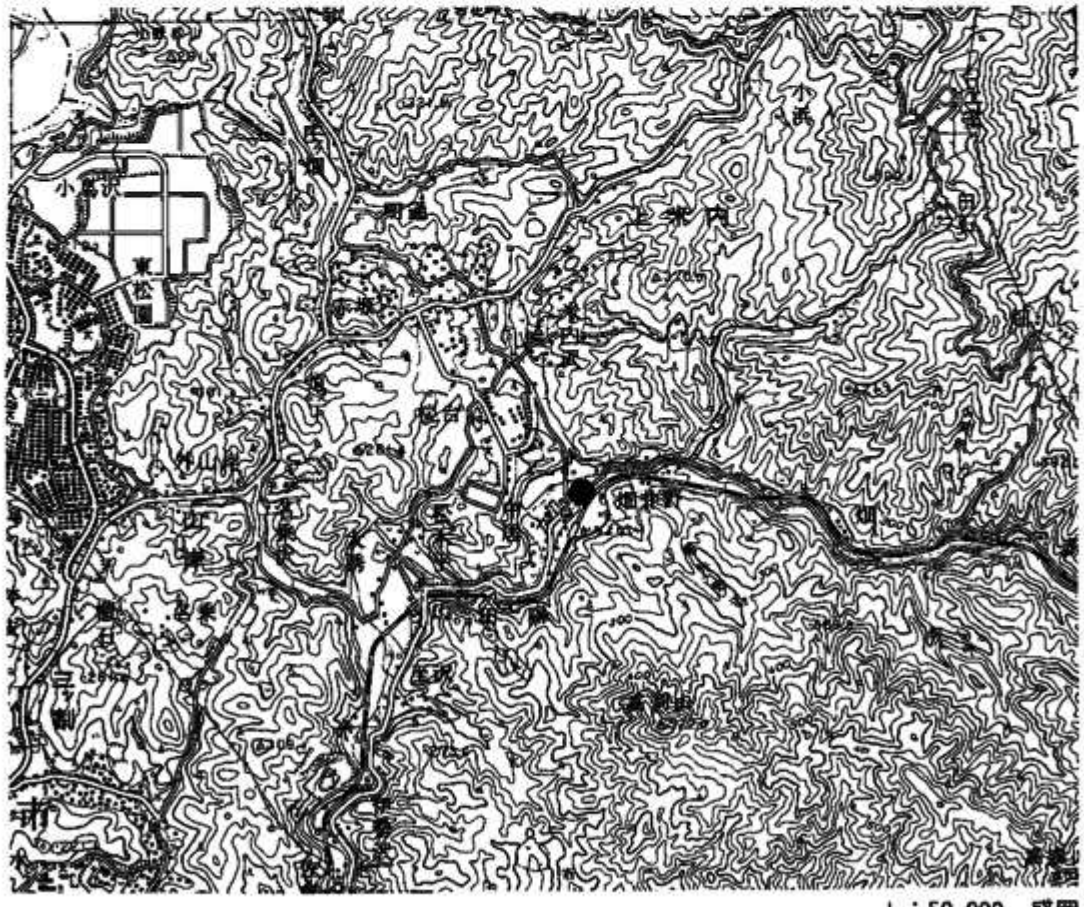
向館遺跡　検出遺構・出土遺物



向館遺跡遺構配置図

(4) 上米内遺跡

所在地	盛岡市上米内字中居36－1他
委託者	岩手県土木部　盛岡土木事務所
発掘調査期間	平成4年5月1日～10月31日
調査対象面積	2,264㎡
発掘調査面積	2,264㎡
遺跡番号・略号	KE98－1051・NKY－03
調査担当者	佐々木清文・笹平克子
協力機関	盛岡市教育委員会



1：50,000　盛岡

遺跡位置図

1．遺跡の立地

遺跡は米内川によって形成された砂礫段丘上に立地する。標高は198m前後で、遺跡と川との比高差は約４ｍである。遺跡南東側の丘陵沿いにかけて小規模な段差が認められる。

2．調査の概要

調査地は路線分（Ａ区・Ｃ区）と宅地の移転先（Ｂ区）に分けられるが、今年度の調査地内からは、竪穴住居跡18棟、掘立柱建物跡２棟、土坑302基、炉跡・焼土24カ所、溝跡１条、その他（土器埋設遺構４、配石遺構３組）が検出されている。

〈竪穴住居跡〉

Ａ区から12棟とＢ区から６棟が検出された。Ａ区では南東のＪＲ山田線寄りの部分で検出された。遺構の一部が水路や道路の下に続く２棟は壁が残るが、残りは他遺構や耕作時に削られ、壁が残っていない。また住居跡どうしの重複も少なくない。

時期は、出土遺物を中心に判断したが、複式炉のものは中期末、そのほかの炉では中期中葉から後・晩期まである。

Ｂ区では調査区の西寄りに６棟検出され、そのうち４棟が重複している。また今年度の調査地外に続くものが３棟ある。ほぼ楕円形を呈し、石囲炉と柱穴を伴う、柱穴配置が明確でないものもある。この中の１棟の床から、倒立して埋設された深鉢が２個体検出されている。土器底部は穿孔されている。副葬品らしいものは特にない。時期は、いずれも縄文時代中期中葉である。

〈掘立柱建物跡〉

Ａ区とＢ区から各１棟検出された。Ａ区では米内川よりの水田床土直下に検出されたが、柱穴間の間尺が不定である。柱穴の一つから平安時代の土師器片が出ている。Ｂ区の建物は調査区南側に検出され、直角に曲がる２列の柱穴列で、庇を持つ建物のようである。柱穴は礎石を伴い、間尺は約190cmである。柱穴の埋土からは縄文土器片が出土している。

〈土　　坑〉

Ａ区から287基とＢ区から15基が検出されている。Ａ区は旧河道の左岸から道路近くまで広い範囲から検出され、重複するものも多い。平面形は円形ないしは楕円形で、楕円形のものの中には小判形のものもある。円形のものは、開口部の直径１ｍ前後・深さは30cm～１ｍで、底の広い袋状になるものが多い。楕円形のものは直径1.7m・深さ0.4m前後のものが多く、底部に赤色顔料を伴うものもある。

埋土の中には、多量の礫と共に焼土粒や炭化物が多く含まれ、骨片の出土しているものもある。特に、鼻形土製品の出土した土坑は、底部までよく焼け、多量の焼骨が出土している。

遺物は、縄文時代中期中葉から後・晩期のものまであるが、時期による遺構の形態や分布の違いもあるようである。

B区の土坑は、円形のもの4基と楕円形のもの11基である。楕円形の土坑の一つからは、緑色の石製垂飾品と赤色顔料が出土している。また個体復元が可能な土器片の出土も多い。

〈炉跡・焼土〉

A区・B区とも水田床土直下や、さらに下位の土層中から検出された。石囲炉の中には、住居跡に伴う可能性が高いものもあるが、壁や柱穴配置が不明で炉跡としたものもある。焼土の形状や厚さは不定であるが、いずれも周辺から住居の床や柱穴等は検出されていない。

〈溝　　跡〉

C区西側から1条検出された。調査区外に広がるため溝の幅は不明であるが、深さ30～40cmで、蛇行しながら北から南に向かう。埋土からは縄文中期の土器片が出土している。

〈そ の 他〉

その他として土器埋設遺構と配石遺構がある。

土器埋設遺構はA区で3、B区で1検出され、それぞれ他の遺構に伴い、A区では晩期の深鉢形土器を二つに合わせて立てた状態で埋設した、合わせ口甕棺が出土している。配石遺構はA区に3組検出された。1組は直径約2mの環状に、残る2組は幅広の帯状に石が並ぶ。前者は、内側に石囲炉あり、埋土から骨片が出土した。配石の下位は遺物包含層で、その下位から土坑が検出されている。後者は敷石遺構のような形状で、下位から土坑が検出されている。

〈出土遺物〉

A区では、水田直下のB層と旧河道の遺物包含層から縄文晩期の遺物が多数出土し、C層からは中期の遺物が出土した。遺構からも多くの遺物が出土した。遺物の大半は土器片であるが、土偶・土製品や石器・石製品もある。石製品の中には翡翠製の勾玉もある。

B区では、土器片を中心に多くの遺物が出土しているが、時期は縄文時代中期中葉のものがほとんどである。遺物の総量は、土器類約110箱、石器約800点である。

3．まとめ

今回の調査で、上米内遺跡は縄文時代中期から晩期にわたって営まれた集落遺跡であることが再確認された。しかし、A区では中期から晩期、B区では中期中葉だけの遺構が検出され、時期による集落の配置が異なっていることがわかった。また、墓と思われる土坑が多く検出され、中期から晩期まで墓域として使われていたようである。

出土遺物の総量は、土器類約110箱、石器約800点で、完形品の土器が少なくないことや、翡翠製の勾玉や石棒などの石製品も多く含まれていることが特徴である。

上米内遺跡は、縄文文化の中心地の一つとして、継続的に営まれた集落の一つと思われる。遺跡の範囲は、ＪＲ山田線の鉄道を越えた東側にも広がると予測され、周辺にも多くの遺跡があるので、集落の構造や他の集落との関係など、今後の調査に期待したい。

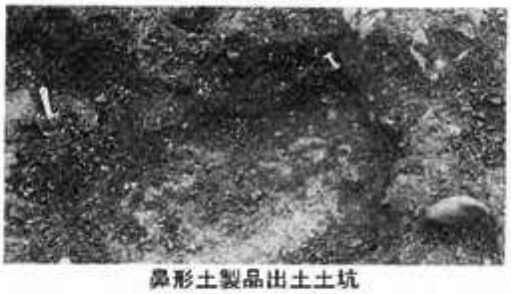
A区遺構検出状況

合口甕棺出土状況

配石遺構検出状況

複式炉検出状況

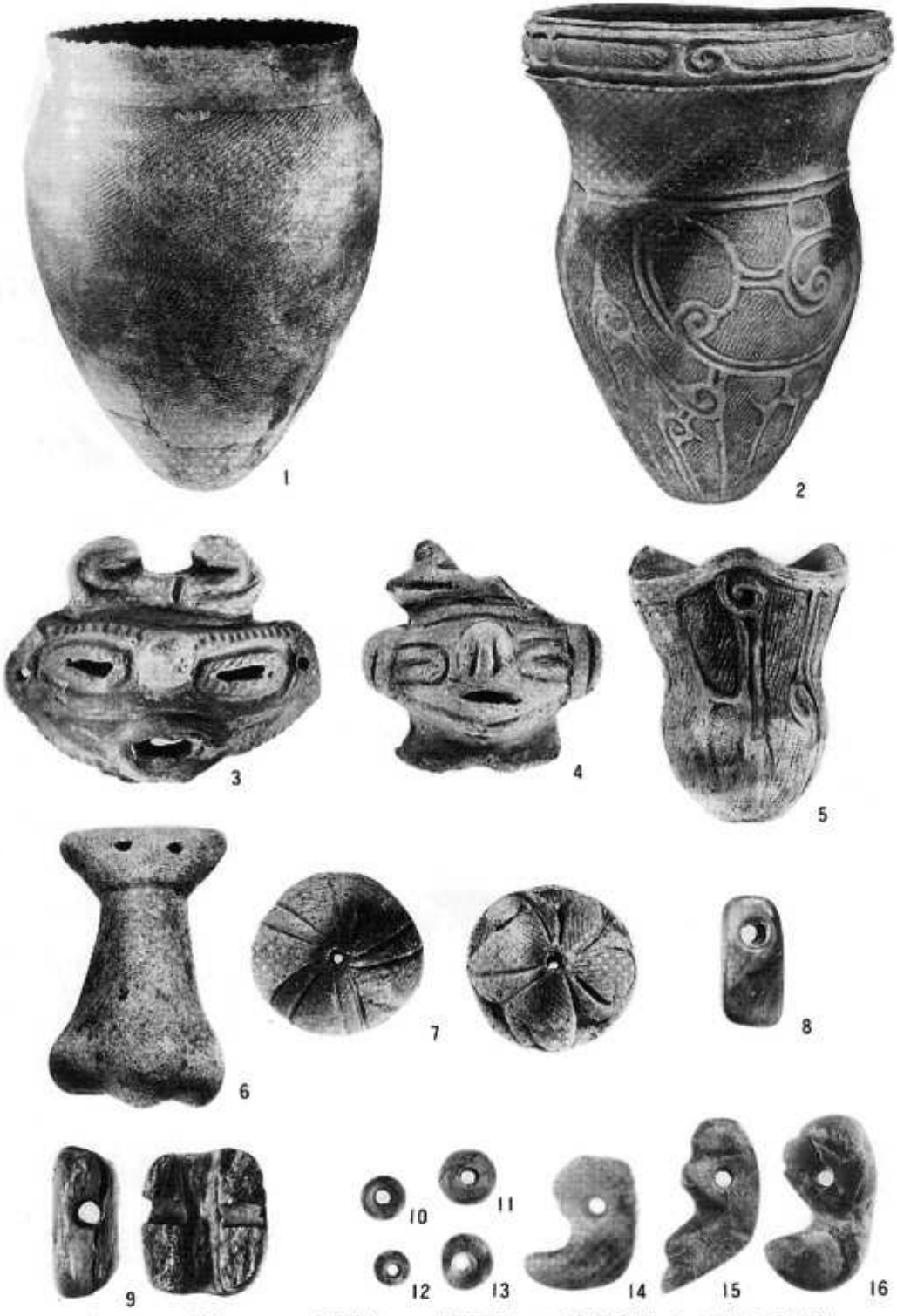
埋設土器出土状況



鼻形土製品出土土坑

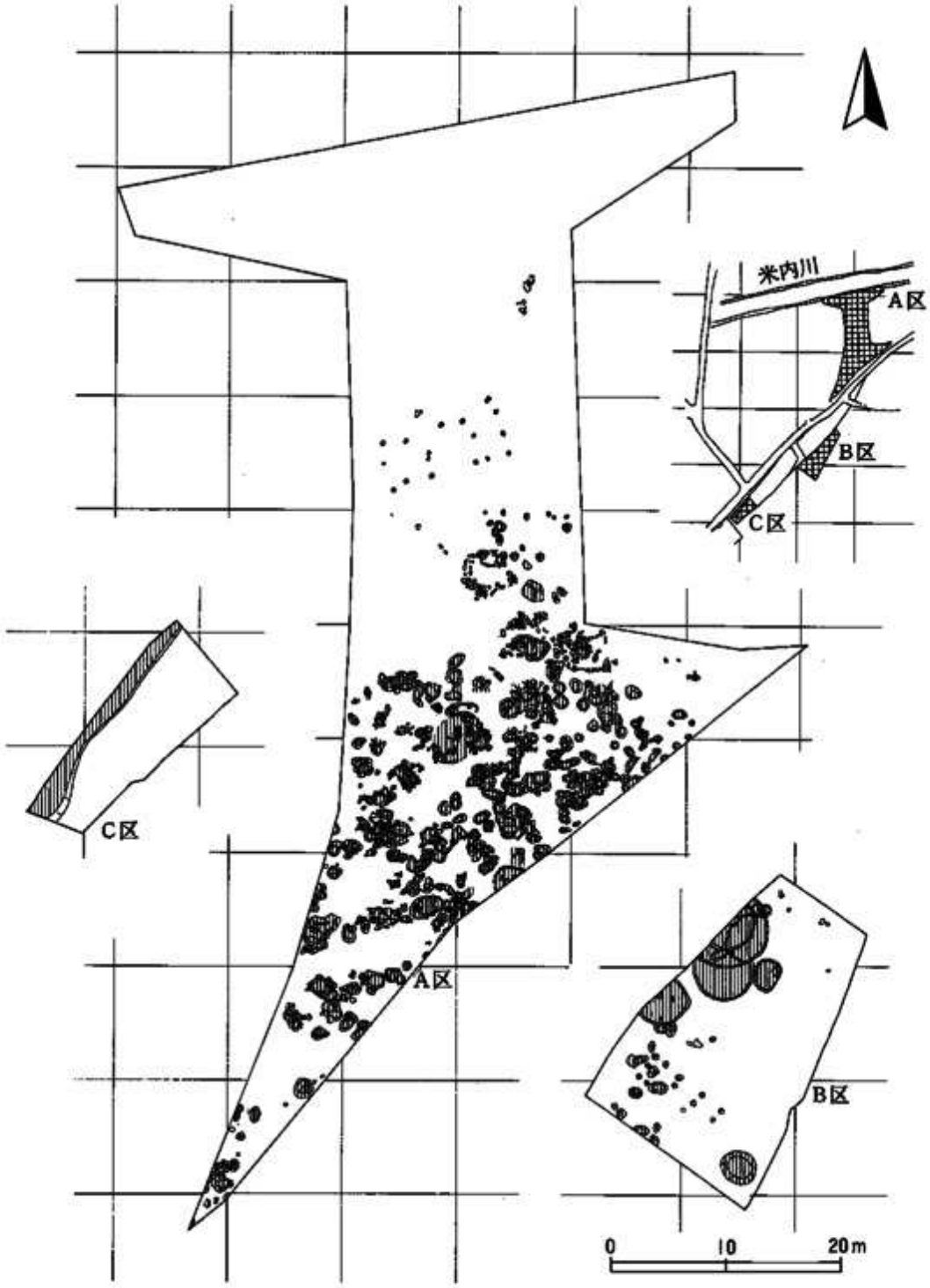
B区遺構検出状況

上米内遺跡　遺構写真（右下２つがＢ区，他はＡ区）



（1・2・5：深鉢，3・4：土偶頭部，6：鼻形土製品，7：球状土製品，8～16：石製垂飾品）
（2・8・9はB区から出土，他はA区出土）

上米内遺跡　出土遺物



上米内遺跡遺構配置図

(5) 西田東（にしだひがし）遺跡

所在地	紫波郡紫波町犬淵字下越田125－1ほか
委託者	岩手県土木部　盛岡土木事務所
発掘調査期間	平成4年8月7日～12月17日
調査対象面積	8,600㎡
発掘調査面積	7,034㎡
遺跡番号・略号	LE87－0126・NDH－92
調査担当者	花坂政博・酒井宗孝
協力機関	紫波町教育委員会

遺跡位置図

1．遺跡の立地

西田東遺跡は東日本旅客鉄道日詰駅の南々東約3kmの滝名川西岸に位置し、滝名川と北上川によって形成された河岸低地に立地している。遺跡の標高は89～91mで、現況は荒蕪地、林である。

本遺跡の約200m西には西田遺跡があり、滝名川を隔てた対岸には下川原Ⅱ遺跡が隣接する。

2．調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、平安時代の竪穴住居跡18棟、溝跡4条、土坑10基、柱穴状土坑50基、掘立柱建物跡1棟、鍛冶炉跡1基、そして縄文時代の陥し穴状遺構146基である。本年度はこのうち竪穴住居跡11棟、溝跡3条、土坑9基、柱穴状土坑41基、鍛冶炉跡1基、陥し穴状遺構24基の調査を終了した。

出土遺物は平安時代の土師器、須恵器等である。

〈陥し穴状遺構〉

全て溝状タイプで、削平が少ない調査区の東側及び南側を中心に、殆どが東西方向、北西～南東方向に並んでいる。杭穴を持つものは少なく、長さは長いもので5m前後、短いもので2m前後である。深さは30～100cmのものと様々であるが、浅いものは上部がかなり削平されている。

〈竪穴住居跡〉

11棟のうち、形状、規模が把握できたのは5棟である。ただ、それらも水田造成時に削平されており、床面の残りも芳しくないものが多い。

形状は正方形を基調としたものが多いが、調査区外にかかっているものは長方形タイプになりそうなものもある。一辺は4m前後のものがほとんどであるが、一辺2m程の小型のものも1棟検出された。カマドが確認された5棟のうち、東壁南寄りのものが4棟、北壁東寄りのものが1棟である。カマドが削平されたもので確認できなかったものでも、焼土が東寄りにあるものが多かった。煙道部は刳り貫き式と掘りこみ式のものがあり、袖部の芯材については確認できなかったが、中には袖部に土師器の坏を入れていた例が確認されたものがあった。柱穴の配置が確認されているものは4棟で南壁際で確認されているものが多い。

また、調査区東北部寄りで焼失住居跡が1棟検出されたが、比較的削平された部分が少なく、炭化材等の残りもよい。

〈溝　　跡〉

調査区の北西部で2条、北部の比較的削平の少ない部分から1条の計3条が検出された。北西部の溝は一段高くなっている部分にあり、東西方向と南北方向にのびている。南北方向にのびているものは住居跡の東側の部分と切り合う形になっている。幅は最大で90cm、最小で26cm、

深さは最大で40cm、最小で6cm程である。

〈土　　坑〉

9基のうち、炭窯が1基、フラスコ状のものが1基、その他に分類される。炭窯とみられるものは、径150×120cm程の楕円形で、その中に60×37cmの範囲で焼成部が広がる。一方、フラスコ状のものは、径150×180cm、深さが80cm程で住居跡と切り合う状態で検出されている。また、その上には110×80cmの範囲で不整な亜角礫が広がる。全体的に、他の遺構と切り合ったり、他の遺構に付随する形で検出されたものが多い。大きさは殆どが直径1m以上で、深さは最大のもので80cm、最小のもので13cmである。

〈柱穴状土坑〉

分布の状態としては、本年度調査区南端と、南東部、中央部やや北寄りの3カ所に分かれている。掘立柱建物になる規則性はみられないが、南東部にあるものは鍛冶炉を囲むように分布していることから、これに関連するものであった可能性もある。平面形は円形ないし楕円形を呈し、径は最大のもので30×36cm程、最小のもので18×20cm程である。

〈鍛冶炉跡〉

本年度調査区南東部にある。その周囲に鍛造剝片が径10×10cmの範囲で広がる。遺構の範囲は赤褐色を呈しており、中心部を囲むように青色系の還元部分が20×15cmの範囲に広がる。

〈出土遺物〉

平安時代の土師器、須恵器が大部分を占めており、住居跡からの出土が圧倒的に多い。土師器は坏、甕が殆どで、鍋の出土もみられた。坏の底部は回転糸切りで無調整のものと再調整のものがある。須恵器は大型の甕の破片が多い。この他、土錘、土鈴、鉄製品、灰釉陶器片、縄文時代の土器片、石剣、石鏃等も出土している。

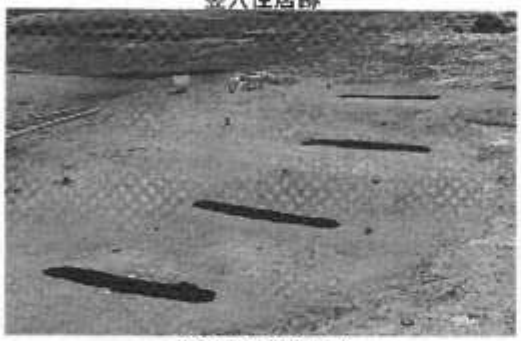
3．まとめ

本遺跡は縄文時代と平安時代の複合遺跡である。遺跡の性格としては縄文時代は狩場跡、平安時代は集落跡といえる。縄文時代の遺構としては陥し穴状遺構が検出されたが、これについては本年度調査区域よりも来年度調査予定の南側地区が中心になるものと予想される。平安時代については南西部、中央部やや西よりの地区を中心に住居跡が検出されたが、殆どが削平され残りが悪い中で、焼失住居跡は比較的残りもよく、好資料を得ることが出来た。

本遺跡は来年度も継続調査が予定されており、それによって更に遺跡の実態が明らかになることが期待される。

竪穴住居跡

鍛冶炉跡



陥し穴状遺構群

陥し穴状遺構

石剣

鉄製品

土錘

石鏃

灰釉陶器片

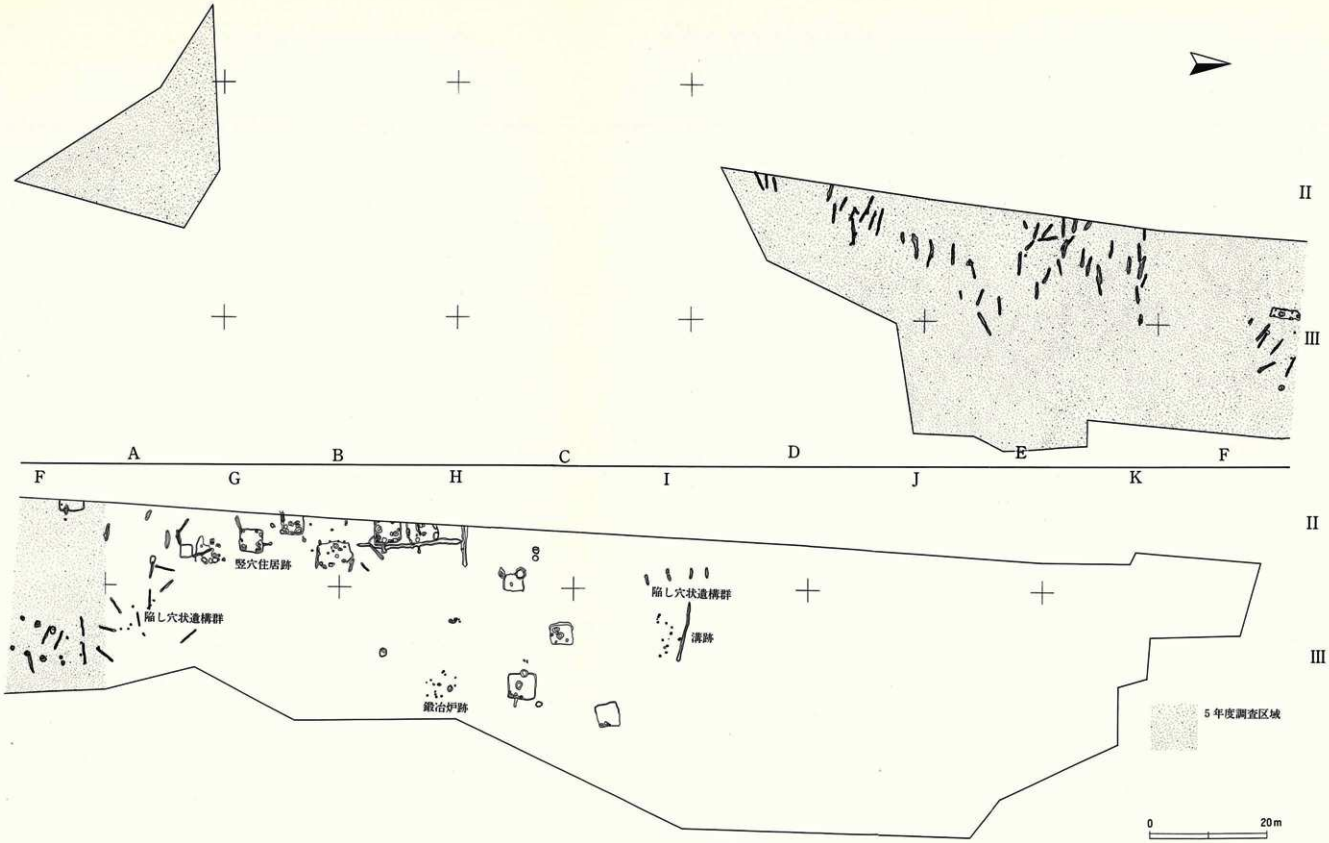
須恵器

土師器（坏）

土師器（坏）

土師器（甕）

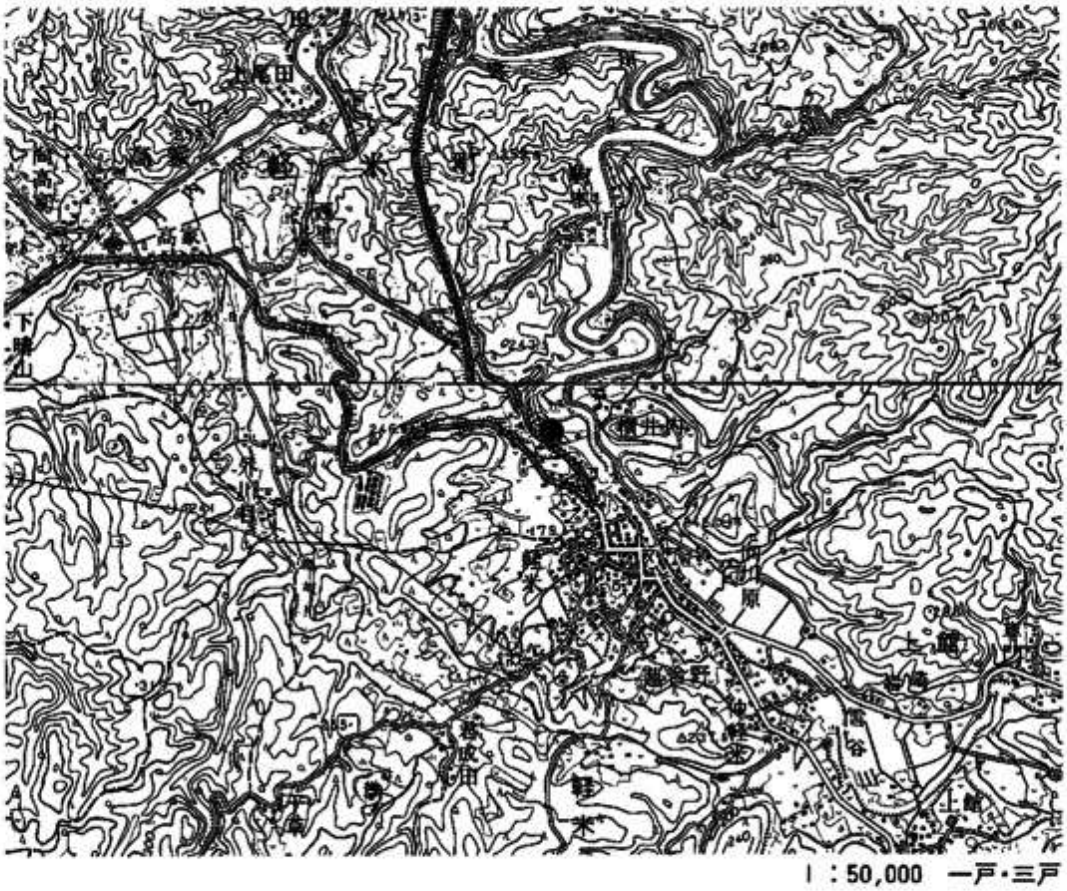
西田東遺跡　検出遺構・出土遺物


II
III
A
B
C
D
E
F
F
G
H
I
J
K
II
III
竪穴住居跡
陥し穴状遺構群
陥し穴状遺構群
溝跡
鍛冶炉跡
5年度調査区域
0
20m

西田東遺跡遺構配置図

(6) 大日尚（おおひなた）II遺跡

所在地	九戸郡軽米町大字軽米第14地割字土弓２－１
委託者	岩手県土木部　二戸土木事務所
発掘調査期間	平成４年４月10日～12月11日
調査対象面積	4,000㎡
発掘調査面積	2,385㎡
遺跡番号・略号	ＩＦ73－2112・ＯＨII－92
調査担当者	工藤利幸・濱田　宏・高木　晃・千葉　悟・新倉信一郎・田中元明
協力機関	軽米町教育委員会



1：50,000　一戸・三戸

遺跡位置図

1．遺跡の立地

大日向Ⅱ遺跡は、八戸自動車道軽米インターチェンジの北東から南東の一般国道340 号に沿った一帯にあり、軽米町役場からはほぼ北へ0.5～0.8kmに位置している。

遺跡は東側を雪谷川に、南西側を瀬月内川の支流である郷坂川とに挟まれた丘陵から南東へ張り出した標高163～186mの南向きの斜面に広がっている。遺跡と雪谷川との間は急峻な崖となっており、その比高は20～35mである。遺跡の現況は果樹園・畑地・山林などである。

2．調査の概要

本年度の調査区域は、平成元年度～同３年度に当センターが実施した調査区域とは一般国道340号を挟んで北東～東側に隣接した緩斜面で、その標高は167～173mである。検出した遺構は、縄文時代早期から同後期までの住居跡114棟・竪穴遺構21棟・炉跡および焼土42基・土器埋設遺構27基・墓壙や陥し穴を含む大小の土坑263基・集石23基、平安時代の住居跡５棟、そして柱穴と考えられる小穴約670である。他に近世末から現代にかけての道路跡・土取跡・盗掘跡や耕作に関係したものと考えられる撹乱部多数を確認している。

〈竪穴住居跡〉

縄文時代の竪穴住居跡は、早期の押型文土器群を伴うもの５棟、前期後葉から中期初頭の円筒式土器を伴うもの、中期末から後期の大木式土器や十腰内式土器を伴うものなどであるが晩期の土器を伴うものは不明である。また早期以外の住居跡については、個々の所属時期の分析検討が進んでいないことから時期別棟数は不明である。

押型文土器群を伴う住居跡は、平面形が隅丸方形を基調としたものと楕円形のものとが見られ、規模は方形のものは平面形が3.1×2.7mから4.6×3.5mの間にあり深さは0.55～0.65mである。楕円形のものは2.2×1.6m、深さ0.6mほどである。何れの住居跡でも柱穴や炉跡は確認できなかったが、方形のものでは床の壁近くで壁に沿うように小穴列が並んでいる。伴出した遺物は、重層山形文・菱形文・Ｘ字状文等の押型文土器・多段施文の斜行縄文土器・数種の剥片石器や礫石器である。

前期後葉から中期初頭の住居跡は、長方形のものが大部分を占めるが楕円形のものも見られる。長方形の平面規模は1.3×2.0m～1.9×2.8mの小型のものの他に、特筆すべきものとして３～４棟の大型住居跡が重複したものも見られ、各々は２～３回の増改築が行われている。規模は14.5×7.2m～21.0×9.0m、深さ0.45～0.90mの範囲にある。柱穴配置は大型のものでは壁に並行しているが小型のものでは不明のものが多い。炉跡は地床炉か不明である。伴出土器は、円筒下層ｃ・ｄ式が大部分であるが同上層式土器も見られる。

中期末から後期の住居跡は、円形～楕円形で規模は1.8～8.2mと幅があるが3.0m前後のもの

が多い。炉の形態は大部分が石組炉か石囲炉で、中期末～後期初頭の土器を伴うものは複式炉である。柱穴は、３～８本が三角形や六角形などを構成する配置となっている。

平安時代の竪穴住居跡は、一部不明なものもあるが4.3×3.5mから6.0×5.5mの長方形を呈し、カマドの位置は何れも南東壁に設けられている。柱穴は不明のものがほとんどで、貯蔵穴と考えられる小型の土坑をもつものも見られる。出土遺物は土師器のカメの破片が大部分で、小量の坏破片も見られるが、須恵器は認められない。

〈竪穴遺構〉

竪穴住居跡・貯蔵穴あるいは墓壙などの何れとも判断できかねる遺構を一括する。平面形が円形～楕円形で径は1.3～1.6m・深さ0.3～0.5mで底面が踏み締められているものや、平面規模が幅0.6～0.9m・長さ1.8～2.4m、深さ0.3～0.5mで底面の一端に踏み締めあるいは貼付土がみられるものなどである。出土遺物からの時期判断は困難であるが確認層位や他遺構との重複関係から縄文時代前期から中期初頭と考えられる。

〈土　　坑〉

土坑の形状・種類としては、直円筒形で底面に小穴をもつ陥し穴と考えられるもの、フラスコ形を呈し貯蔵穴と考えられるもの、平面形が小判形～長円形を呈する墓壙と考えられるものなどが見られる。フラスコ形土坑は何れも縄文時代前期後葉から中期初頭と考えられるが、住居跡数に比べて少なく、墓壙と考えられるものは昨年度の調査例のように人骨は確認できなかった。他に大型の柱穴と考えられるものも見られ掘立柱式建物跡として１棟を分離しているが、規模・配列が不規則で柱痕跡を確認できないものがほとんどである。

〈出土遺物〉

出土遺物の大部分は、縄文時代早期から晩期にかけての土器・土製品・石器・石製品で、少量の弥生時代の土器・土製品、古墳時代の後北式土器、平安時代の土師器が出土している。縄文時代の遺物は、前期後葉から中期初頭・中期末～後期中葉の土器を中心に少量の早期押型文土器群・貝ガラ文土器群・前期前葉・晩期の土器も出土している。土製品としては、土偶・土版・耳栓・石錘・石匙・石篦・石錐・磨製石斧・石皿・台石・磨石・凹石・石棒・石刀・円盤状石製品などが出土している。その他、赤色顔料・獣骨片・炭化した堅果が出土している。

３．まとめ

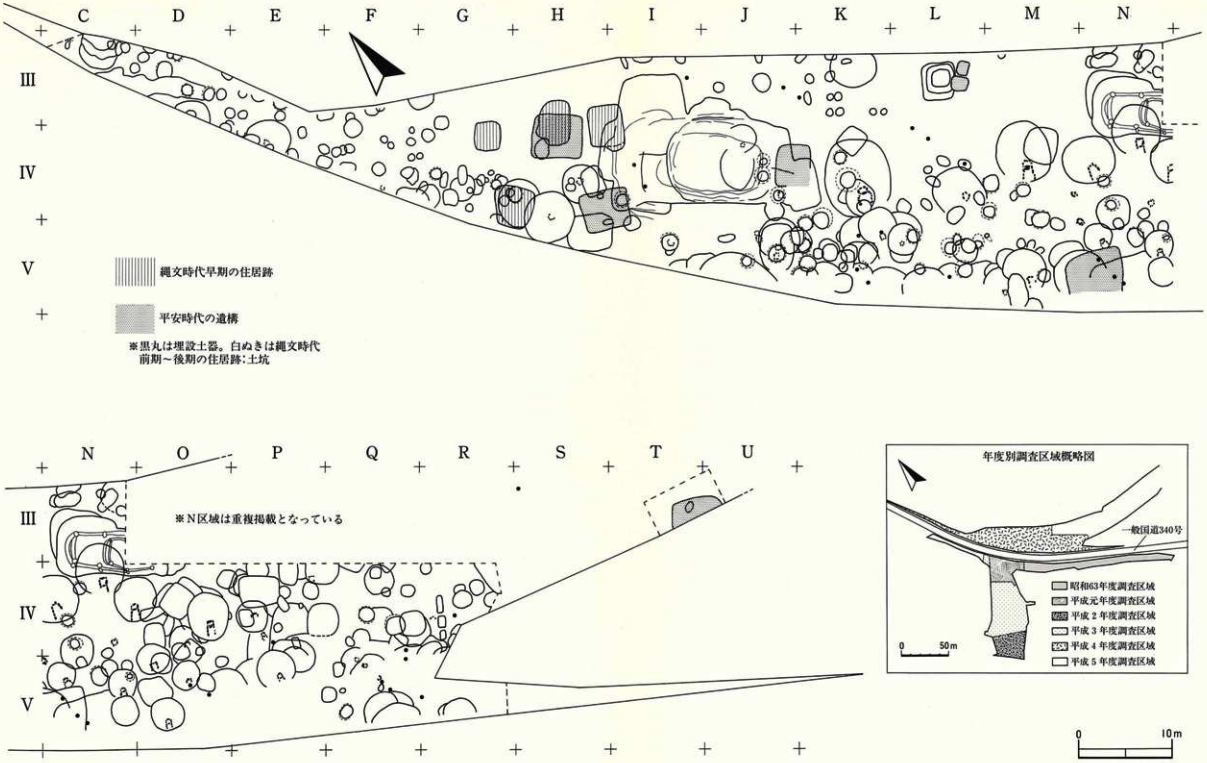
本年度の成果と昨年度までの成果とをあわせると断続的ながら縄文時代早期～晩期までの各集落は、中心区域を変えながら変遷していることが理解できる。他の遺構でも同様のことが理解できることから、来年以降の調査成果はもとより周辺遺跡との関連も考慮する必要があろう。

大型住居址群と周辺の遺構

前期住居址群の重複状態

1～6は、縄文時代前期末～中期初頭の住居跡や土坑から出土した円筒式土器。
7～13は、後期の住居跡から出土した各種土器。
14～16は、晩期の土器。
17は、初期弥生時代の土器。
※縮尺率は不同である。

大日向Ⅱ遺跡　検出遺構・出土遺物



大日向Ⅱ遺跡遺構配置図

(7) 上鷹生遺跡

所在地	大船渡市日頃市町字上代27－1他
委託者	岩手県土木部　鷹生ダム建設事務所
発掘調査期間	平成4年4月10日～9月4日
発掘対象面積	1,300㎡
発掘調査面積	700㎡
遺跡番号・略号	ＮＦ18－2222・ＫＴ－92
調査担当者	酒井宗孝・花坂政博
協力機関	大船渡市・陸前高田市教育委員会

1：50,000　盛

遺跡位置図

1．遺跡の位置と立地

上鷹生遺跡は、岩手開発鉄道日頃市駅の北東約2.5kmに位置し、鷹生川右岸に発達した小規模な扇状地に立地する。遺跡の載る扇状地は、南流する鷹生川によって解析され、周辺地域内では比較的広い平坦地である。

調査区は東側の扇側部にあたり、現地形面は南向きの緩斜面を呈するが崖錐性堆積土が厚く、山寄りの部分での旧地形は約25°の急斜面となっている。標高は156～152m、現河床からの比高は11～７ｍで、現況は畑地と山林である。

2．調査の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡及び住居跡状遺構17棟、墓壙54基、土坑類42基、炉跡・焼土遺構18カ所、土器埋設遺構33基等である。本年度は、このうち竪穴住居跡類16棟、墓壙48基、土坑類26基、土器埋設遺構17基、炉跡・焼土遺構13カ所を精査した。また、遺構が集中している部分には30～160cmの厚さで遺物包含層が形成されていた。

〈竪穴住居跡・住居跡状遺構〉

住居跡14棟は、斜面がいく分緩やかになる部分から検出された。全て縄文時代の遺構で、検出面や出土遺物等から後期８棟、晩期５棟に分けられる。斜面部に立地するため全体を把握できるものは少ないが、いずれも平面形は円形を基調とし、規模は最小のもので径3.5m、最大で径５ｍ前後と推定される。炉の形態には石囲炉と地床炉があり、晩期の住居跡は全て石囲炉を持ち、後期の住居跡は１棟を除いて地床炉である。これらの住居跡は調査区の西側に集中し、多くの重複が見られる。

住居跡状遺構３棟も住居跡が集中する区域から検出された。時期を明確に判断できる資料は少ないが、縄文時代後期の遺構の可能性が高い。

〈墓壙〉

今年度調査した48基の墓壙は斜面部分に帯状に分布する。平面形は概ね楕円形(隅丸長方形)を基調とするが片端が方形、片端が円形を呈するものが１基ある。規模は長さ２～1.2m、幅1.5～0.6m、深さ50～10cmである。

この内、壁際に30～10cmの礫による石組を持つものが８例、上部に集石を伴うものが３例ある。また、内部に赤色顔料の分布が認められたものが８例ある。遺骨が残存するものは１例あったが、粉状となっており部位の認定はできなかった。この他、プランは確認できなかったが、赤色顔料のみの分布が５カ所で検出されており、墓壙の実数はより多いものになると考えられる。これらの墓壙について時期を特定する資料は乏しいが、検出された土層等から推定して縄文時代後期末から晩期の遺構と考えられる。

〈土坑類〉

形態にはフラスコ状、皿状、筒状、柱穴状小土坑がある。フラスコ状のものは1基のみで、出土遺物から縄文時代後期に位置づけられる。皿状・筒状を呈するものの大半は分布状況や検出面等から、縄文時代の墓壙の可能性がある。また、1基からは陶磁器片と鉄滓が出土しており、中世の遺構と考えられる。

柱穴状の小土坑は、18基検出された。3基を除いて斜面の下方に位置し、前述の皿状土坑周辺に分布する。規模は径17～26cm、深さ16～62cmである。柱痕跡が認められたものが3例、柱根部分が空洞となっているものが2例見られた。これらは規則的な配置を示すものではないが、規模等から掘立柱建物を構成していたと考えられ、時期は土坑と同様に中世の可能性が高い。

〈土器埋設遺構〉

斜面部を中心に検出されており、ほぼ墓壙群と分布域を同じくする。大型の深鉢土器を用い平坦部では正立、斜面部では斜位に埋設されるものが多い。数例を除いて黒色土層中に埋設されており、掘り方を把握できるものは少なかった。

遺物を伴うものは1基のみで、内部から小型の鉢型土器が出土している。また、内部から赤色顔料が検出されたものが3例ある。時期的には、縄文時代晩期初頭から中葉の遺構である。

今回の調査で、内部に墓壙と同様赤色顔料を伴うものが検出されたことから、これらの土器の性格は埋葬の一形態と考えられる。

〈出土遺物〉

遺物包含層を中心にコンテナ85箱分の遺物が出土した。遺物には土器、土製品、石器、石製品がある。土器は約1245kgが出土した。縄文土器が主体を占め、弥生土器と中世陶器が僅かに出土している。時期的には、縄文時代晩期前葉～中葉のものが卓越しており、全体の約7割を占める。器種には深鉢、浅鉢、壺、皿、注口土器、香炉など多くの種類がある。

土製品も多く円盤状土製品、土偶、垂飾り、耳飾り、耳栓などがある。石器・石製品では石鏃がもっとも多く200点以上出土している他、石錐、掻器・削器類、石棒、石刀なども多い。

また、歯根部に穿孔された青鮫の歯が6点出土した。

3．まとめ

今回の調査で、上鷹生遺跡は縄文時代～中世の複合遺跡であることが判明した。主体となるものは縄文時代後期中葉～晩期後葉の集落で、特に墓域及び埋葬形態を考えるうえで多くの好資料を得ることができた。また、遺物包含層からは縄文時代前期初頭から中世に至るまでの豊富な遺物が得られたことや、層中に安家火山灰の堆積が確認できたことは当地域における考古学研究に大いに役立つと考えられる。

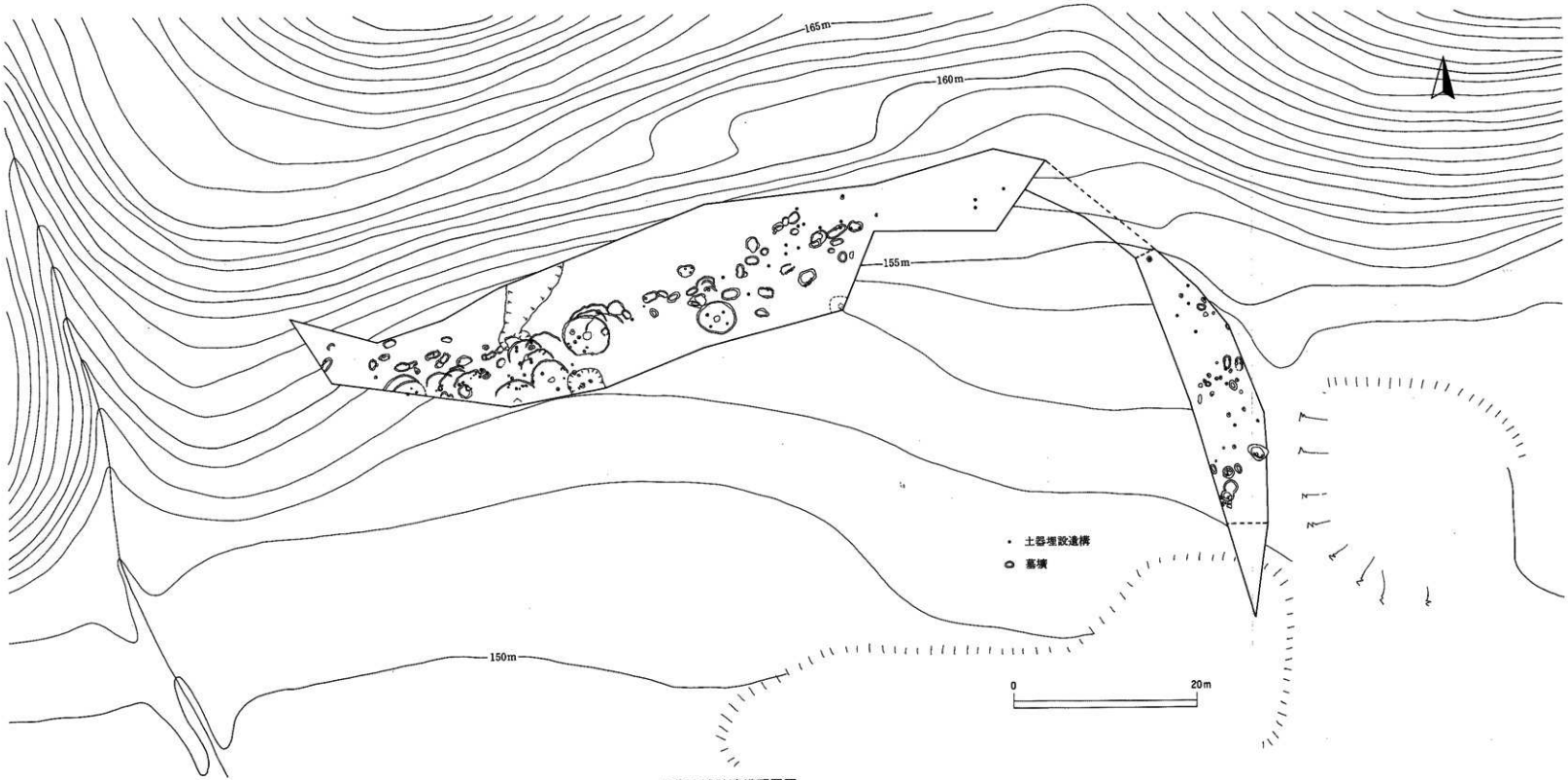
竪穴住居跡

竪穴住居跡

墓壙

土器埋設遺構

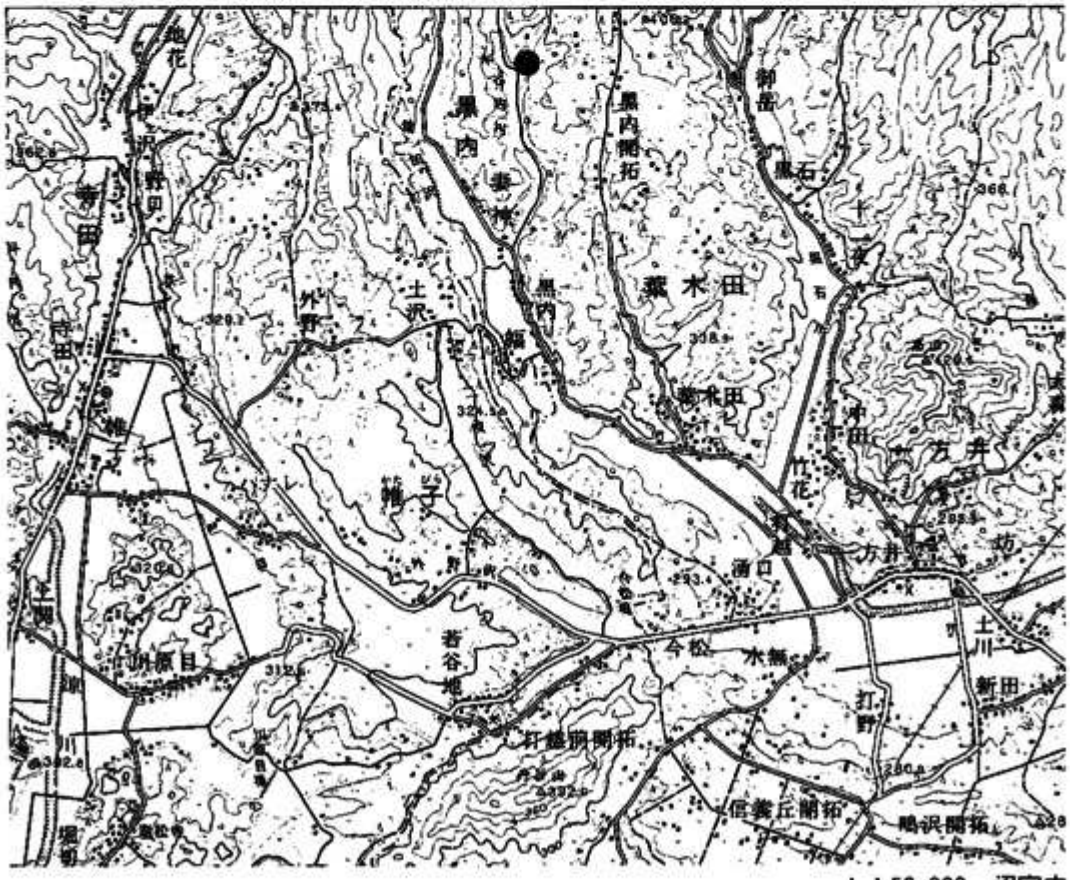
上鷹生遺跡　検出遺構・出土遺物



上鷹生遺跡遺構配置図

(8) 倍田（ばいた）IV 遺跡

所在地	岩手郡岩手町大字黒内第2地割木谷内9—52ほか
委託者	岩手県盛岡地方振興局　岩手北部土地改良事業所
発掘調査期間	平成4年4月14日～11月20日
調査対象面積	5,800㎡
発掘調査面積	5,800㎡
遺跡番号・略号	KE06—0215・BTIV—92
調査担当者	神　敏明・斎藤　實・藤村敏男・佐藤修一・工藤剛司
協力期間	岩手町教育委員会



遺跡位置図

1．遺跡の立地

倍田Ⅳ遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線沼宮内駅の西北西約８㎞、岩手町一方井の中心部からは北西に約４㎞の位置にあり、七時雨山から西岳に連らなる山陵南側の山麓丘陵に立地している。遺跡の標高は340～360m程で、現況は畑地・牧草地・山林である。

2．調査の概要

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡37棟、土坑20基、墓壙20基、焼土遺構５基、配石遺構11基、平安時代の竪穴住居跡11棟である。

〈縄文時代の竪穴住居跡〉

縄文時代の住居跡は主として調査区西側で集中して検出された。住居跡は重複が多く、斜面部分では下方が流失しているものもみられる。

平面形は円形及び楕円形で、規模は径が５ｍ前後のものが多く、最大で９ｍに達するものもある。柱穴は不明なものが多い。炉は地床炉・石囲炉・土器埋設炉・土器埋設石囲炉・複式炉など様々なタイプがみられる。

出土した遺物から、ほとんどが縄文時代中期中葉から末葉にかけての遺構と考えられる。

〈土　　坑〉

調査区東側から円形や陥し穴状のものが、西側からは断面形がフラスコ状を呈するものが主として検出されている。前者は断面形がビーカー状で、規模は開口部径が150㎝前後で、深さは70～110㎝である。後者は平面形が円形で、規模は開口部径が150㎝前後、深さも150㎝程である。西側の平坦地からは平面形が円形で、断面形が浅鉢状を呈する土坑が１基検出されているが、埋土中に石が楕円形を描くように配置されており、墓壙の可能性もある。

〈墓　　壙〉

墓壙は西側の斜面と平坦地の境の部分からまとまって検出されている。平面形は小判型で、長軸が東西方向を向き、南北にほぼ並んでいる。規模は長径が90～160㎝、短径が60～100㎝、深さは30～60㎝を測る。遺物はほとんど出土していない。

〈配石遺構〉

配石遺構は調査区西側の平坦地に集中して検出された。集石及び石を楕円形に並べた組石があり、石の下に小判形の掘り込みをもつものもみられる。なお、付近には墓壙群があり、なんらかの祭祀の場と考えられる。

〈焼土遺構〉

調査区の東側３基、中央部で１基、西側で１基検出されている。規模はいずれも45×30㎝程度で比較的よく焼けている。いずれも現地性のものと考えられる。

〈平安時代の竪穴住居跡〉

平安時代の住居跡は、調査区中央付近でまとまって検出されている。斜面上部であるため、埋まり切らずに窪地として残っているものも3棟みられた。住居跡の平面形は隅丸方形で、規模は4～5m四方のものが多い。深さは50～70cmである。大半は焼失家屋で床面から多量の炭化材と焼土が検出された。カマドの方位は東側に設置されているものが7棟、西側、南側、北側、不明が各1棟である。煙道部は4棟が刳り貫き式、1棟が掘り込み式で、他は不明である。なお、6棟の住居跡の床面中央から貯蔵穴とおもわれる土坑が検出されている。

〈出土遺物〉

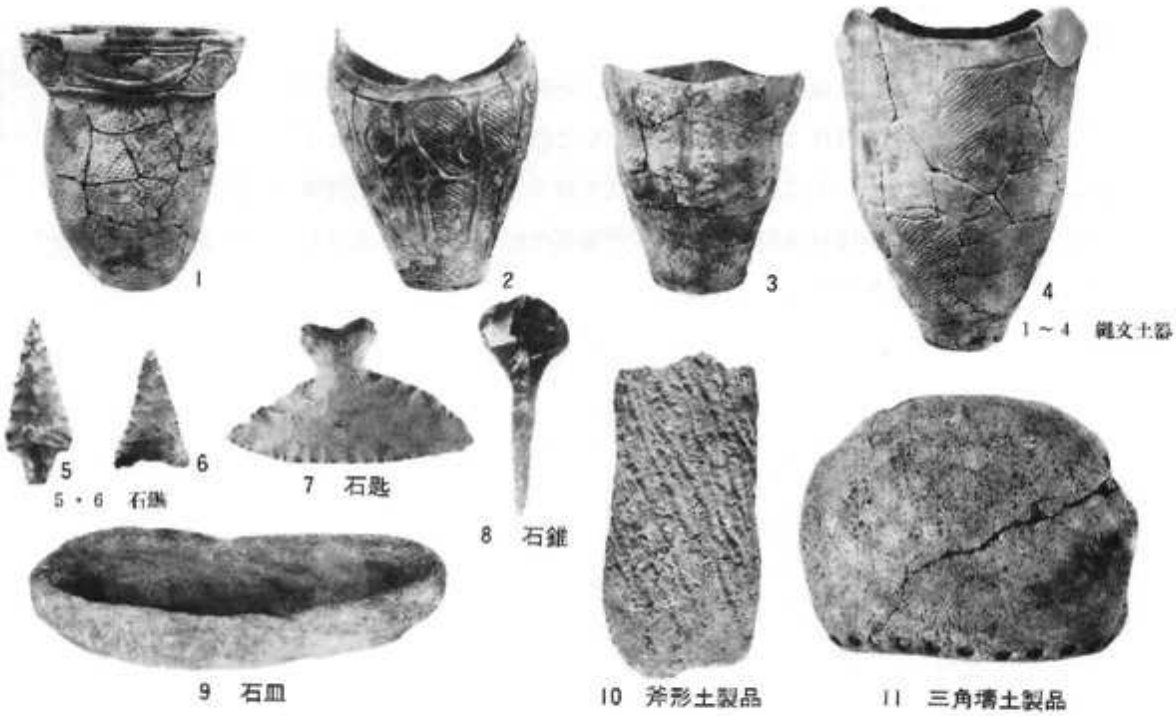
縄文時代の出土遺物には土器、土製品、石器、石製品がある。土器は縄文時代中期中葉から末葉にかけてのもの（大木8・9・10式）が大半を占め、この他に貝殻文をもつ早期の土器と前期及び後期の土器が少量出土している。土製品では円盤状土製品、斧形土製品、三角壔土製品、環状土製品などが見られる。石器では石鏃、石匙、石錐、掻器・削器類、磨製石斧、磨石、石皿および多数のフレークが、石製品では石棒、有孔石製品、管状石製品などが出土している。

平安時代の遺物としては土師器の甕や須恵器、刀子や鉄鏃・鋤先などの鉄製品、琥珀玉などが見られるが量は少ない。

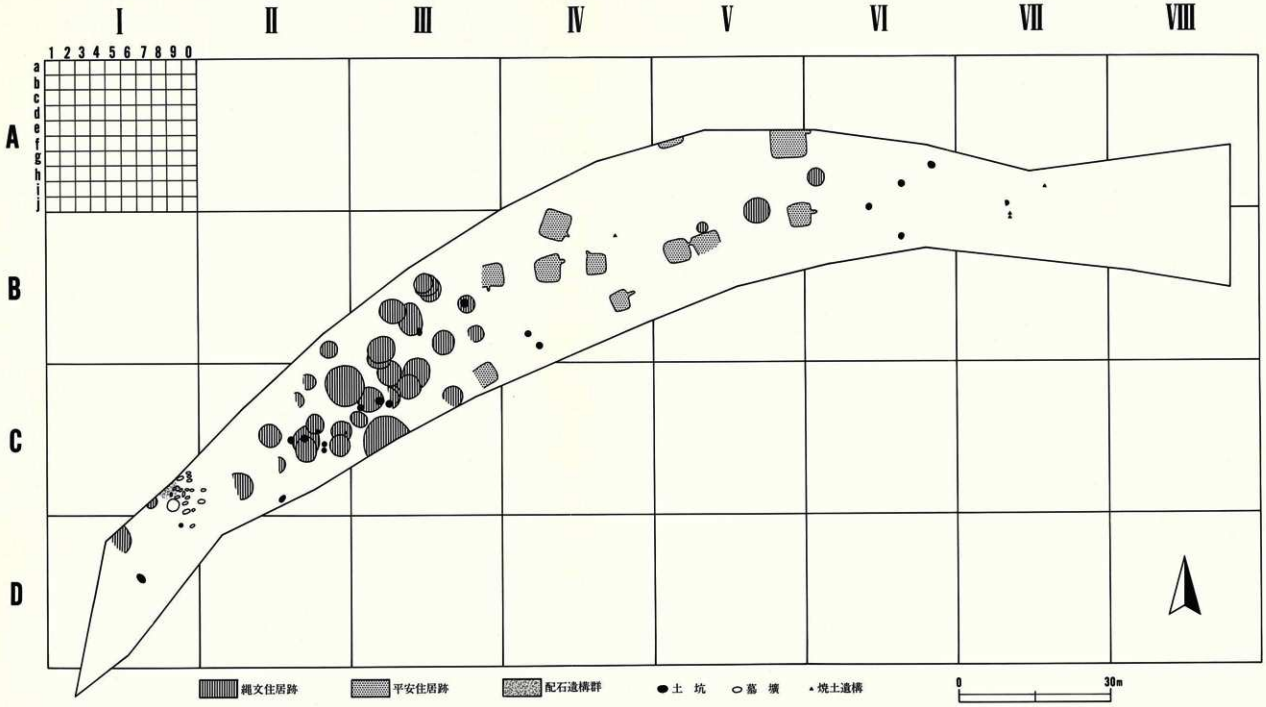
3．まとめ

今回の調査により、本遺跡は縄文時代早期、前期、後期にかけて何らかの生活の場として、縄文時代中期及び平安時代においては集落として利用されていたことが明らかとなった。本遺跡に隣接する尾根からも土器が多数表採されており、付近一帯が大規模な集落だった可能性も考えられる。また、調査区西側でまとまって墓壙や配石遺構が検出されたことは、集落構造を考えるうえで貴重な資料となった。

遺跡全景



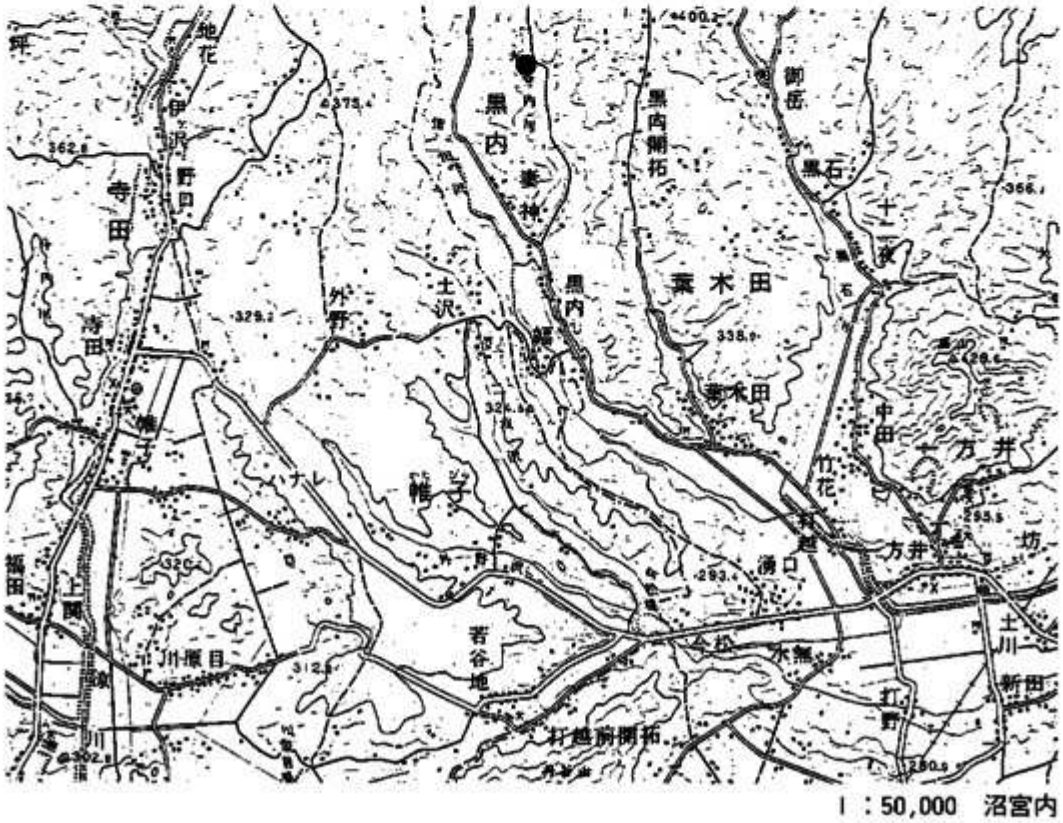
倍田Ⅳ遺跡　遺跡全景・出土遺物


I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII
1 2 3 4 5 6 7 8 9 0
a b c d e f g h i j
A
B
C
D
縄文住居跡
平安住居跡
配石遺構群
土 坑
墓 壙
焼土遺構
0
30m

倍田Ⅳ遺跡遺構配置図

(9) 黒内（くろない）Ⅷ遺跡

所在地	岩手郡岩手町黒内2地割字木谷内9—239ほか
委託者	岩手県盛岡地方振興局　岩手北部土地改良事業所
発掘調査期間	平成4年6月1日～7月31日
調査対象面積	700㎡
発掘調査面積	700㎡
遺跡番号・略号	KE06—0214・KNⅧ—92
調査担当者	高橋正之・高橋英樹
協力機関	岩手町教育委員会



遺跡位置図

1．遺跡の位置と立地

黒内Ⅷ遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線沼宮内駅の西北西9.6km、岩手町一方井の中心部から北西約4kmの位置にあって、岩手郡岩手町大字黒内第2地割字木谷内に所在している。

遺跡は、東日本火山帯に属する七時雨山より放射状に走行する水系によってきざまれた山麓丘陵の先端部斜面に立地している。調査区の標高は334m～340m程で、中央部から北端部にかけて開墾による段差が認められ、現況は山林原野である。

本遺跡の東側には木谷内沢を挟んで倍田Ⅳ遺跡が隣接している。

2．調査の概要

検出された遺構は、竪穴状遺構5基、埋設土器1基、土坑9基、旧沢跡で、縄文土器、土製品、石器、石製品等が出土している。

〈竪穴状遺構〉

平面形はいずれも円形、不整円形を呈し、規模も最大3.2×3.5m、最小2×2.1mと小型で、埋土より若干の縄文土器片やチップが検出されている。

〈埋設土器遺構〉

CⅣグリッド北端で、縄文時代後期前葉に比定される粗製深鉢形土器を正立状態で埋設している遺構が1基検出された。掘り込みは暗褐色土から地山に及んでいる。深鉢形土器の大きさは口径25cm、高さ30cm程である。

〈土　　坑〉

検出された土坑は調査区の南側斜面、中央平坦部、北側斜面に散在し、平面形は円形、楕円形が主体である。規模は、径が最小70cm×75cm、最大120cm×135cmと差があるが、長径1m台に7基が該当する。断面形は、ビーカー状、袋状、皿状、浅鉢状に大別される。大半の土坑は共伴遺物が若干の縄文土器片、チップと少なく時期の特定は困難であるが、埋土等の状況から縄文時代のものと推定される。なおHⅥ1号では副葬品と目される環状石製品3点が底面中央部から検出され、土壙墓の可能性が高い。

〈旧 沢 跡〉

調査区の北端HⅥ、ⅠⅥグリッドから南東方向FⅦ、GⅦグリッドにかけて緩やかに落ち込む沢跡が検出された。長さ約11m、幅1.2m～1.4m、深さ0.4m～0.7mの規模を有し、小礫に混じって埋土より多数の磨耗した縄文土器片、フレイク、チップ、石棒破損品、石皿、凹石、磨石、有孔石製品、茸状土製品等が出土している。本遺跡ではこのような遺物密集ブロックが他に調査区東斜面DⅤ、DⅥ、EⅤ、EⅥグリッドでも認められている。

〈出土遺物〉

60%の遺物が調査区中央の東側緩斜面及び旧沢跡に集中しており、これらの大部分は縄文時代中期、後期、晩期の土器で、少量ながら早期、前期の土器も比較的まとまった状態で出土している。器種も深鉢、浅鉢、壺、椀、台付、注口、ミニチュア土器と多様で、特に晩期大洞C_1式、大洞C_2の流麗な文様帯を有する皿の出土例が多いのが注目される。

石器は石鏃、石匙、石篦、石錐、磨製石斧、半円形偏平打製石器、凹石、磨石、石刀、石皿等が出土しており、フレイクやチップを含めるとその総数は220点に及ぶ。他に本遺跡では環状石製品、有孔石製品に加えて茸状土製品が出土している。

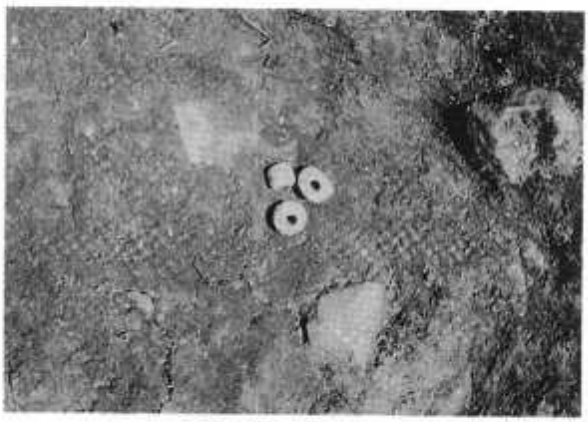
3．まとめ

今回の調査の結果、本遺跡では生活の拠点となる竪穴住居跡等の遺構は検出されなかったが、調査区中央の東側斜面や沢跡を捨て場あるいは墓域として縄文時代中期・後期・晩期の長い期間にわたって利用されていたことが明らかになった。地形環境・遺物等の分布状況などから、集落の主体部は、調査区域外の一段高い（約１ｍ程）北側平坦地に存在するものと推測される。

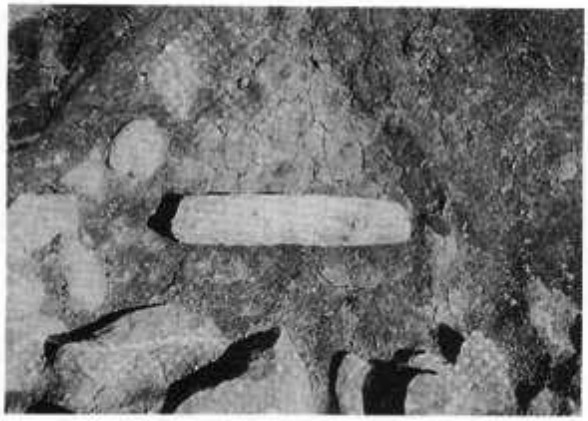
竪穴遺構

沢跡

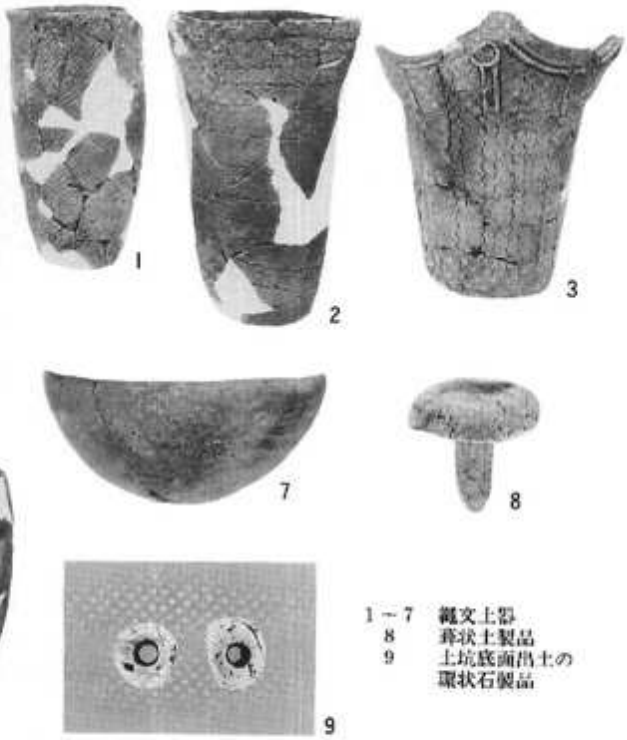
埋設土器



環状石製品出土状況

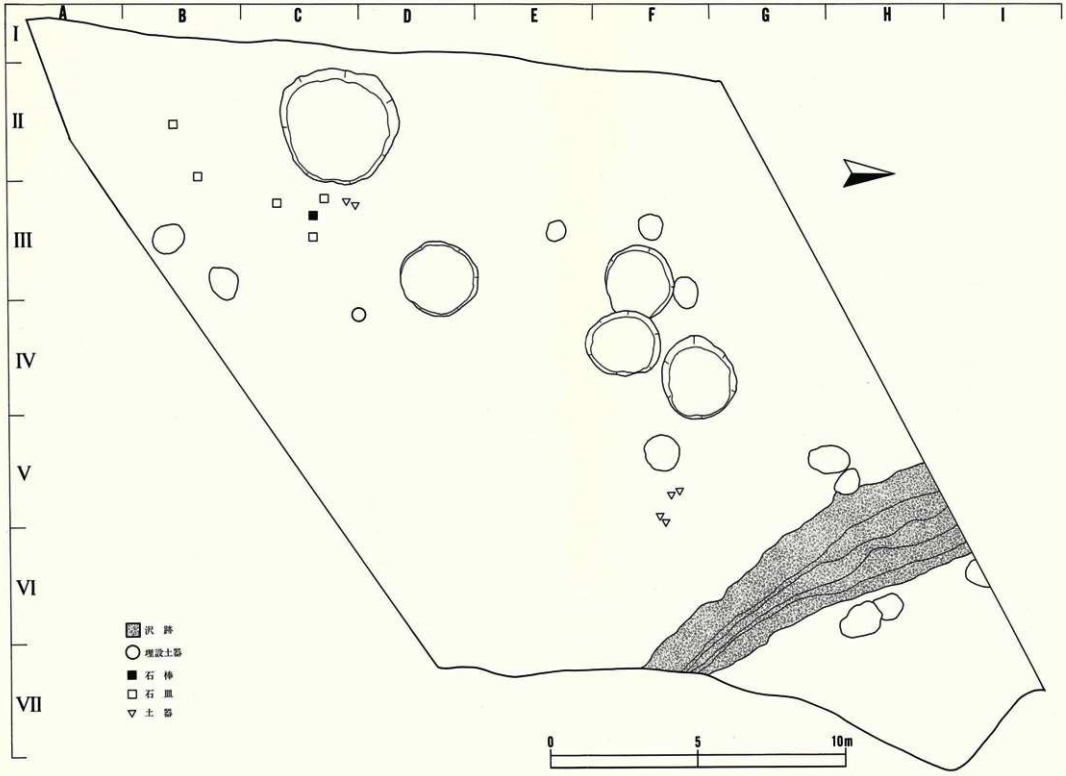


石棒出土状況



1～7　縄文土器
8　蕨状土製品
9　土坑底面出土の環状石製品

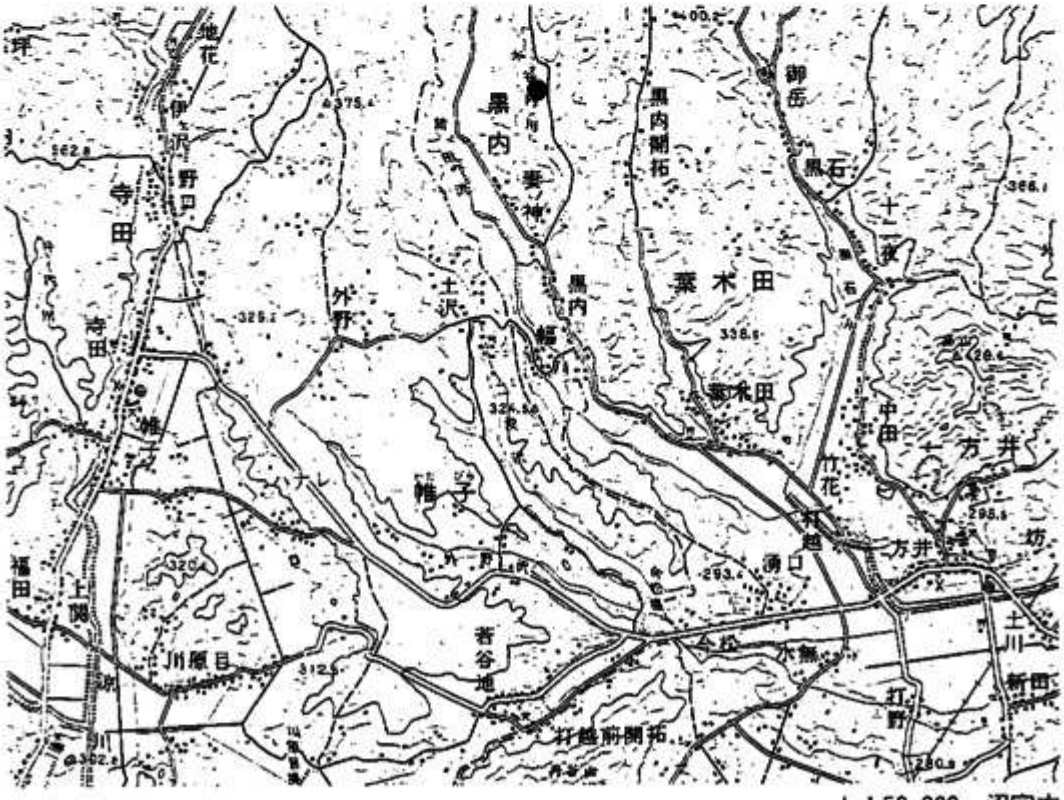
黒内Ⅷ遺跡　検出遺構・出土遺物



黒内Ⅷ遺跡遺構配置図

(10) 黒内（くろない）XIII遺跡

所在地	岩手郡岩手町黒内2地割字木谷内4－14ほか
委託者	岩手県盛岡地方振興局　岩手北部土地改良事業所
発掘調査期間	平成4年8月1日～11月13日
調査対象面積	1,100㎡
発掘調査面積	1,100㎡
遺跡番号・略号	KE06—0262・KNXIII—92
調査担当者	高橋正之・高橋英樹
協力機関	岩手町教育委員会



1：50,000　沼宮内

遺跡位置図

1．遺跡の位置と立地

黒内XIII遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線沼宮内駅の西北西約9.6km、岩手町一方井の中心部から北西約4kmの位置にあって、岩手郡岩手町大字黒内第2地割字木谷内に所在している。遺跡は、東日本火山帯に属する七時雨山より放射状に走行する水系によってきざまれた山麓丘陵の先端部斜面に立地している。調査区の標高は337m～338m程で、南北に細長く、現況は牧草地・山林である。

本遺跡の北東方向には木谷内川を挟んで黒内VIII遺跡・倍田遺跡が隣接している。

2．調査の概要

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡15棟、竪穴状遺構6基、埋設土器1基、土坑9基で、縄文土器、土製品、石器、石製品が多数出土している。

〈竪穴住居跡〉

調査区東側の緩斜面に連鎖状に分布し、規模は最大6.1m×6.3m、最小2.2m×2.3mと差があるが、長径4.5m～5m台に12棟が該当する。平面形は何れも円形、不整円形を呈する。炉の構成形態は地床炉、石囲炉、石囲埋甕炉、複式炉、複々式炉で、縄文時代中期（大木9式、10式）のものと推定される。PII住居跡1号やQIII住居跡1号は2.2m×0.4m、1.6m×0.7m規模の見事な炉を有している。

〈竪穴状遺構〉

平面形は円形、不整円形を呈し、規模は最大5.8m×6.2m、最小3.6m×3.8mである。いずれも竪穴住居跡と重複し、埋土より比較的まとまった状態で縄文時代中期（大木8a式、8b式、9式）の深鉢形土器やフレイク・チップが出土している。とくにVIV住居跡1号と切り合うUIV竪穴状遺構1号では80点に及ぶ多量のフレイク・チップが出土している。

〈埋設土器遺構〉

MIII住居跡1号・2号に隣接するMIIグリッド東端で、縄文時代晩期大洞C_2式に比定される粗製甕形土器を正立状態で埋設している遺構が1基検出された。掘り込みは暗褐色土から地山に及んでいる。甕形土器の大きさは口径30cm、高さ45cm程である。

〈土　　坑〉

検出された土坑は調査区の南東斜面、中央平坦部および北東斜面に散在し、9基中7基が竪穴住居跡と切り合う状態で検出された。平面形は円形、楕円形が主体である。規模は、径が最小70cm×95cm、最大190cm×210cmと差があるが、長径1m台に7基が該当する。断面形は、ビーカー状、フラスコ状、皿状、浅鉢状に大別される。大半の土坑は共伴遺物が若干の縄文土器片、チップと少なく時期の特定は困難であるが、埋土等の状況から縄文時代のものと推定され

る。なおPⅢピット1号、SⅣピット1号では底面より比較的まとまった状態で土器が出土している。

〈出土遺物〉

70%の遺物が調査区中央JⅢ・JⅣ・KⅢ・KⅣ・LⅢ・LⅣ・MⅢ・MⅣ・NⅢ・NⅣグリッドの東側緩斜面に集中しており、これらの大部分は縄文時代中期（大木8b式・大木9式・大木10式）、後期（仙台湾方面の宮戸Ⅱ式、東北北部の十腰内Ⅰ式、十腰内Ⅱ式、十腰内Ⅲ式）晩期（大洞BC式、大洞C_1式、大洞C_2式）に比定される土器で、少量ながら羽状縄文の文様帯を有し、胎土に繊維の混入が認められる前期の土器も比較的まとまった状態で出土している。器種も深鉢・浅鉢・壺・椀・皿・台付・注口・ミニチュア土器と多様で、特にMⅢ住居跡1号、RⅡ住居跡1号では晩期大洞C_1式・大洞C_2の流麗な文様帯を有する土器がほぼ完形の状態で出土している

石器は石鏃、石匙、石篦、石錐、磨製石斧、打製石斧、凹石、磨石、石刀、石皿等が出土しており、フレイクやチップを含めるとその総数は300点に及ぶ。他に本遺跡では石剣・石棒などの破損品に加えて土版、ボタン状土製品、角状土製品、甲虫状土製品、動物を模したと思われる異形土製品等が出土している。

3．まとめ

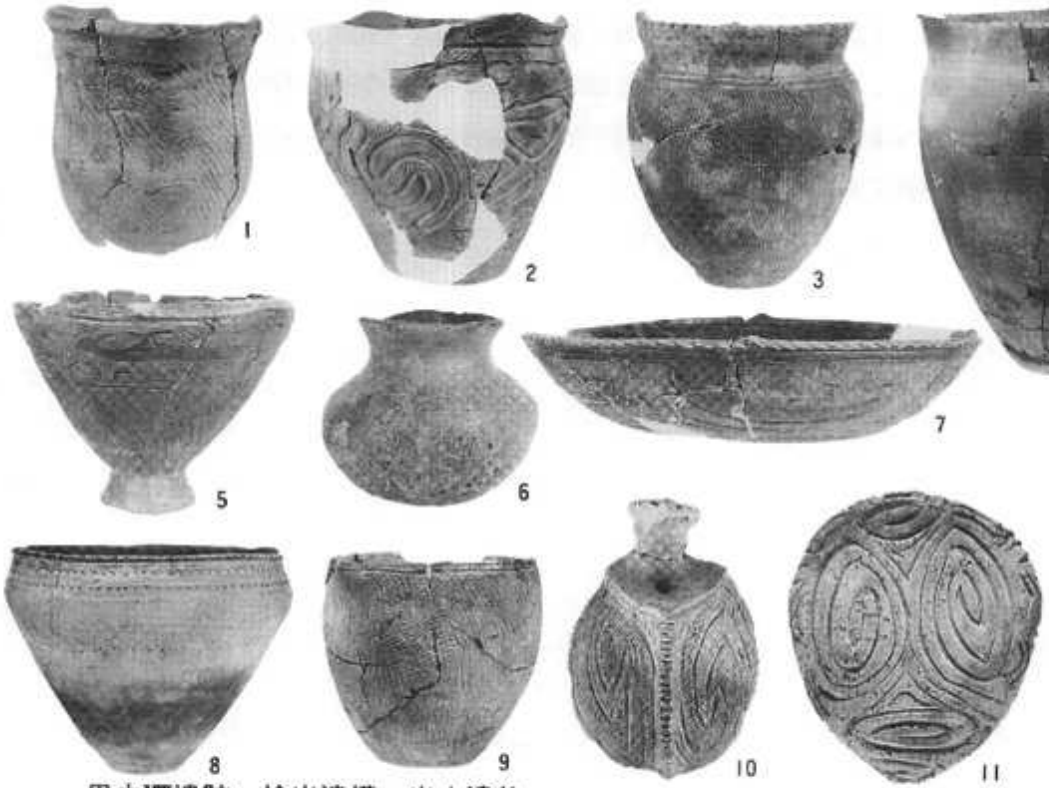
今回の調査の結果、本遺跡では縄文時代中期・後期・晩期の長い期間、連続的に集落が営まれ、人々の生活の場として利用されていたことが明らかとなった。今後、遺構・遺物の検討・分析をとおした詳細な遺跡の性格や倍田Ⅳ遺跡・黒内Ⅷ遺跡をはじめとする周辺諸遺跡との関連性などの解明が課題である。

石囲炉を有する竪穴住居跡

複式炉を有する竪穴住居跡

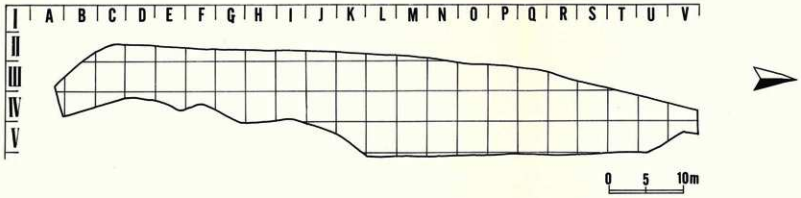
複式炉を有する竪穴住居跡

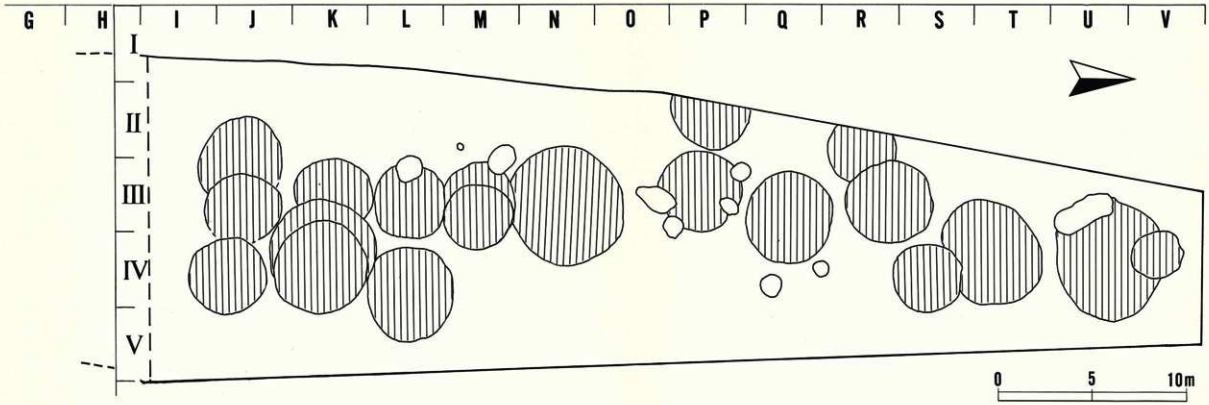
重複する竪穴住居跡



1～9　縄文土器
10　甲虫状土製品
11　土版

黒内Ⅷ遺跡　検出遺構・出土遺物





黒内XIII遺跡遺構配置図

(11) 田代（たしろ）VI 遺跡

所　在　地　九戸郡九戸村大字江刺家第３地割字久保頭21ほか

委　託　者　岩手県二戸地方振興局　二戸土地改良事業所

発掘調査期間　平成４年４月９日～５月15日

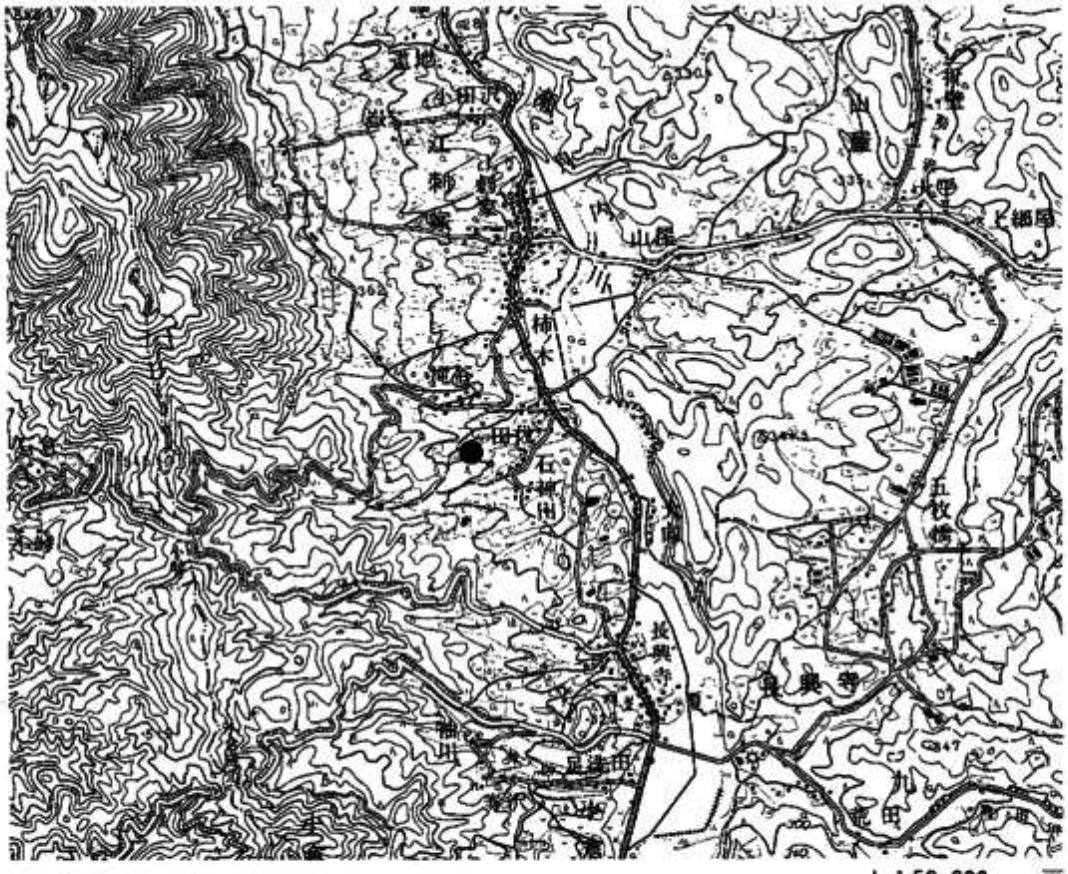
調査対象面積　1,000㎡

発掘調査面積　1,000㎡

遺跡番号・略号　ＪＦ02―2190・ＴＳVI―92

調査担当者　斎藤　實・工藤剛司

協力期間　九戸村教育委員会



１：50,000　一戸

遺跡位置図

1．遺跡の立地

田代VI遺跡は、八戸自動車道九戸インターチェンジの東南約500m、国道340号の西側に立地し、瀬月内川により形成された低位段丘上に立地する。遺跡の標高は275～285mである。調査区の現況は、畑地、山林、果樹林である。遺跡の南側に田代IV遺跡が隣接し、南東側約200mに田代遺跡が所在する。

2．検出された遺構

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡1棟、土坑2基である。

〈竪穴住居跡〉

竪穴住居跡は、調査区Ⅰ区北側斜面で検出された。遺構は、開削の際に埋土上面が削平され、かつ果樹の木根により撹乱を受け、さらに北側の大半が消失しているなど遺存状態は良好ではない。残存状況から、平面形が不整の円形を呈すると推定され、規模は径約3.6mと推測され、壁高が南壁で約14cmである。遺構の北寄りに平面形が長方形を呈する石囲炉をもち、柱穴がやや円状に6個、その内の2個と対応する位置の南側壁付近に2個の柱穴が検出された。

遺構の時期は出土遺物から縄文時代中期後葉と思われる。

〈土　　坑〉

土坑は、Ⅰ区・Ⅱ区それぞれ1基づつ検出された。平面形はいずれも円形を呈し、規模は径約35～50cm、深さ10～15cmである。

遺構の時期は出土遺物から縄文時代中期後葉と思われる。

〈出土遺物〉

遺物は、竪穴住居跡と土坑から縄文時代中期後葉の土器が出土している。竪穴住居跡からは南壁付近東側より胴部上半が欠損した土器1個体、また、炉付近の床面より約2分の1が欠損した土器1個体が出土している。土坑からは約3分の1が欠損した土器1個体が出土している。

遺構外からの出土遺物は、Ⅰ・Ⅱ区ともに縄文時代前期・中期の土器が出土している。石器はフレイクが極めて少量出土している。

3．まとめ

調査の結果、Ⅰ区から縄文時代中期後葉の竪穴住居跡、Ⅰ・Ⅱ区から縄文時代の土坑2基が検出された。このことから縄文時代中期後葉の生活圏を示唆する貴重な資料が得られた。

遺跡は、南側に隣接する田代IV遺跡では配石遺構など祭祀に関連する遺構が確認され、南東側約200mに所在する田代遺跡では集落跡が確認されるなど、検出された遺構などから、これらの遺跡と何らかの関連をもつ集落跡が近郊に存在するものと思われる。

遺跡遠景

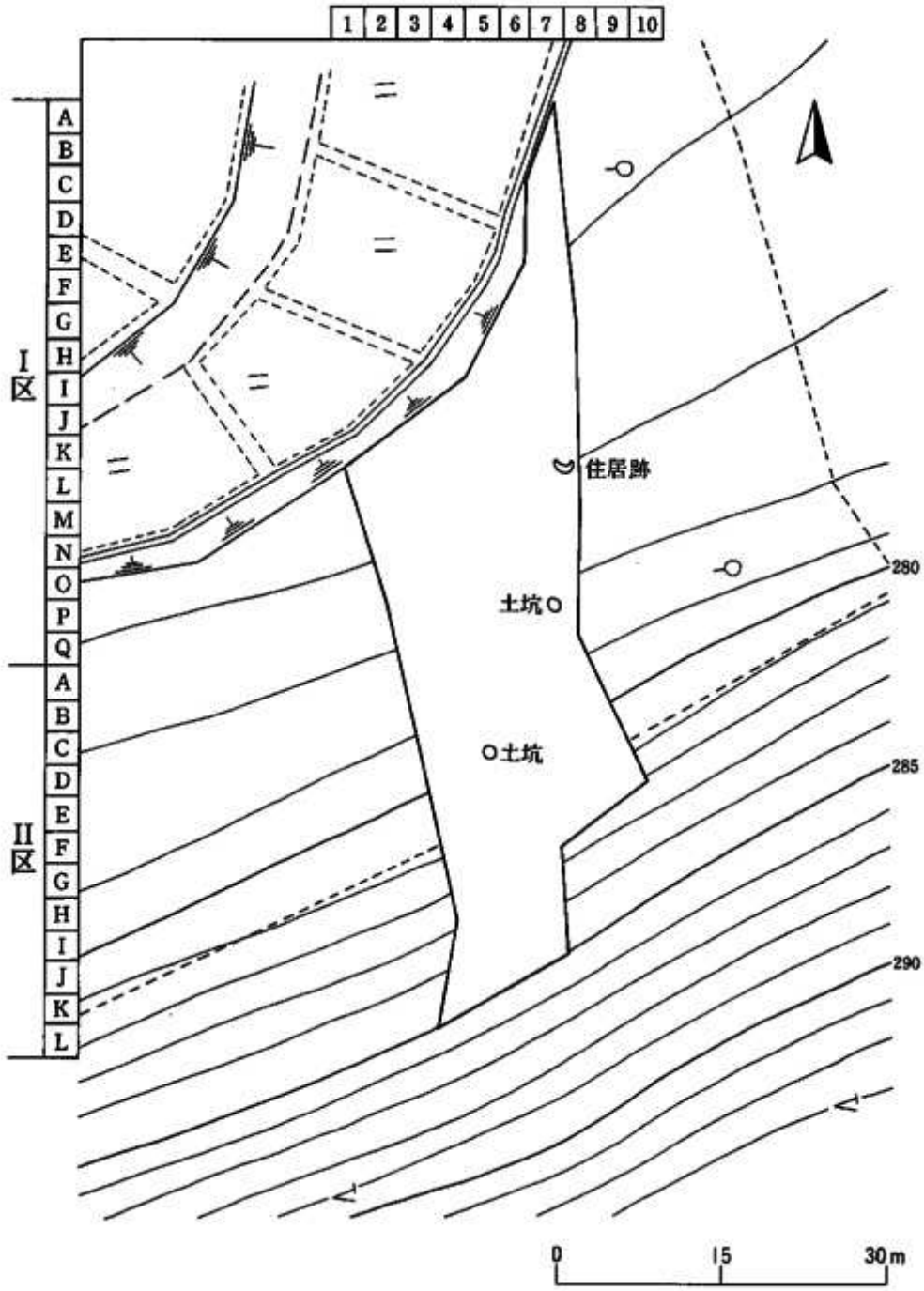
竪穴住居跡

石鏃

不定形石器

縄文土器

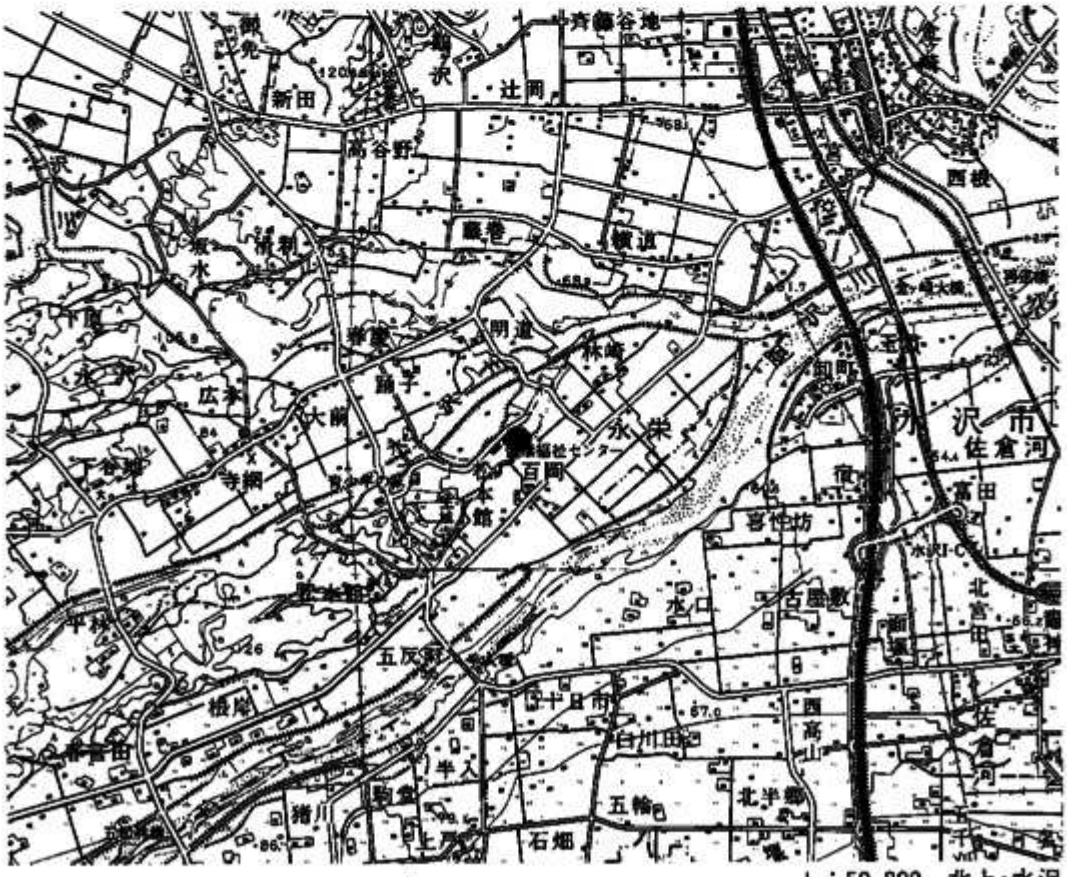
田代Ⅵ遺跡　検出遺構・出土遺物


1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
A B C D E F G H I J K L M N O P Q
I区
A B C D E F G H I J K L
II区
住居跡
土坑
土坑
280
285
290
0
15
30m

田代Ⅵ遺跡遺構配置図

(12) 柏山館跡

所在地	胆沢郡金ヶ崎町大字永栄字上宿115ほか
委託者	岩手県生活福祉部
発掘調査期間	平成4年10月7日～11月6日
調査対象面積	1,000㎡
発掘調査面積	1,000㎡
遺跡番号・略号	NE05－1263・KYT－92
調査担当者	高橋義介・菅原敬悦
協力機関	金ヶ崎町教育委員会



遺跡位置図

1．遺跡の立地

柏山館跡は、東日本旅客鉄道東北本線金ヶ崎町駅の南西側約3.7kmに位置し、胆沢川左岸の河岸段丘上に立地している。遺跡の標高は76～77m前後で、現況はサンピア金ヶ崎の駐車場と草地である。

2．調査の概要

検出された遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構6基、時期が不明な土坑20基、柱穴状土坑180基である。うち今年度遺構の精査・実測を行ったのは陥し穴状遺構4基である。遺物は出土していない。

〈陥し穴状遺構〉

平面形はいずれも細い溝状を呈している。規模は開口部径が1.8～3.4m×30～45cm、底部径が1.5～3.8m×12～20cm、深さが1m前後である。2基は1.6mの距離で並列している。

〈土　　坑〉

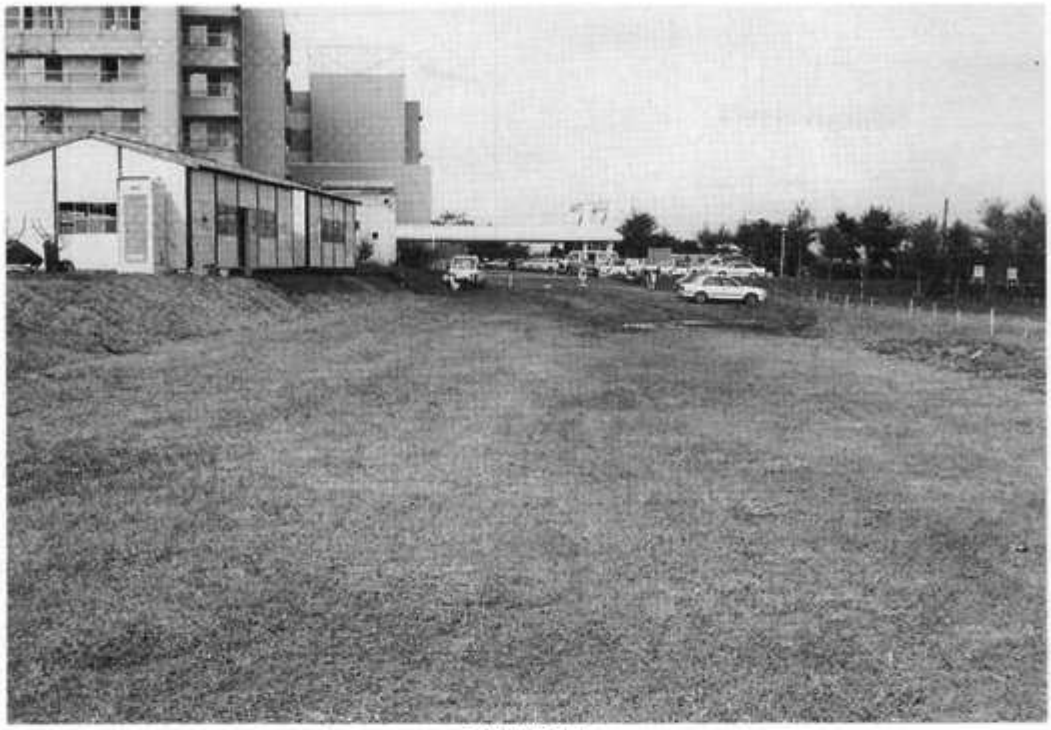
平面形は円形、楕円形、方形があり、規模は30～1.4m前後である。

〈柱穴状土坑〉

平面形は円形が主体を占めており、他に方形や楕円形もある。規模は20～40cmで、一部に掘り方を持つものもある。

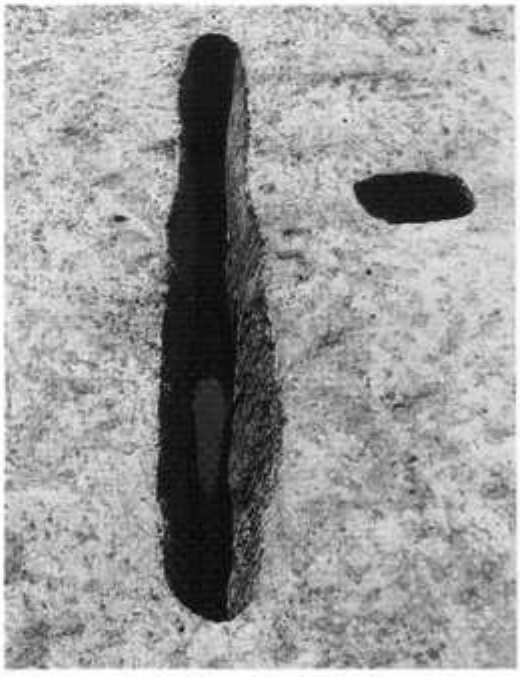
3．まとめ

今年度の調査は粗掘りと遺構の確認が主たるものであり、柏山館の城域における中世と思われる遺構と遺物は検出されなかった。中世城館に先行する縄文時代の狩猟の場として利用されていたことが判明した。来年度の調査区は、城館の東側地域にあたることから中世に関連する遺構が検出されることが十分に考えられる。



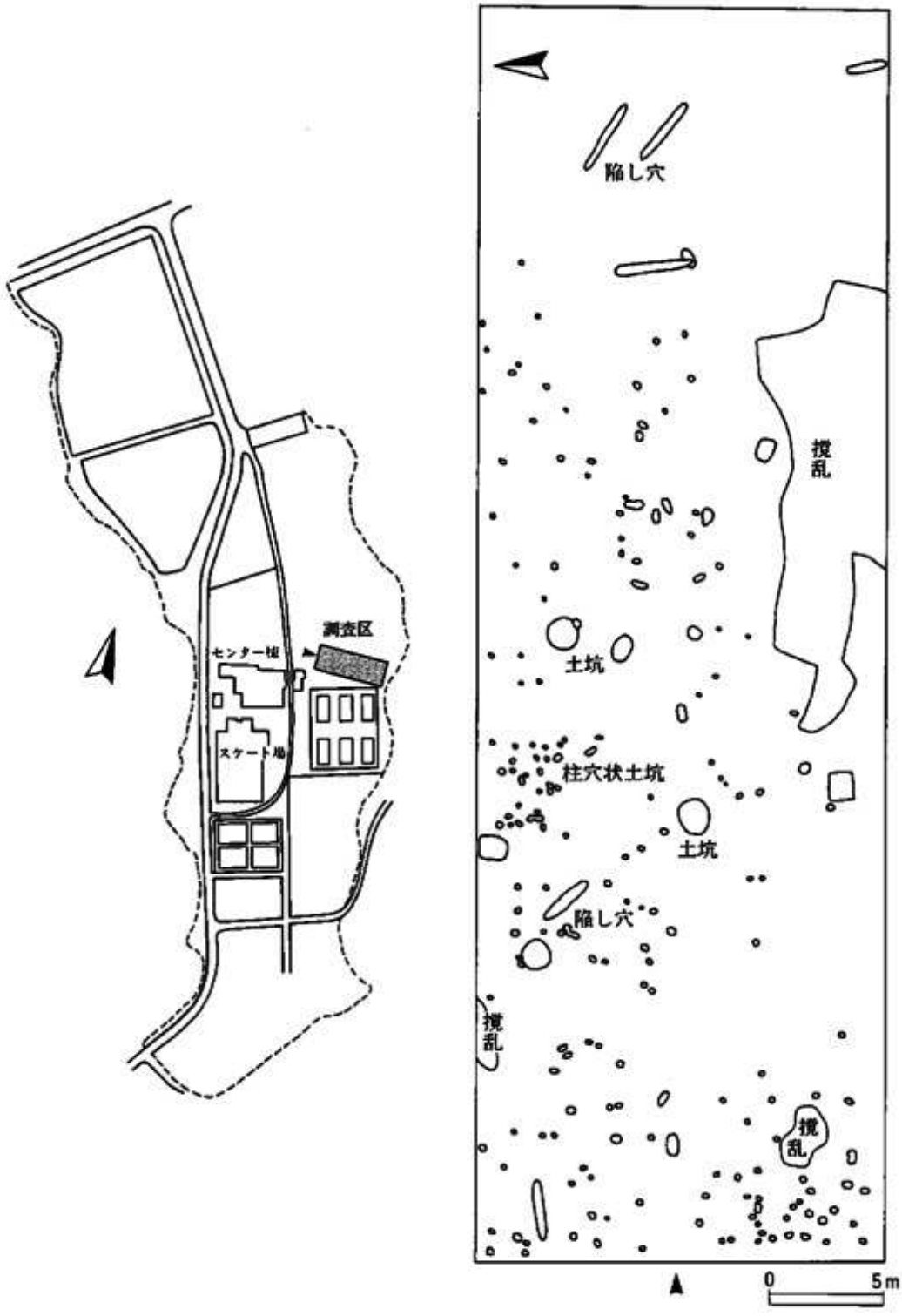
調査区近景

陥し穴状遺構



陥し穴状遺構

柏山館跡　検出遺構



柏山館跡遺構配置図

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事兼所長	小笠原　喜　一
副　所　長	高　橋　敬　明

[管　理　課]

管理課長（兼）	高　橋　敬　明
課長補佐	森　岡　陽　一
主　　事	佐　藤　　理

[調　査　課]

調査課長	村　上　康　昭
課長補佐	鈴　木　惠　治
〃	三　浦　謙　一
主任文化財専門調査員	高橋　與右衛門
〃	工　藤　利　幸
〃	中　川　重　紀
〃	藤　村　敏　男
〃	高　橋　義　介
〃	高　橋　正　之
〃	渡　辺　洋　一
〃	佐々木　清　文
文化財専門調査員	斎　藤　　實
〃	佐　瀬　　隆
〃	千　葉　孝　雄
〃	斎　藤　博　司
〃	東海林　隆　幹
〃	佐々木　　弘
〃	川　村　　均
〃	鈴　木　貞　行
〃	伊　東　　格
〃	斎　藤　邦　雄
〃	神　　敏　明
〃	佐々木　信　一
〃	小　原　眞　一
〃	酒　井　宗　孝

[資　料　課]

資料課長	村　松　義　夫
文化財専門調査員	高　橋　一　浩
嘱　　託	根　橋　文　一
〃	吉　田　十　次
運転技士兼技能員	佐　藤　春　男
文化財専門調査員	鎌　田　　勉
〃	松　本　建　速
〃	笹　平　克　子
〃	花　坂　政　博
〃	佐々木　　務
〃	金　子　昭　彦
〃	濱　田　　宏
〃	星　　雅　之
〃	羽　柴　直　人
〃	高　木　　晃
期限付専門職員	小山内　　透
〃	鎌　田　精　造
〃	阿　部　勝　則
〃	田　中　元　明
〃	柳　田　　磨
〃	菅　原　敬　悦
〃	千　葉　　悟
〃	熊　谷　博　由
〃	新　倉　信一郎
〃	山　口　博　英
〃	工　藤　剛　司
〃	高　橋　英　樹
〃	溜　　浩二郎
〃	佐　藤　修　一

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第195集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(平成4年度分)

平成5年3月25日　印刷
平成5年3月30日　発行

発行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話　(0196) 38—9001～2

印刷　株式会社熊谷印刷
〒020　盛岡市上田1丁目6番49号
電話　(0196) 53—4151(代)

© 財岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1993